

ざるに至る時は、馬車の窓を固く閉鎖するのであるが、汽車に乗る時の如く、歩行を餘儀なくせられる場合には、従者が布を其の兩側に張りつゝ行くので、婦人は其の布に隠れて、進歩の姿を顯はさないものである。

さて右のセネート・ハウスのことについて、一言説明せねばならぬが、印度の大學は、教授する處でなくして、試験をする處である。然らば講義をする處はどこかといふに、大學に附屬せるカレッジが幾つもある。然らば講義をするへ出席するのである。かくてB A試験にせよ、M A試験にせよ、試験は皆大學にいつて之を受ける。そこで大學は、之を試験すべき大廣間を有するに止まる。此の建物を、甲谷他大學では、セネート・ハウスといふのである。是れ大學には、セネートといふ團體があつて、万事を議定するから、其の評定所といふ如き意味なのである。セネートの員數は、七十五人より百人に至り、甲谷他大學では、印度總督之が議長チヤンセルラとなり、其の他の大學、即ちマドラス、孟買、アラハワッド、及びブンジャブに於ては、地方の政務長官之が議長となることになつてゐる。

とになつてゐる。

然らば此のセネート・ハウスでは、全く講義といふとは行はないかといふに、さうでもない。即ち大學卒業生等に、特殊専門の學を講述する途も開けてゐるので、此の講述をする人をリーダーといひ、毎年一人づゝ學識ある人より之を選任するのである。此の年明治四十四年には、我日本人山上曹源氏が其の選に當つて、組織的佛教といふ題で、一月二十七日から講筵を開いたことは、愉快なことである。

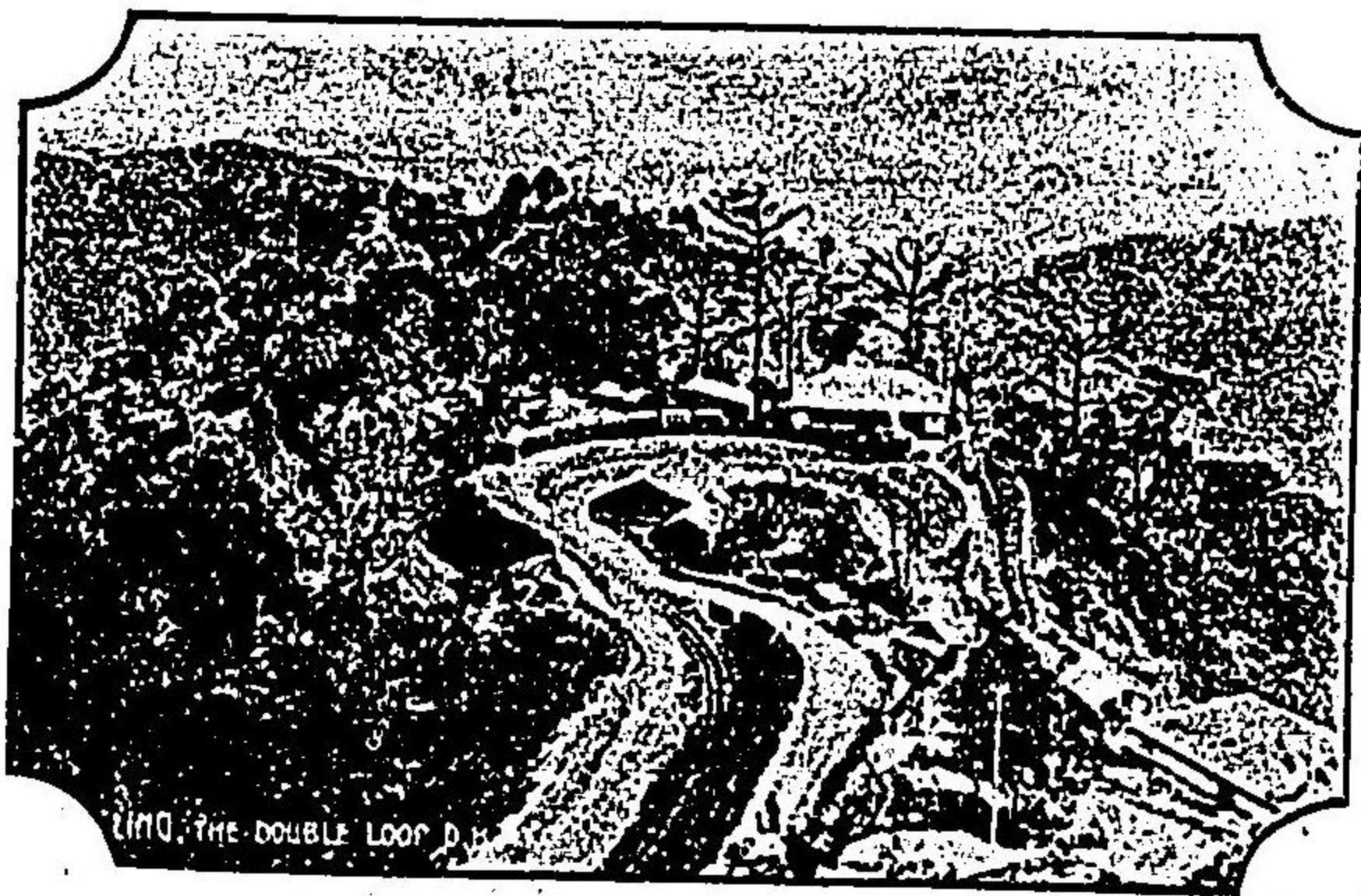
四〇 ダーजीリング

ダーजीリングといへば、印度から西藏に越える國境にある都會たることは、直ちに知られるのであるが、實に此の地は、印度から西藏の方へ突き出た地方の高い山の上にある。こゝに登臨して其の北方を瞰下し、脚下に連なれる峯巒のあなたに、世界の秘密國が雲の中に封鎖されてゐるかと思へ

ば、一種の感を起さざるを得ない。こゝは海拔七千尺の高處にあつて、氣候は甚だ寒冷である。

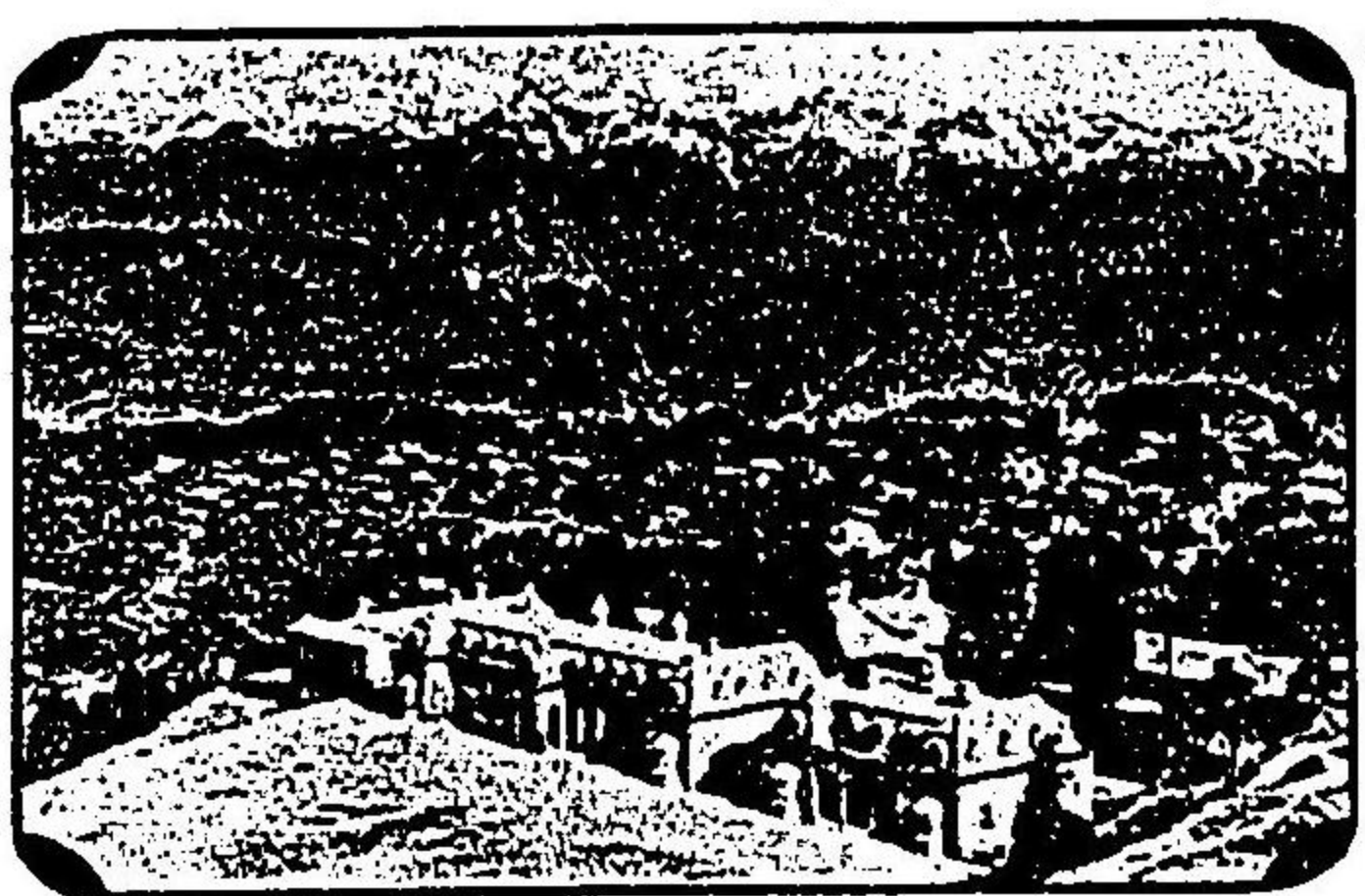
シリグリといふ處から登山鐵道に乗る。

電車の如き小列車が、崎嶇羊腸たる峻坂を、蛇のやうに迂曲して登るのは、實に容易の事でない。餘程登つたと思ひの外、先刻通過した目標の處へ復來てゐるので、唯少し上の方へ漸くにして運ばれたのである。かくの如き有様でシリグリからダージョーリングまで、五十一哩の間を、六時間にして到達する。此の線路は、一八九九年の五月に起工して、一八八一年の七月に落成したので、之に要したる經費は一哩三千ポンドであつた。尤も道路は、其の前から開けたので、道路を



(道鐵山登ケンリジョーダ)

造る爲には、一哩六千ポンドを費したといふことである。



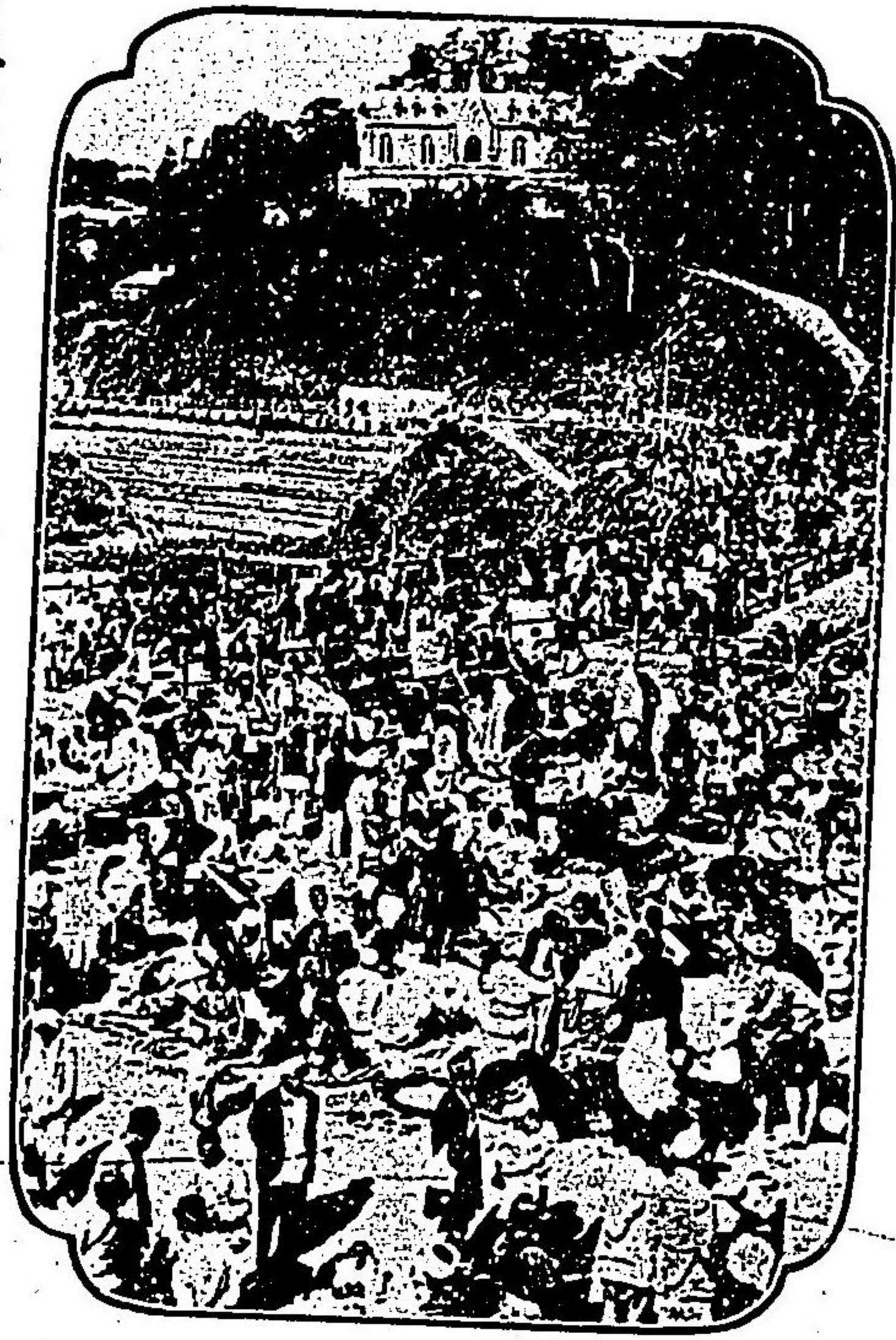
(景展市ケンリジョーダ)

ダージョーリングの町は、山の頂きから山腹にかけて作られてあるが、人口はなか／＼少くない。併し、恰も我が輕井澤の如く、夏と冬とて人数の差が著しい。大要冬は五萬、夏は其の倍にもなるであらう。余のこゝについたのは、一月二十三日、明治四十四年であつたが、其の前週の平均温度、華氏の四十七度であつた。從來約八十度の空氣に馴れて居つた余には、氣候の劇變の爲に、病を獲るに至つた。

世界最高のエヴェレスト峯は、ダージョーリングではまだよく見ることが出来ない。拂曉(四時)旅館を出て、防寒の用意をして、朔風に嘶く胡馬に一鞭を加へ、更にタイガー丘に昇る。すると、遂にエヴェレストは、二萬九千六百尺の巨像を現はすのみ

ならず、朝暈が下界の雲間より昇つて、初めは小さく、漸くにして大きく、瑣々たるキンチンジャンガ峯の白雪に映ずる壯觀は、實に世界の珍とするに足るのである。

ダイジールینگの町には西藏人が多く居る。日曜日には市が開けるが、こゝには種々な人が一場に集まる。西藏人、ネパール人、レプチャス、ブーチアス、數へ来れば隻手を以て算へきれないほどである。



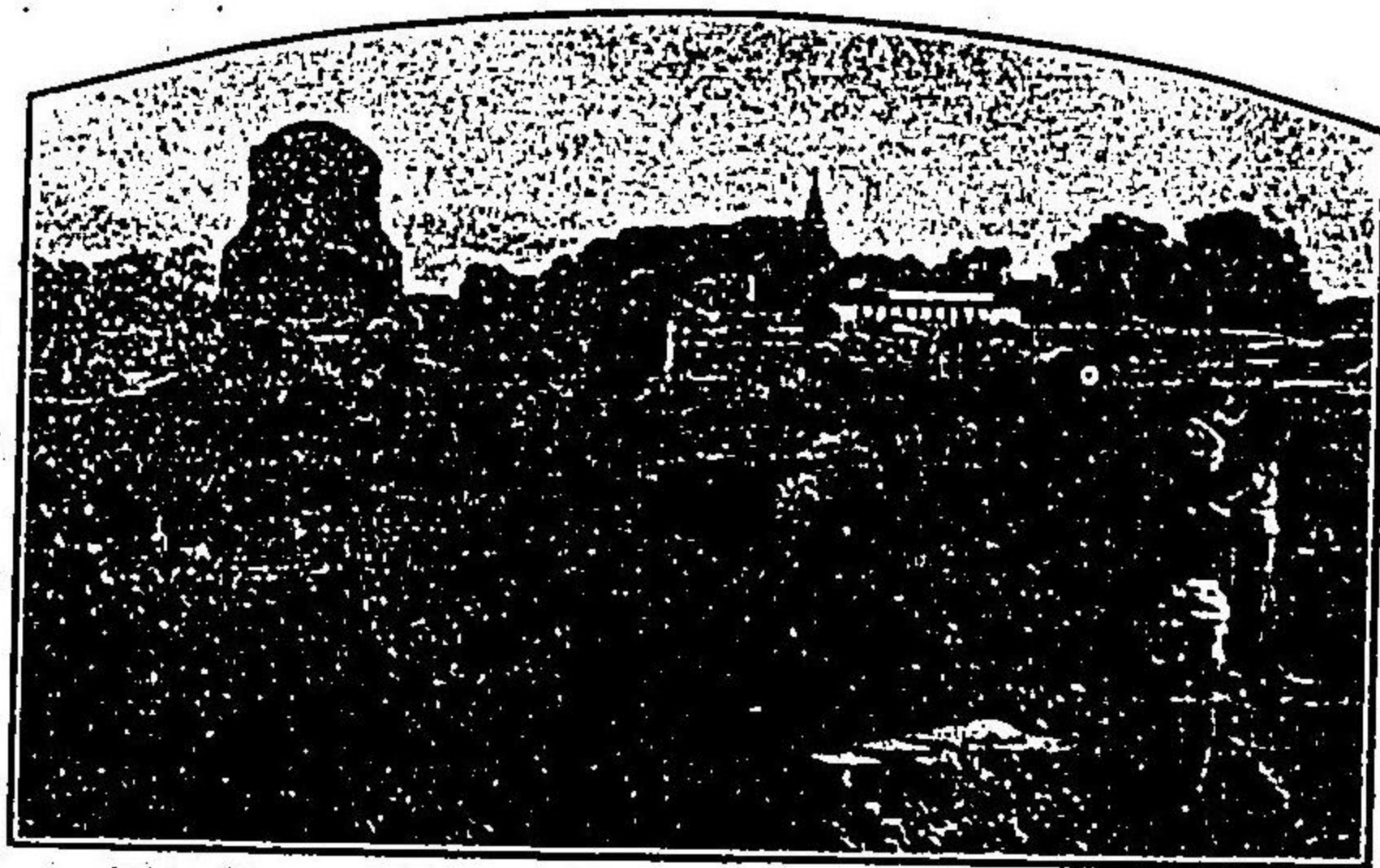
(場市曜日のケンリジグ)

四一 鹿苑及び佛法の根源地

鹿野園は、釋尊説法の靈場として知られたる處で、ベナレスの町から五哩程の距離にある。余はベナレス在住の河口慧海氏等に導かれて、幸に之を視ることを得た。鹿苑に入らんとする前方、道の左側に塔がある。(此の塔は後に回教徒の建てたもので、決してものものではない)。こゝで釋尊の五人の弟子は、まだ弟子にならぬ時であつたが、釋尊を迫害しようと思つて居たが、やがて釋尊が樹下に現れると、何とも名狀し難い道德圓滿な相が見えたので、五人の者は、思はず我を忘れて、迫害し得なくなつて、遂に其の弟子となつたといふ處である。釋尊乃ち五人の者に始めて法を説いたといふ處が、即ち今の鹿苑の大記念塔のある邊なのである。此の塔は荒廢に屬したのを、後に修理したものであるが、唯丸い形のみで、別にとり立てゝいふほどのこともない。その側に今寺院があるが、是亦印度教の寺で、釋尊當

年の事に關係あるものではない。

然るに茲に最も人を驚かせるものがある。それは外てはないが、サルナートに發掘されたる土地の中から、昔時の鹿野園の宏大なる建物、其の礎を現はしたことで、堂塔のあと、僧房の形見迄あり／＼と見えるのみならず、多くの佛像も現はれ、特に又阿育王の訓言を刻したる大理石の大圓柱が現はれて、其の上に安置してあつた獅子の彫刻物も、そつくり取り出されたが、是は印度の古彫刻物中、最も珍重すべきものゝ一に數へられてゐる。印度政府は、新に博物館をこゝに建て、其の中に、此の獅子や、佛像や、天蓋や、其の外色々の掘出し物を陳列する計畫をして



(蹟佛るたれらせ掘發にトナリスのヌレナベ)



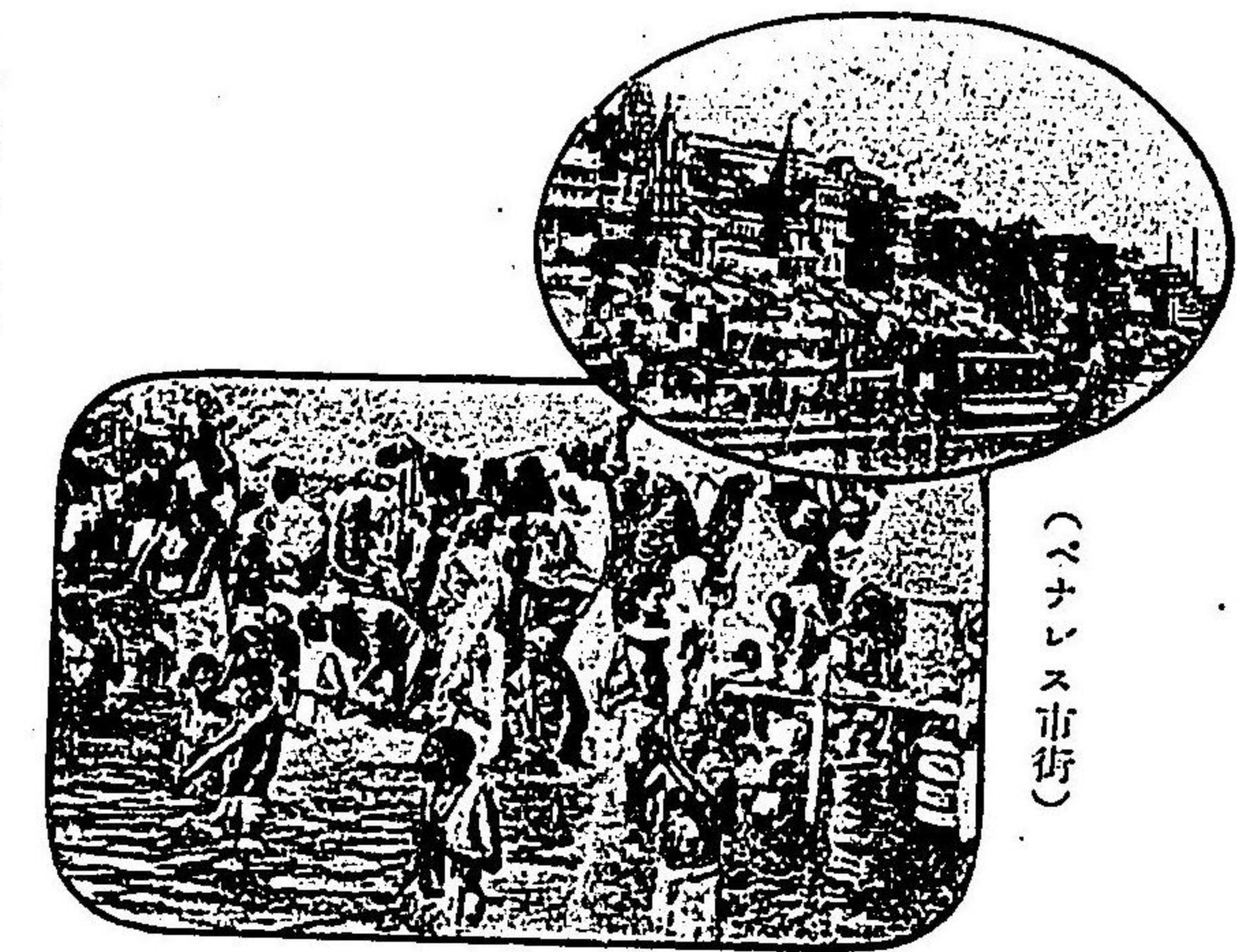
物刻彫の子獅るたれらせ掘發に苑鹿

る。余の參觀にいつた時は、まだ陳列準備中で、開館に至らなかつたが、ざつと見渡したところのみでも、立派なものが随分見受けられたのである。

釋尊が鹿野園に居をトし、ベナレスを以て説法の根源地としてから、約八百年の間は、此の邊が佛教の中心となつてゐたのであるが、其の後佛教が勢力を失ふと共に、佛蹟は次第に荒れ、一一九四年には、ベナレスも回教徒に蹂躪せられ、それから六百年間は、回教の王朝がこゝを支配してゐたが、一七七五年に至つて、遂に英國人の占領する所となつたのである。

ベナレスは、恒河に沿うて築かれた町で、今日は人口二十一萬以上を有してゐるが、舟を中流に泛べて、此の神聖視せられたる河を溯ると、實に美觀と奇觀とを兼ね備へてゐる。朝暾河面にきらめく曉色、夕陽白堊に映ずる晚景、共に一幅の畫圖である。河は神聖視せられたるだけあつて、その流れに體を洗ふ者ひきも切らず、岸の處々には、石の階段や其の他の設備をして、體を洗ふやうに用意せられてある。又印度教の信者は、其の死骸を河岸で

焼いて、遺骨を此の流れに投ぜられるのを以て、極樂往生と心得てゐるから、



(ベナレス市街)

(恒河に屍を日輪を拜す)

白晝猶且岸に嗅い煙の立つことは珍らしくない。舟から翹首して之を窺つて見ると、死骸を白布で包んで、之を薪の上に置いて、火をつけるのであるが、まだよく焼け切らない内に、河に之を投ずるから、河には随分死骸が浮んでゐる。然るに、其の水で體を洗ふ者、口を漱ぐ者、之を呑む者、之を壘に入れて家に運ぶ者、さまざまであるが、さては印度人は、餘りに宗教に捕はれてゐるではないか。

又其の岸で、最も異形を放つてゐる者は、世捨人である。髪を長くのばし

て之を土でこねまはし、乞食の如き風態で、處々の穴に籠つてゐるが、一見頗る恐るべきものである。其の他無言の行をする者、手を永くあげたまゝで居る者等、いろ／＼あるのであるが、最も驚くべきは、死なむが爲にベナレスに來て居る者の多いことである。殊に夫を失つた婦人は、多くはベナレスに來て、其の餘命を送るを常とするのである。かゝる世捨人や、死所をベナレスに求めに來てゐる者の徘徊する中を、放牛が又自由に横行して居る。是は、シヅアの神様に牛を捧げむが爲に、諸方より放つので、此の神聖なる牛が市場に來て、果物を食ひあらしたり、随分いたづらをする。そこで諺に、ベナレスに恐るべきものが四あるといふ。さては地震か、みなりの類かと思ふと、さうでなくして、遊女、放牛、販世捨



(窟中に籠るれ世捨人)

人とは面白いではないか。

尤もこの放牛は、ベナレスのみでなくして此の

邊では一體に行ふものと見えて、デリーでも

アグラでも、之を見受けられる。そして又陰

陽崇拜も盛に行はれて、白を其の神に象どり、

石細工やら琉璃細工の白を多く賣つてゐる

が、此の白の数が、ベナレスの人口よりも多い

とは、あきれる外はない。

ベナレスには、右の外にヴィスツアナート

の智慧の井だの、猿猴堂だの、ネパールテンブ

ルだの、色々珍奇なものがある。智慧の井と

いふは、千五百年代に、回教徒來つて印度教徒

を逐ふの時、印度教の本堂にあつたヴィスツ



(井の慧智のスレナベ)

アナートを、其の隣の井の中に投じたが、是より此の井は神聖視されて、智慧

の源泉と崇められるに至つたのである。猿猴堂といふは、境内に多くの猿を放つてあるからで、本堂には、ヴィシニエーの夫人を祭つてある。智慧の井、特に猿猴堂には、參詣人の多いこと、櫛の齒を引くが如くである。ネパールテンブルはその楯間の柱頭、奇態なる彫刻を存し、人をして迷信の厭ふべきを悟らしめる。何れにしても、印度の人は宗教に捕はれて、沈滞してしまつたことは、總ての事に現はれてゐる。

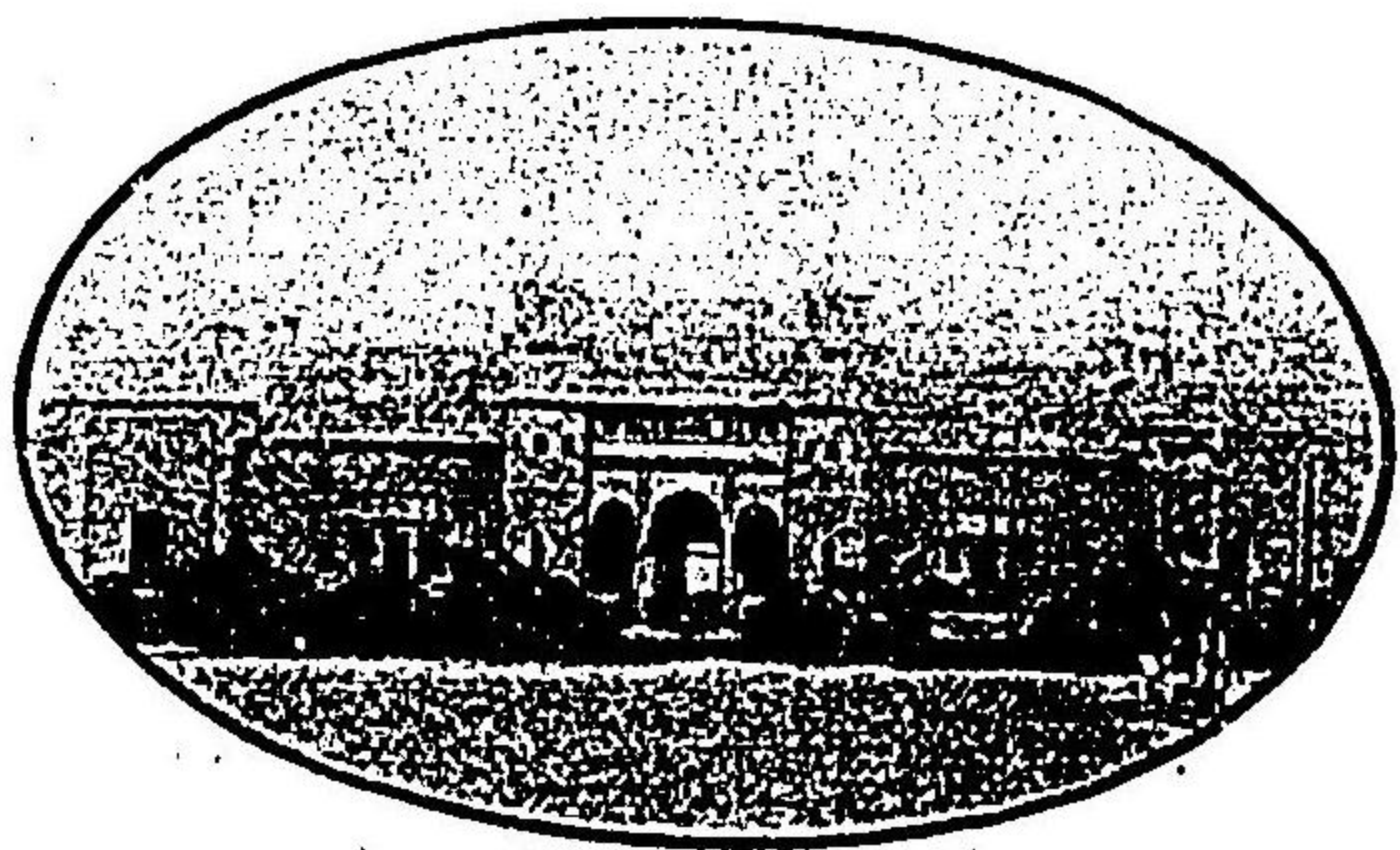
四二 アラハッド 共進會に於ける日本品

我が明治四十四年二月、アラハッドに於て、各國品共進會が開かれた。

共進會の有様については、特に茲に述べる必要もないが、唯日本館の最も好評を博したことののみは、一言しておきたい。開會後九週間の日本品賣上高は、七千ルピーといふと、餘りたいたいものでない様に聞えるけれども、初めは、館内に日本品を陳列して、之を一般に示す目的であつたのだが、印度の人

は、特に珍らしがつて、争て之を買ひに来るので、立ろに品切となつて、多くは後に補充したものである。かゝる有様で、印度人は、日本館を見る者が最も多かつたのは、一考を要する。さて其の日本館でよく賣れた物を申し陳べると、(一)漆器(二)硝子類(三)花筵(四)禾綿五、莫大小(六)靴下(七)金屬器(八)絹織物(九)加工硝子器(十)陶器(十一)玩具といふ順序になるのである。

さて日本品が、何故にかくの如く好評であつたかといふに、第一廉價なるにも因るのであるが、其の外に印度人は、何となく西洋人に慊焉たらずして、東洋人の造つた品を得たいといふ氣味があるのである。そこで共進會開會中、印度の人が日本館へ來て、貴國人が將來印度に日本品販賣店を設けらるゝ時は、我進んで其の取扱人にならうと申込

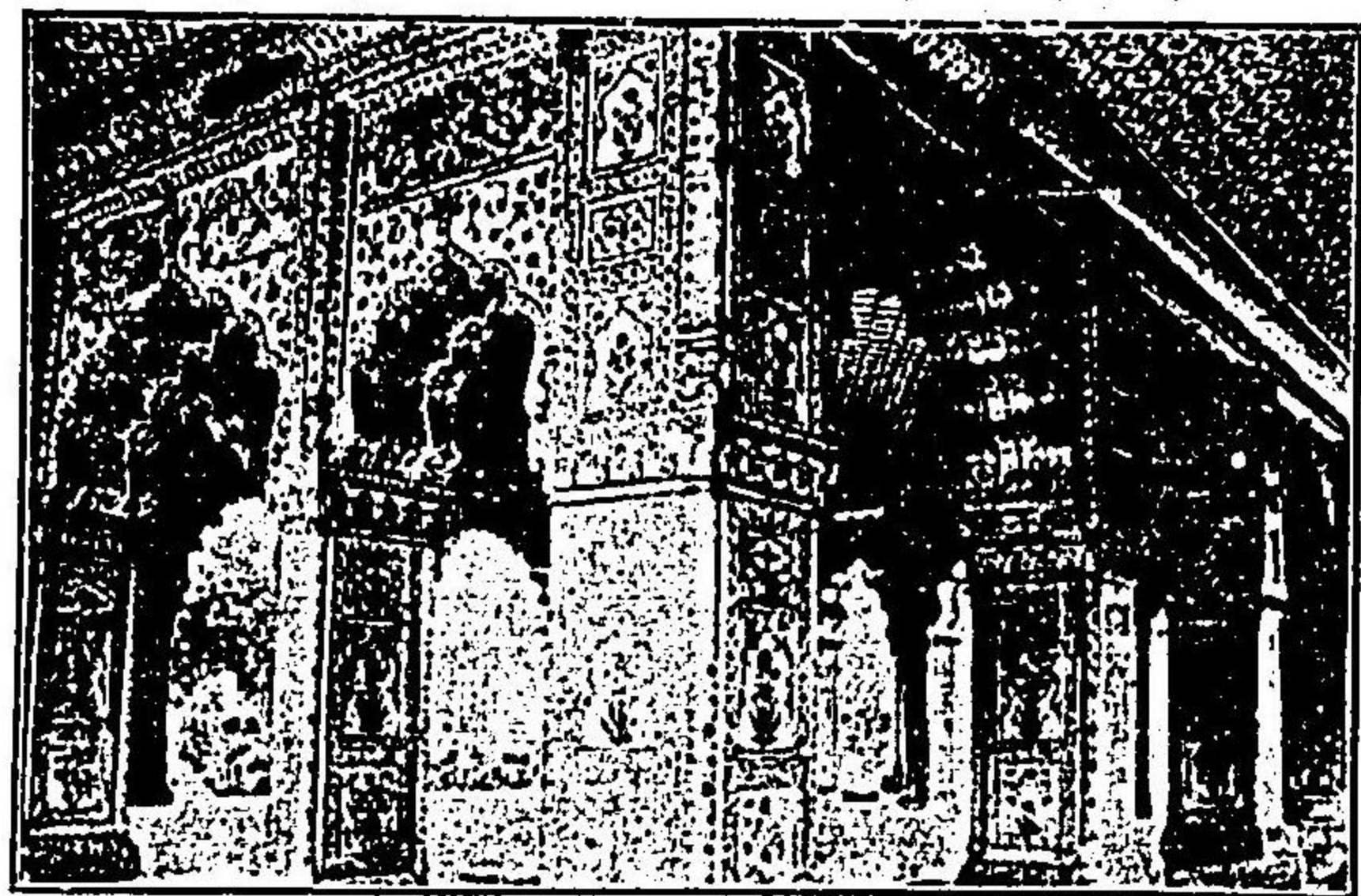


(會覽柳ドツバハラア)

む者、毎日五六人もあつた。就ては是から考ふべきことがある。從來印度に輸出する日本の品物は、歐米向の殘物といふべきであつたが、是れからは、特に印度の嗜好に投ずる品物の研究をして、之を仕向ける必要がある。此の大國を相手にして成功したならば、其の結果は少小でない。そして其の商賣のやり方も、我が通弊たる同志討や投機に終らずして、組織あり系統ある方法を取るべきである。競争的に損をしてかゝる様な、從來我商人の遣り方を踏襲する必要はない。正當なる利を得て、信用を確立する覺悟を要するのである。

四三 デリー及びアグラの古蹟

ジユムナ河の西岸、空に聳ゆる城壁の上に、ユニオン・ジャックの旗の翻る處、是れ今日のデリー城である。デリーは、實に印度の古帝都で、今より約二千年も前に建てられた城市であるけれども、當年の町は、今日の町より五哩も



(部内城イリテ)

ので、一八五七年の有名なる印度兵一揆起るまでは、マホメダンの帝都であつた。さて此の亂の鎮定は、なか

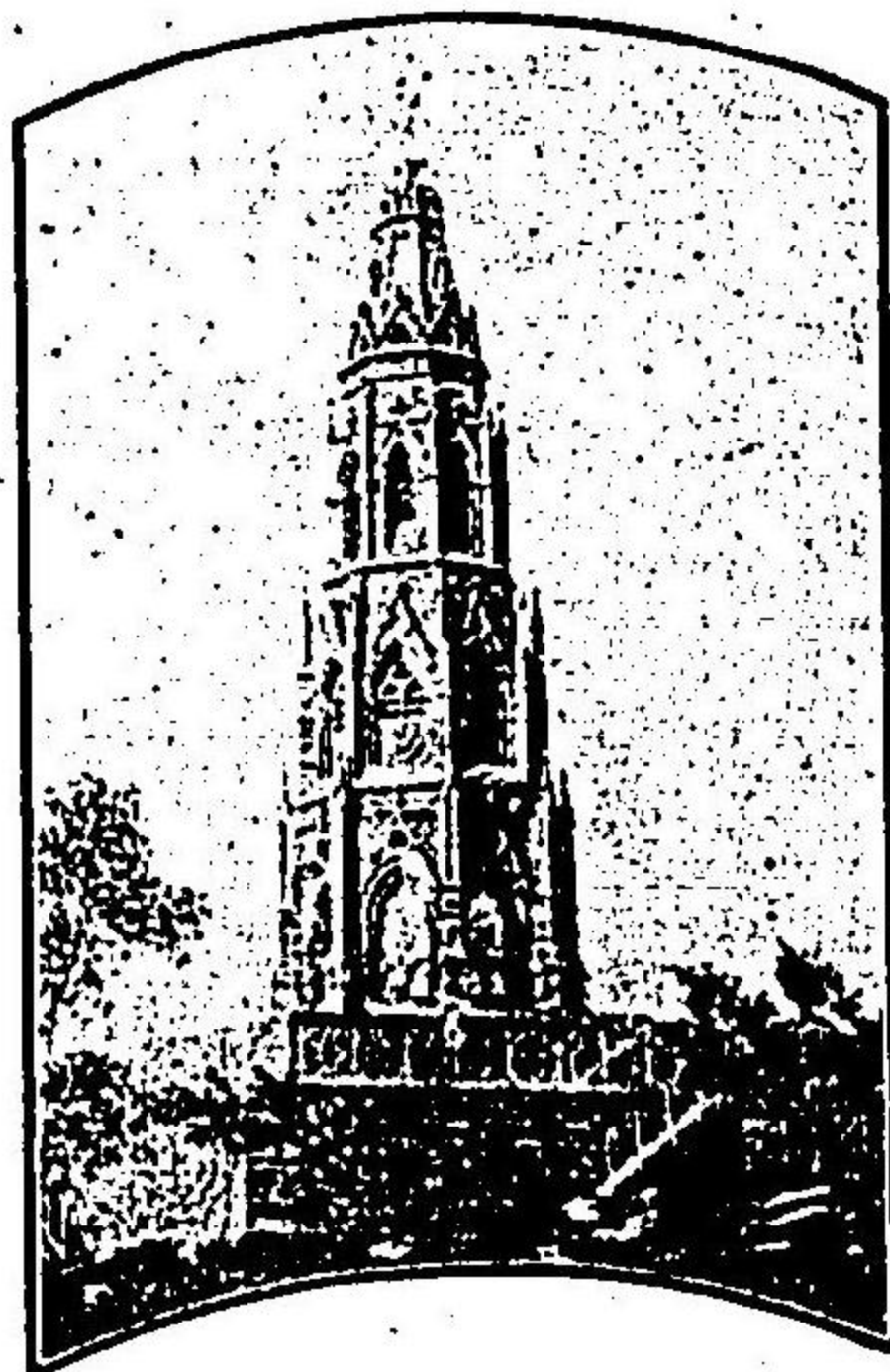


(街市イリテの今現)

隔たつた處にあつたのであるのみならず、其の後ヒンヅの王や、回教の王の支配の時に、更に度々位置の變更があつたので、あちらこちらに(七箇所に)古城市の跡が荒れたまゝに、昔の名残を留めてゐる。

この諸古城蹟は、今日の町より南方及東南方にかけて、四十五平方哩にも廣がつてゐるのである。今の城市は、一六四〇年に、シャージャハン帝の建てたも

英國側にも骨の折れたもので、司令官二人まで失つた。尤も是は、何れも虎列刺病で斃れたのである。三人目のウィルソン司令官に至つて、漸くにして一揆を鎮定し、茲に英國の國旗を城頭に掲ぐるを得たのである。此の亂



(碑魂忠のイリテ)

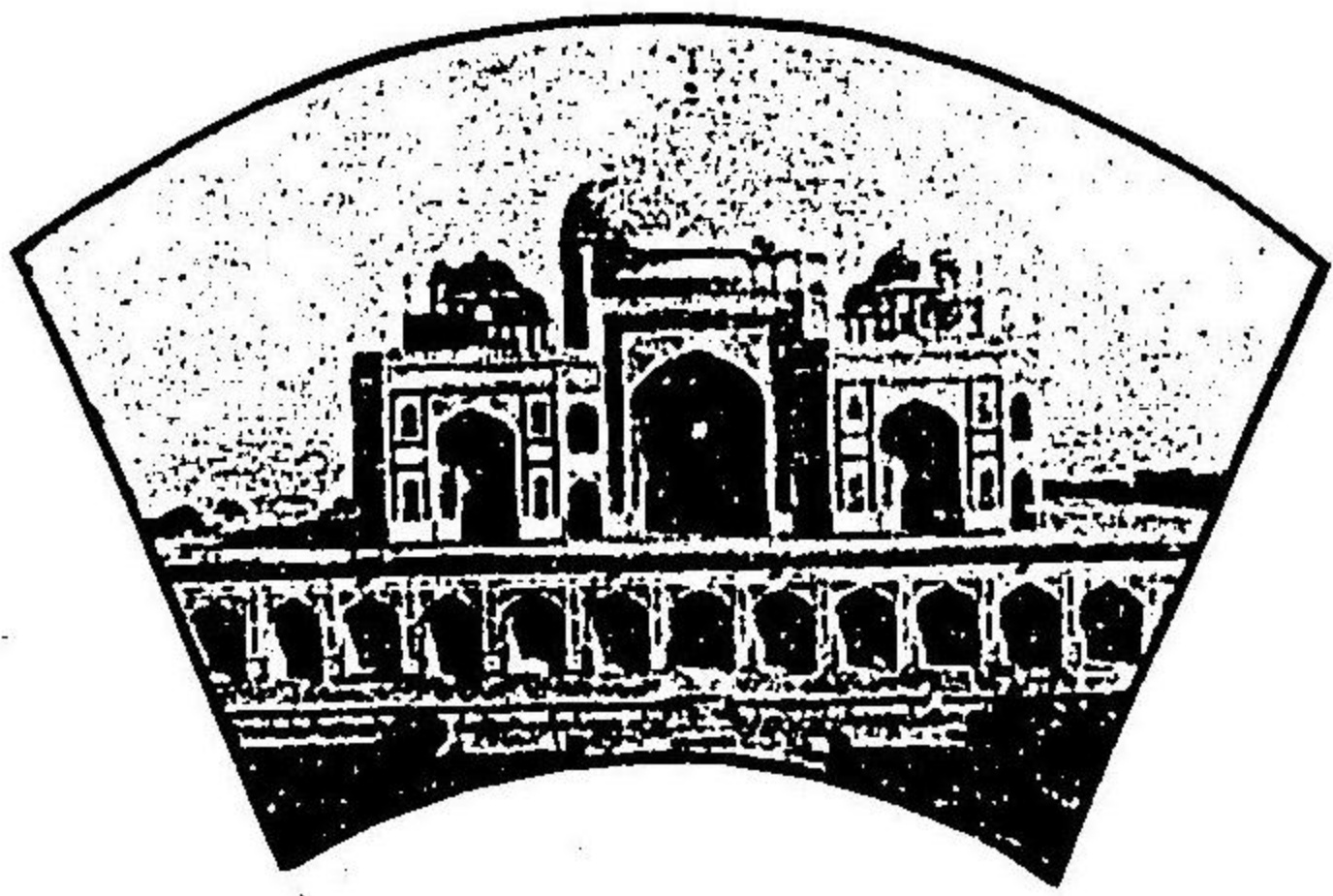
の殉難者の記念の塔が、今も町の一角に聳えて、長へに此城を鎮護せるかの如くに見える。此の度又、印度總督府もデリーに移ることゝなつたから、將來デリーは益々盛になるであらう。

町から二哩の距離に、宏大な廟がある。是はフマユン帝の墓所で、妃のハジベガムによつて起工せられ、皇子のアクバルによつて完成されたものである。廟の外面は、大體に於て方形であるが、四隅を切つた姿になつてゐるから、八角形をなしてゐる。床には石を敷きならべてあるが、廟の内部及び其の天井は、大理石である。フマユン

帝の墓石はいふまでもなく立派で、其の他、近親の人々の墓石もある。是等は、多く大理石で、寐棺のすがたに作られてゐる。そして其の表面に長方形の浮き彫りがあるが、此の浮き彫りの面が、蒲鉾形に出てゐるのは、男子の墓で、それが扁平なのは、婦人の墓である。

この廟の附近に、又ニザムデンといふサルタンの廟がある。この大理石の彫刻は、實に精巧を極めてゐる。境内に詩人クスロの墓もある。又一八三二年に出来たといふミルザジャハンギルの墓并に其の夫人ジャハナラベガムの墓の門扉など、共に美麗なる大理石の彫刻、さながら人目を眩せむばかりである。

然るに以上いふ如き、デリーの壯麗なる諸廟も、アグラのタジマハル廟に



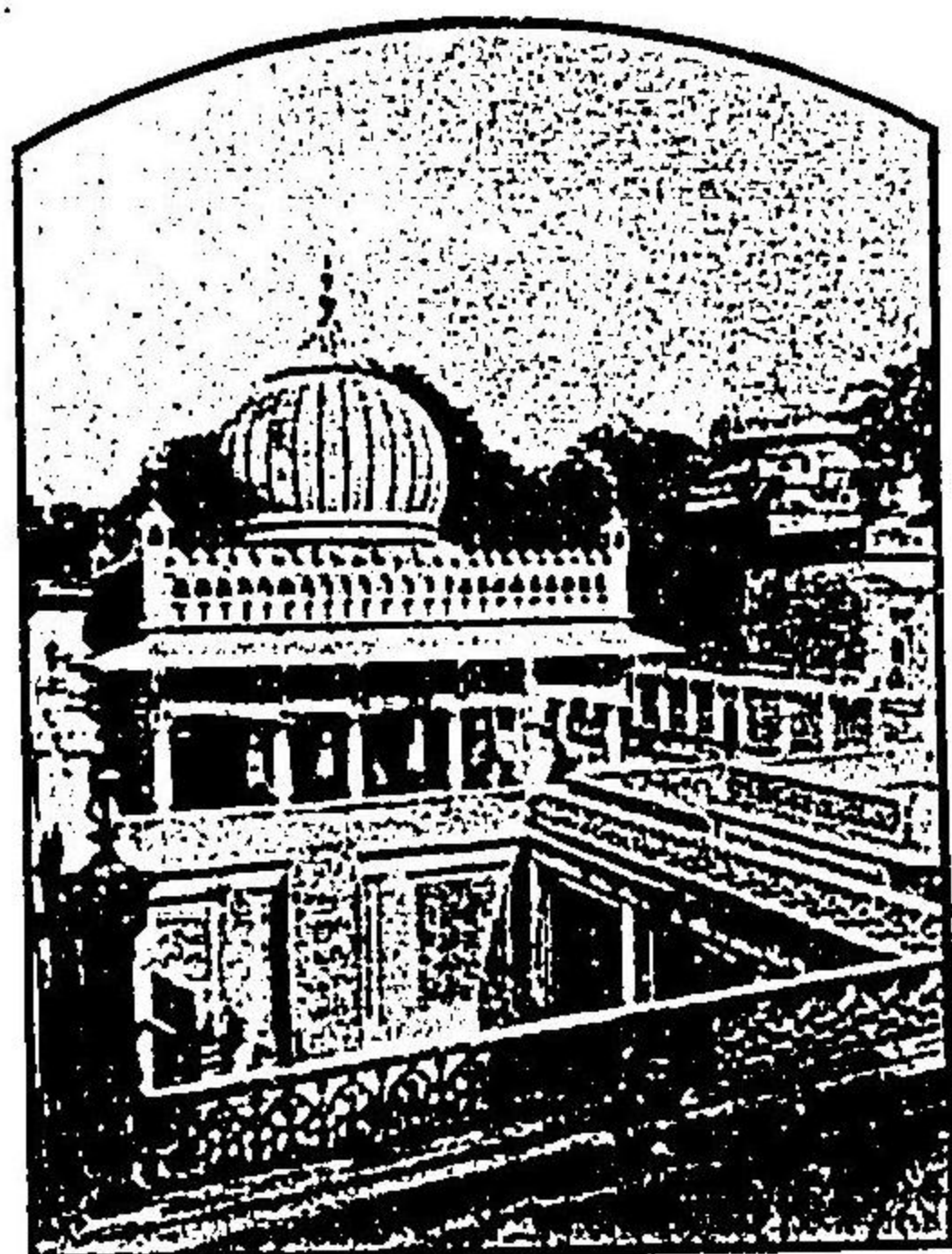
(廟 帝 ヌ マ フ)

比較する時は、全く其の光輝を失ふのである。

元來アグラといふ城市は、前陳のアクバル帝が一五六六年に建てたもので、矢張ジユムナ河の西岸に位し、今猶人口十九萬を有する大都會で、デリー

からは、汽車で六時間の距離にある。

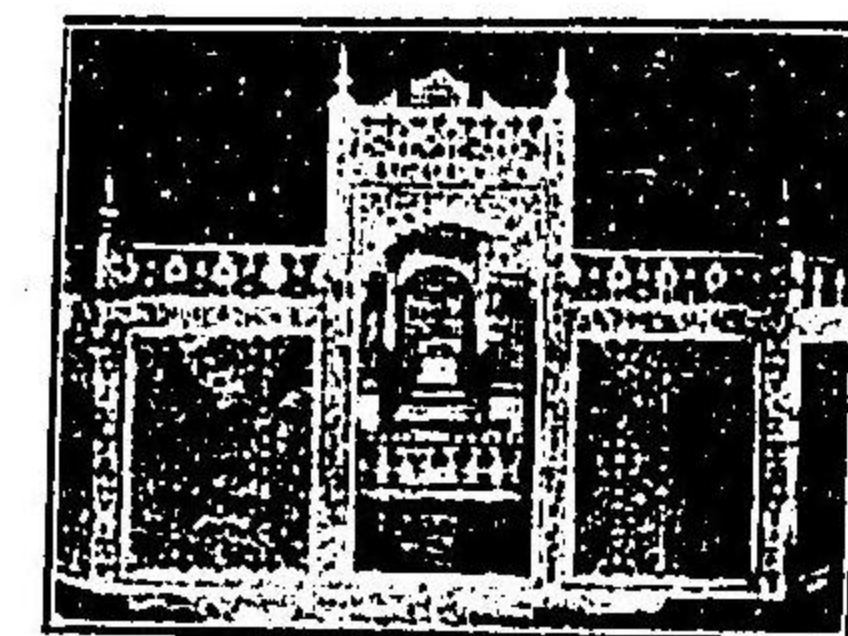
そして此處にも、大なる城廓が英兵の屯所となつてゐるが、何よりも眼を驚かすのは、即ち此のタジマハルの大理石廟である。門が已に非常であるのに、門から廟までの遠い道には、ずつと大理石を敷き、こゝに庭園の小池を見



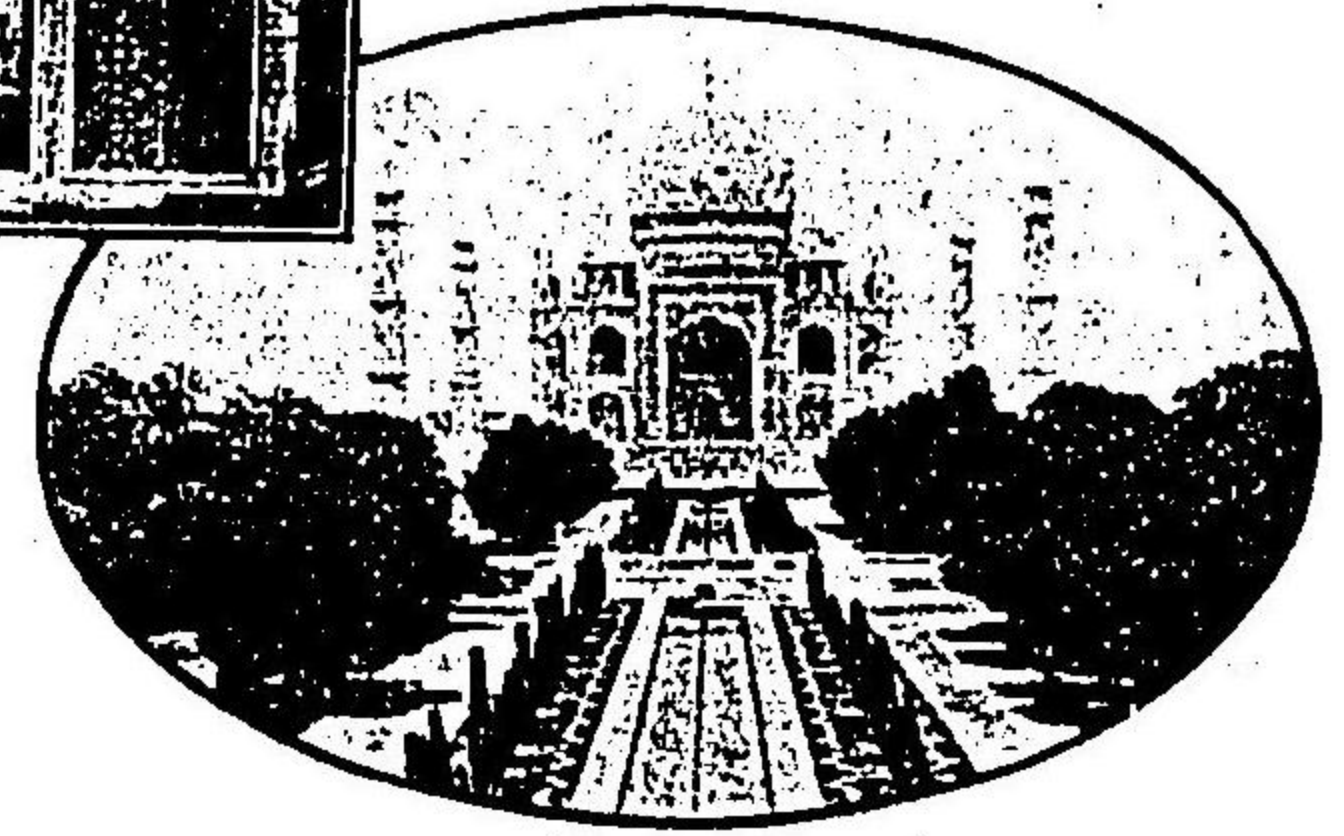
(廟ムガベ及廟ンイナムザニ)

せ、いよゝゝ廟に達すると、さしもの大なる廟が、全部すばらしきジャイプールの産の大理石で築かれてある。廟は、高い礎の上に立つて、隅々には雲間に聳ゆる塔がある。中央の大なるドームの下に、有名なる、タジマハルの墓、及

び其の夫のシャー・ジャハン帝の墓があるのであるが、何れも階上と階下と、
 両方に二つづつ作られてある。此のあたりは、殊
 に大理石の光り輝き、之に鏤むるに諸種の石を以
 てして精巧なる模様を現はしてゐる。眞に壯觀
 といふべきである。西洋の人が、之を世界の裝飾
 工藝の最たるものに數へるのも、決して偶然では
 ない。此の驚くべき廟は、シャー・ジャハ
 ン帝が、其の妃ベヌー・ベガム(所謂タジマ
 ハル)の墓として、一六三〇年に工を起し、
 十八箇年の後、漸く竣工したものである。
 英雄公憤の遺蹟、其の傳ふるもの多から
 ず、僅に愛人の廟に國學を傾注したる形
 見のみ存して、後人をして徒らに其の壯大美麗に驚かしむ。寧ろ悲しむべ



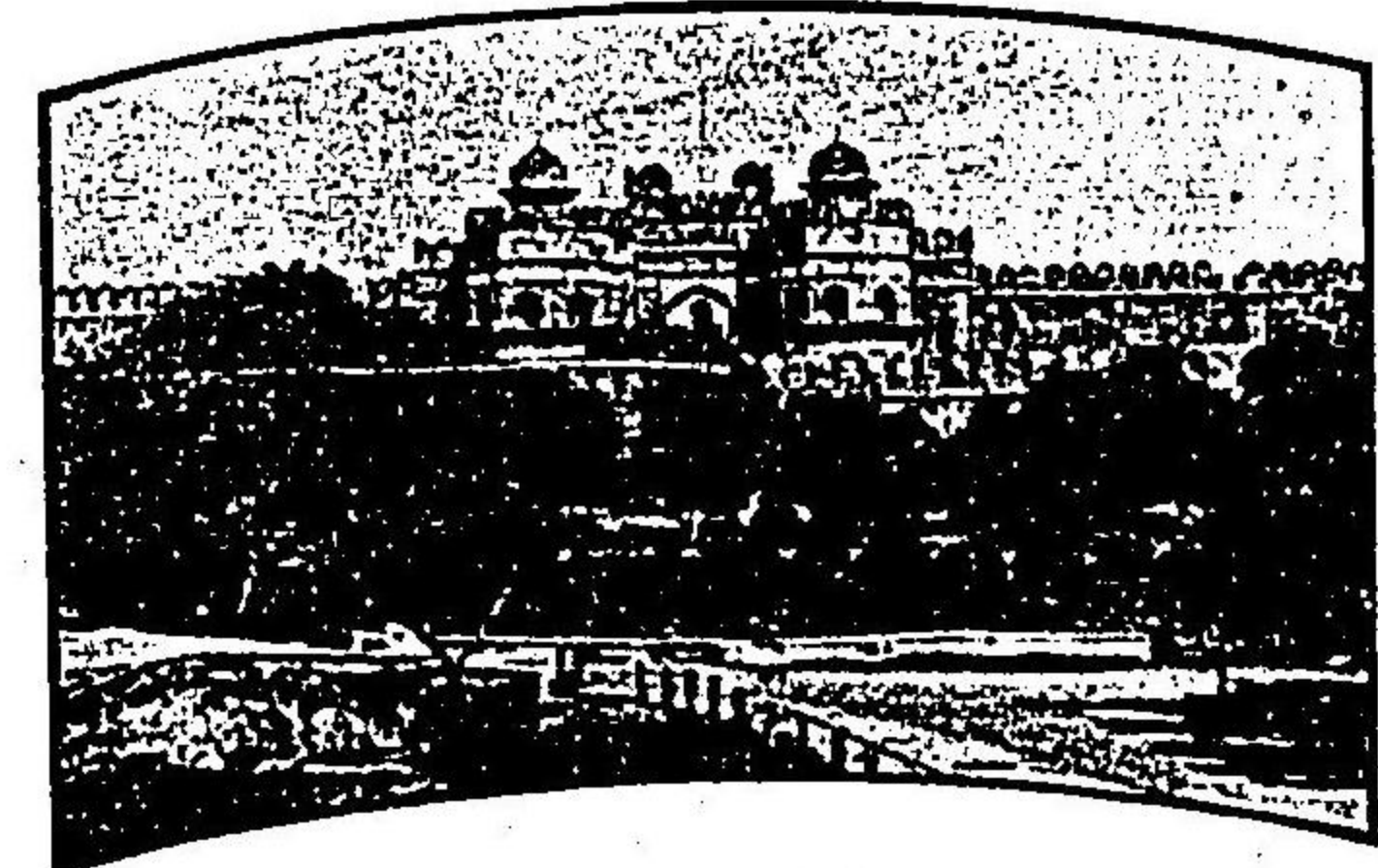
(門扉の前墓)
(石理大)



(廟石理大ルハマジタ)

きことではないか。

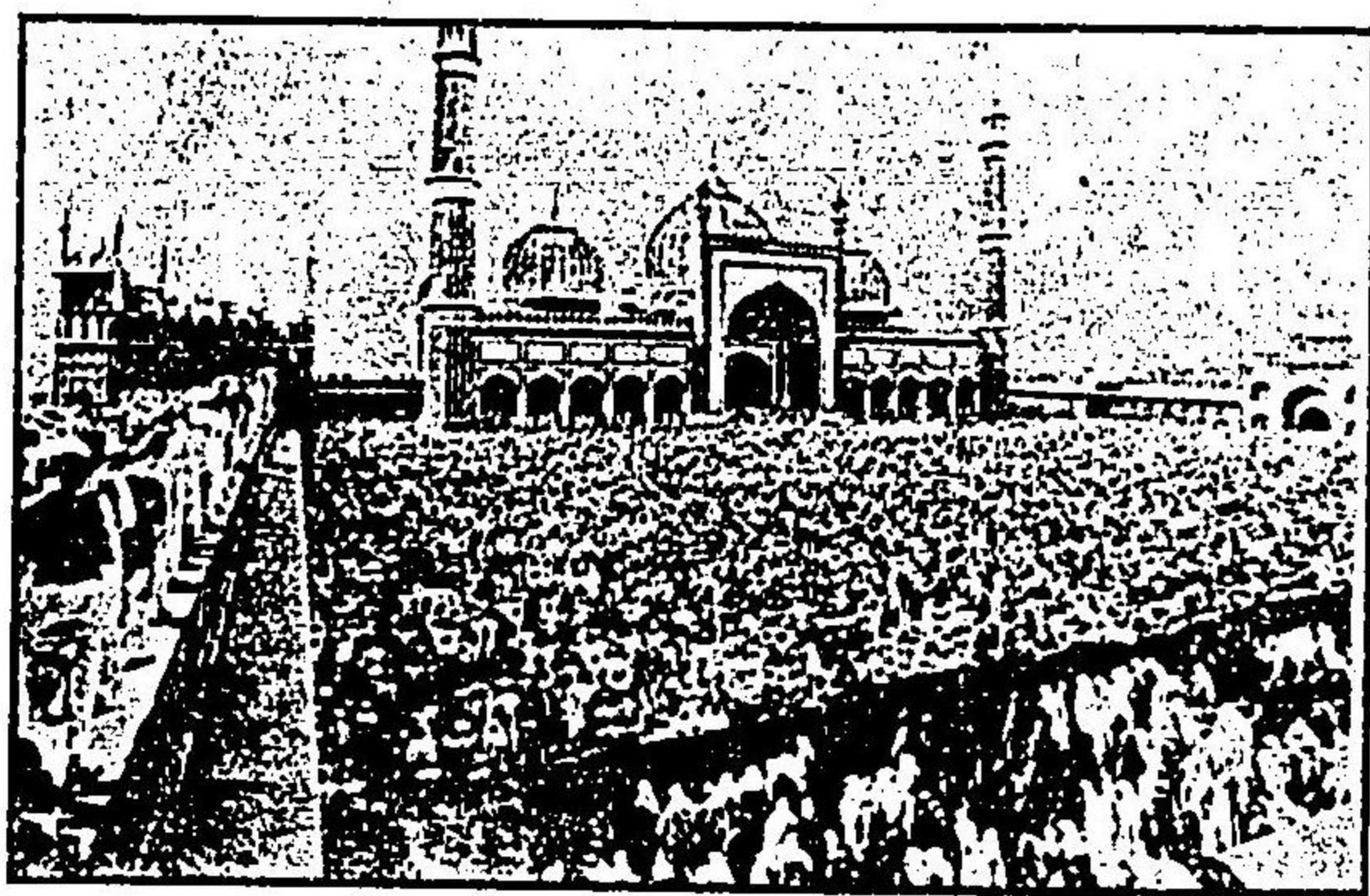
以上述ぶる所の如く、デリー及びアグラの古蹟といへば、主として陵廟を



(城ラゲア)

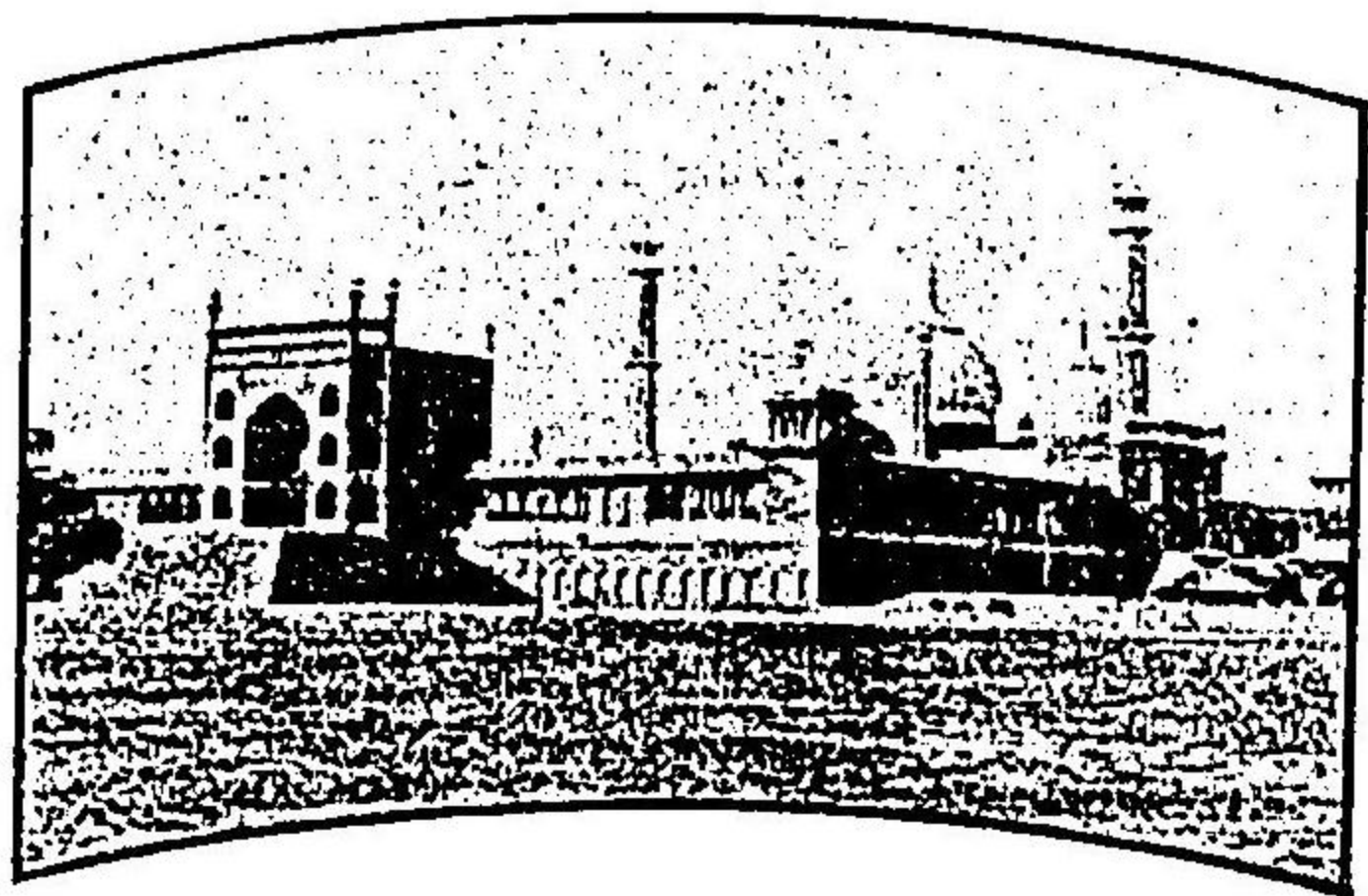
數へるので、未だ忠臣義士の遺烈、乃至は世界史に
 影響を有する大英雄の偉勳を景仰するを得ざる
 は、頗る物足らぬ氣がするのである。アグラ城の
 中にも、例によつて舊王の謁見所や、シャー・ジャハ
 ンが晩年(一六五八年)に、其の子オーラングゼブの
 爲に幽閉せられてゐた室などがあるが、別に趣味
 のあるものでもない。又其の側に禮拜所なども
 設けられてある。かゝる禮拜所は、アグラの町の
 中にも鮮くはないが、其の最も大なるは、デリーの
 ジュマ・マスジッドの禮拜堂に及ぶものはない。此の禮拜堂は、矢張り高い礎
 の上に築かれ、三箇所の入口へは、廣い石段を昇つて達する様になつてゐる。

堂の内に入ると、広い中庭には、盡く石を敷きつめ、中央の池は、禮拜者が手を清める爲に設けられて



(リテのムジスマドツ寺内に於ける新築)

ある。正面の大禮拜所は、大理石を以てたゞみ、屋根は三箇のドームで蔽はれ、ドームの尖端には、銅の小突塔があること、純然たる回教式を表示してゐる。四方の廻廊の眺望は頗る絶佳で、其の一部には、コランを藏めたる文庫を置いてある。此の寺院は、一六四四年に工を起し、一六五八年に落成したもので、其



(ジムスマドツ外部)

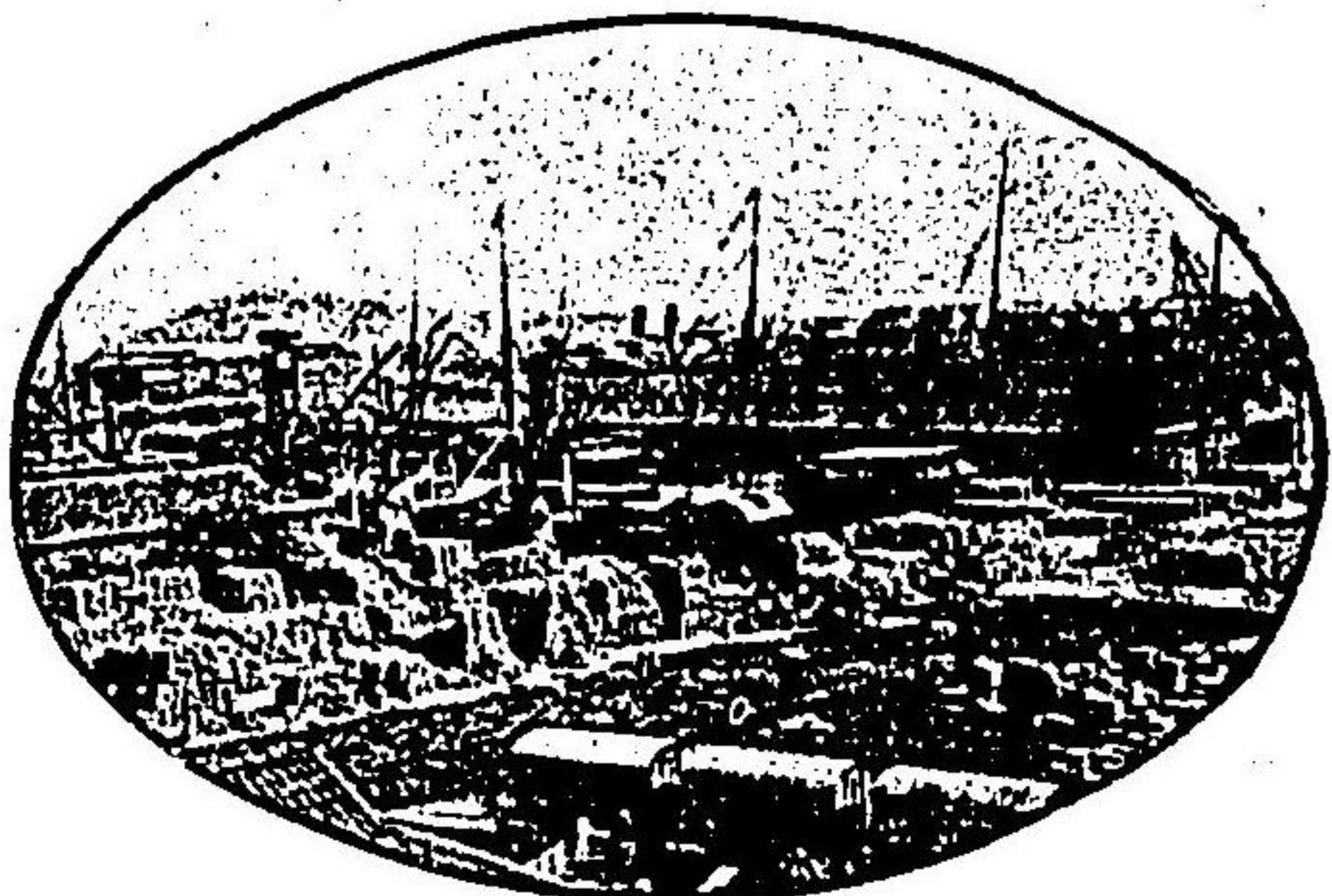
の内には、優に數千人の信者を一度に收容することか出来る。祭日メッカの天を拜するの時、其の雜沓は實に名狀し難いほどである。

四四 パーシーの根據地

印度に居るパーシーは、孟買を以て根據地とするのである。尤も人口の上からいへば、左程のものでない。それでも、孟買に五萬人は居る。併しヒンヅの六十萬、マホメダンの二十萬に比すべくもない。孟買市は、是等の外に、歐米人及他の國人を通じて十三萬二千をも有してゐるから、合計九十八萬餘といふ大數で、パーシーは僅に其の十九分の一に過ぎないけれども、パーシーの勢力あることは孟買に及ぶ所はない。彼等の冠つてゐる黒い烏帽子は、その昔、印度王に降つた時の記念と稱せられてゐるが、權力に遠かる所、立派な商業學校をさへ有してゐる。之に比較して見ても、我國の商

家は、大に將來に於て戦法を講究せなければならぬと思はれる。群馬縣から絹の視察にいつた飯塚氏の談によれば、孟買に輸入せられる日本絹も鮮くないけれども、我國の商家は、お互の一騎討と、無汰な競争の爲、いくら取引があつても、結局商賣をしないのに等しいのみならず、中には前途の見込がないとて、日本絹を断念して、歐洲絹又は支那絹の方へ、乗りかへむとする人さへある位だといふいふことである。

併し何といつても、孟買は棉花の輸出地で、一年の輸出高無慮三百萬俵。日本に行くものだけでも、八十萬俵あつて、是が少くも五千萬圓のものである。この五千萬圓は、日本人の手から、孟買附近へ落すのであるから、孟買に於ける日本人は、頗る尊敬せられてゐる。特に又日露戦争以後は、大に發



(花棉の頭埠イベンボ)

展の傾向をあらはして、僅々五六十人の日本紳士が、海岸形勝の地を擇び、五萬四千留を投じて、日本俱樂部を建てるといふやうな優勢になつた。是は誠に慶賀に堪へない。

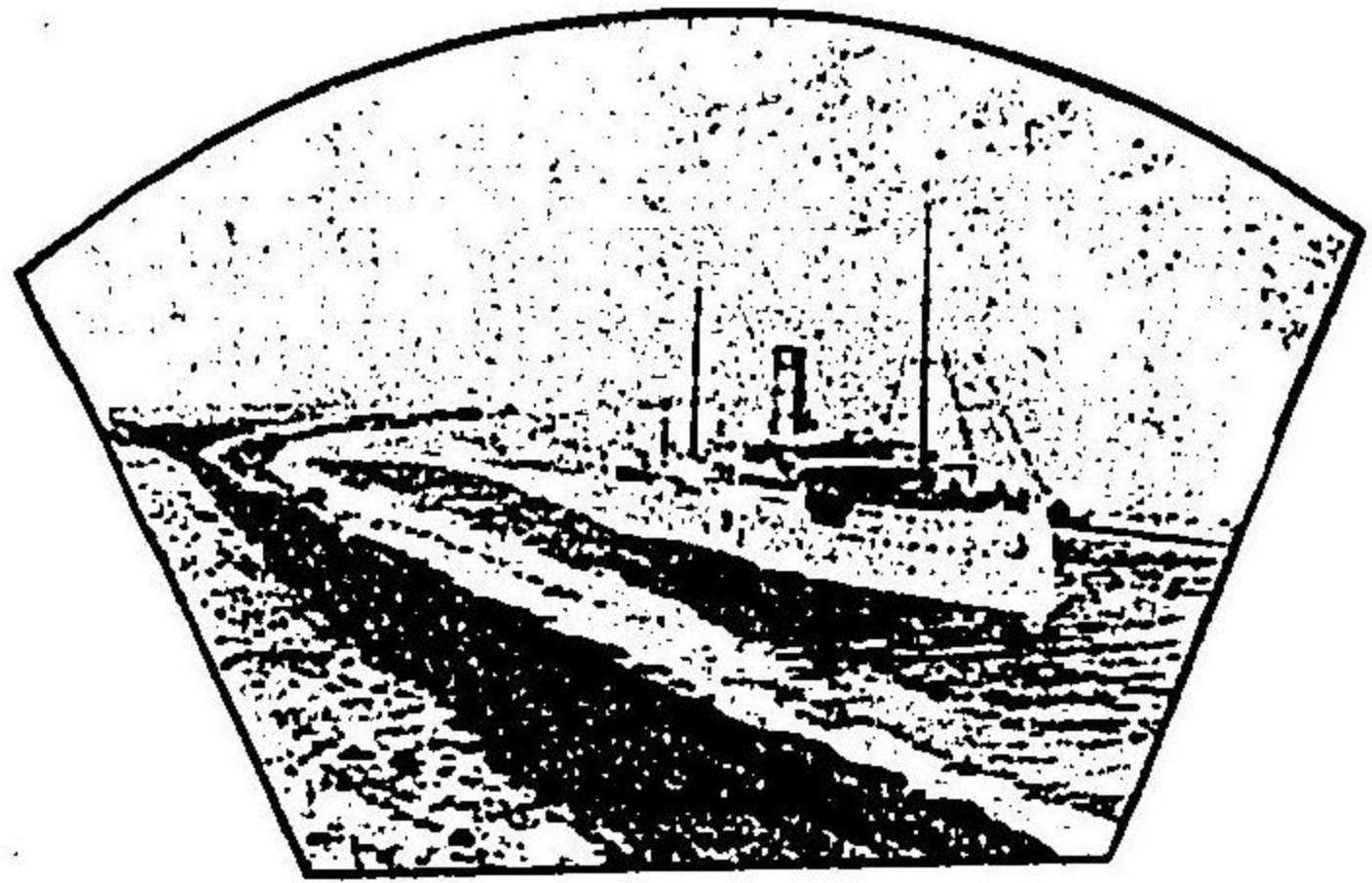
孟買中最も眺望のよいマラバ丘の上、漫りに人の入るを許さざる處寂滅塔サイレンスといふものがある。是はパーシー人の墓所である。ヒンヅマホメダンは土葬するが、パーシー人は最も奇なる葬式をする。それは死骸を鳥に食ましむるのである。そこで、パーシー人が死ぬると、この寂滅塔内の墓所の入口まで之を送り、其の墓所の内へは何人をも入れないで、唯墓守のみが死骸を預る。墓所は共同で、繞らすに高壁を以てし、形は丸く、其の中は外廓と中廓と内廓とに區畫せられ、各々幾多の死骸を曝す穴が穿たれてある。死人が男ならば外廓へ、死人が女ならば中廓へ、死人が小兒ならば内廓へ横たはらしめる。死骸が已に穴に曝らされると、二時間たゝない内に、鳥が肉を食ひ盡すといふことである。併し何人たりとも、此の墓穴を見る

ことは出来なす。

四五 レセツプスの偉業

一木一樹を見ざる砂山の麓のエーデン港から紅海を横ぎること五日にしてスエズについて、それから二十時間の航行は、船足も徐々て兩岸は殆ど舷と相摩するかと思はるゝばかりの運河である。この運河は、レセツプス氏の企畫に成つたことについては、誰知らぬ者もない。併し此運河の計畫は、昔に溯つて見れば、随分上古より其の端を啓いたもので、西暦紀元前六一〇年から、同五九四年にかけて埃及を支配してゐたネコーといふ人が、已に之を企てた位である。それがダリアス第一世 (521—486 B.C.) の時に完成せられ、其の後荒廢に屬したのを、又西暦紀元後一二世紀にかけて、ツラジヤン帝が再び之を開いたといひ、其の後アラビヤ人が埃及を征服してから、復々之を再興したといふのである。總てこの頃の運河は、カイロからスエズへ

通ずるのであつた。其の後廢れて久しい後に、ナポレオンが又此の計畫を起して、ルペールといふ技師に測量せしめたが、此人は、大なる違算をして、地



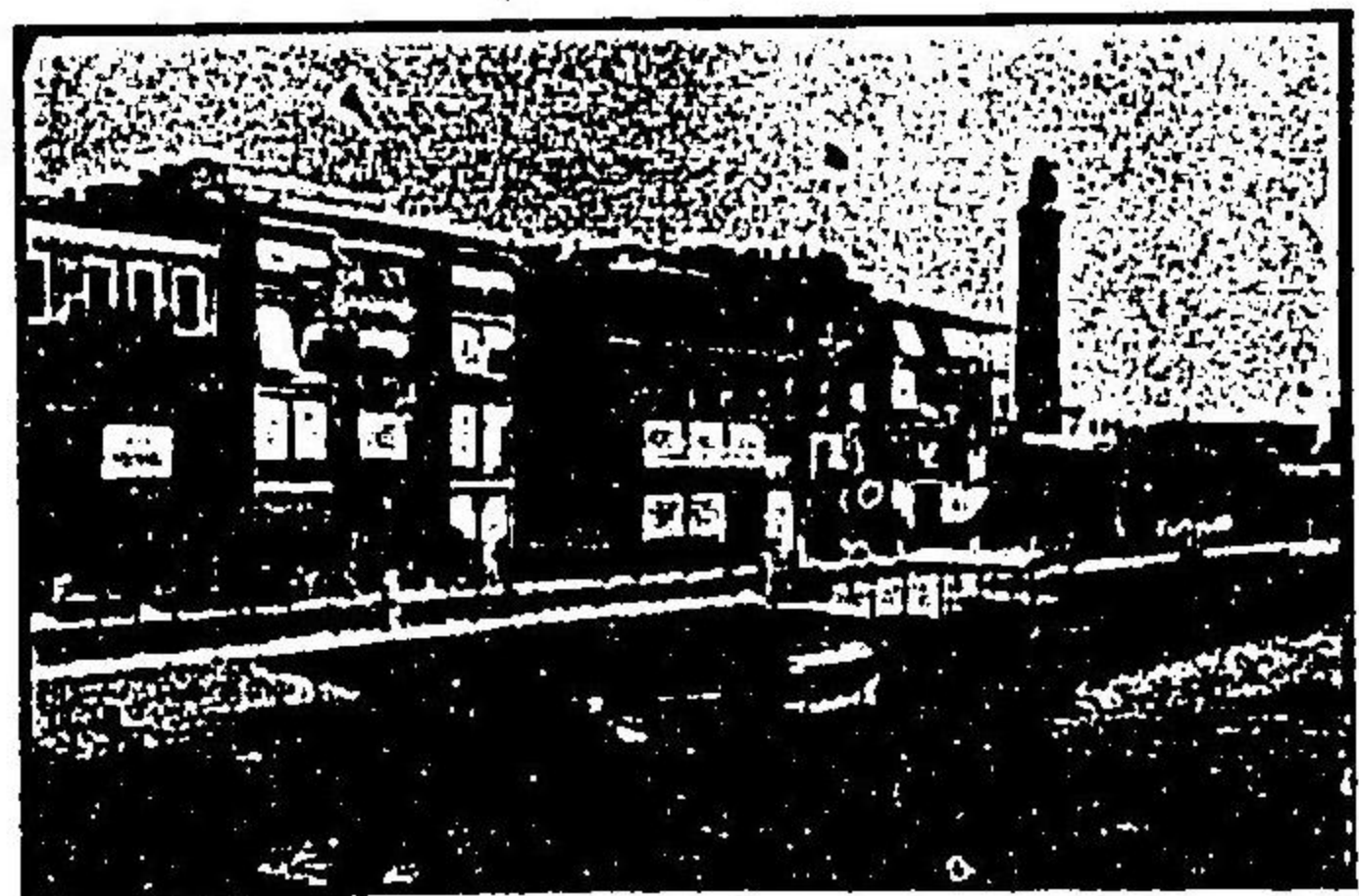
(河 運 士 蘇)

中海と紅海とは、海面に高低があるといつた結果、計畫を實現するに至らなかつたといふことである。然るに一八三六年、レセツプス氏が領事としてカイロに駐劄してから、いかにしても運河を通ぜむものと考へてゐる内に、一八四一年、及び一八四七年に、ペーといふ埃及政府の土木技師や、ステフエンソンなどいふ人々が、ルペールの測量の違つてゐることを發見して、地中海と紅海とは、決して海面に差がないといひ出したによつて、一八五

四年に、時の埃及王サイド・パシヤに運河の計畫を陳述し、パシヤも之を賛成して、一八五六年に公然之を認可した。併し資本の醜集が容易でなかつた

ので、漸く一八五九年から工事に着手し、辛苦經營十年にして、始めて之を成就したのである。之に要したる經費總額一千九百萬ポンドで、そしてサイド・バシヤが資本及び勞力を補助したことも非常なものである。運河の開通は一八六九年で、此の次のバシヤの時であるけれども、地中海へ出る所の港は、王の名を取つてポート・サイドと名けた。

運河の長さは、約我が四十里、深さ二十八尺。廣さは狭い處で二百尺、廣い處で三百三四十尺。船のすれ違ひの爲に、處々に廣い湖が設けてある。兩岸はアラビヤの沙漠であるから、木は多く見ることを得ない。船に乗つて運河を通過する間は、唯岸に近い一帶の砂堤より見えなすが、ポート・サイドに上陸して、この趣味なき町から、汽車でカイロに入らうとすると、再び運河の西岸に沿つて、一時



(頭埠ドイサイドノ時)

間半ばかりも南へ走つて、イスマイリア(運河の開通した時のバシヤの名を取つて町の名とした)から西へ曲るのであるから、其の間に、更に運河の異景を望むのである。試に車窓に倚つて砂原を見れば、運河はほんの一條の細流で、さながら青い帯を大白布の上に引いたるが如く、一萬噸以上の大なる船が、よくもこゝを通ると思はれる。之にひきかへて沙漠の有様は、渺茫として人目を娛ましむるものはない。余のこゝを通過した時は、二月の二十七日であつたが、長風起つて炎塵を巻き、天日爲に曇つて殆ど咫尺を辨せず。車窓を閉づれば、褥暑甚しく、流汗淋漓として殆ど堪へられず、一種物すごい感を起す位であつた。安全なる數時間の汽車旅行ですらも猶且然り。水の缺乏や、人の病死や、支障百端、勞苦萬疊、十有餘年の堅忍の後、漸くにして世界萬國の人々に便路を開いたる大事業家の敢爲の精神は、我々同胞の大に學ばなければならぬ所である。學んで而して人類の爲に、更に這般の大公益を興すの企畫をしたものである。

四六 ギザの金字塔

ギザの金字塔といへば三尺の童子も知つてゐる位に有名なものであるから、どんなに大きいだらうと思つてゐた。「來て見れば聞くより低し富士の山」。余の驚いたのは、其の大さでなかつたのである。併しかゝる古い物が、よくも沙漠の中に埋もれずして、巍然として今日に迄存したものである。カイロの西を流る、ナイルの長橋を渡つて、西南に自働車を驅ること約半時間。例の金字塔は、其の大なる三角形を左の砂丘の上に現はしてゐる。

駱駝は坐して、客を金字塔に運ぶべく用意してゐる。其の背の上に飛び乗ると、彼の不かつこうな長い脚を起すのである。不潔なる長い首の向ふ方に導かれて、熱風砂を捲く沙漠のつつかゝりを、金字塔の方へと登つてゆく。リビヤの風雨四千年。塔の輪廓は多少變つたとはいへ、其の金字形の姿は、今も猶昔の如くである。奈良の唐招提寺が千三百年だのといつて見たと

ころで、殆ど比較にもならない。唐招提寺の出來た頃には、此の金字塔は、已に三千年の古色を帯びてゐたとは、眞に驚くべきものではないか。



(一)の塔字金

さて大なる三つの金字塔の中で、其の又最も大なるは、現在の高さ四百五十一フィート(もとは四百八十二フィート)あつた計算であるが、中のもので四百四十七フィート(もとは四百五十四フィート)小なるもので二百四十七フィート(もとは二百九十九フィート)あつて、皆石を以て築きあげたものである。長い歳月の働さには抵抗しきれぬもので、頂上及び周邊は、或は多く或は少く缺けてゐる。是が所謂ギザの大金

ほどある。

さて何が爲にかゝるものが出来たのであるか。外でもない。即ち王の墓標なのである。右の三箇のうち最も大なるものはケオプスの墓、中なるはケフレンの墓、小なるはメンケレスの墓である。此の三人の王は、埃及の第四番目の朝廷に属する人々で、西暦紀元前二千五百年から二千二百年までの間の支配者である。そして此等の墓は、王の歿後に建てられたのである。王が其の在世中に、長年月を費やして築かしたものである。それ故に、在位が長ければ長いほど、大なる金字塔が出来たのである。ケフレンの金字塔は、其の周囲に塹壕のやうなものを繞らしてある。他のものはそれが明かたなく、特にケオプスののは、全く砂の上に立つてゐるが、是も初めに堀があつたのが、埋もれたのではあるまいか。

内部はどんなものであらうか。好奇心は余を驅つて、ケフレンの金字塔内を探検せしめた。横の入口の穴は、漸く人が立ち得る位の廣さであるが、

穴の床石が斜に下つてゐる爲に、靴が滑つてとても居たまらない。そして穴の中は無路である。案内の埃及人は、點火せる蠟燭を持ちながら、前から後ろからと余を支へて呉るのである。滑りながら漸く或點にまで達した。此の處からは、最早立つことが出来なくなつて蹲踞した。燭光にすかして見ると、穴が壊れて、石塊が散らばつてゐる。そして其の奥には、僅に身體を横にしなければ通れない程の穴より無い。止むを得ず、體を石塊の上に伏して、足より先きに下へ滑らせた。少しでも頭を擡げようとすると、天井の石にぶつつかる。だいぶん奥へ這入つたと見えて、燭光は滅せんとして復た漸く明かになる。來た路は黄塵に烟つて、次第に見えなくなつてしまつた。ガタリといふ一つの音が、我々の命の終る時かと思つた。する内に穴は廣くなつて復た立てる様になつた。すると此度は、非常に深い階段がある。案内の一人は、先づ飛びをりたが、其の頭は余の足の下にある。余は案内人の肩の上に足を載せて、下へ飛びをりた。燭を乗つてゐる

者の飛びをりた時は、火は殆ど滅したかと思つた。この様な石段にあふこと一回のみでなく、三回もある。末はどうなることかと危ぶんでゐる内に、非常な広い室へ出た様子である。案内の者はマグネシウムを用意して之に点火した。青い光は一時に閃めいて、王の石棺の置いてあつた室なることが確められた。石棺の中には、いふまでもなく王の木乃伊が横はつてゐたのであるが、今は取り去られて、唯累々たる石片を残すのみである。

ケオプスの金字塔の横に、砂中から大なる頭を擡げたるスフィンクスがある。もとは一つでなかつたらうと思はれるけれども、今は一つより無いのみならず、それも完全でない。是は大なる石を獅身人頭の巨像(高さ六十六呎)となし、其の胸に、神像が刻してあつたものと見える。そして其の前は、深く掘れて濠の様になつてゐるが、是亦昔の道が埋もれた跡かと思はれる。スフィンクスの側に、砂中の隧道に類した處があるから、中に這入つて見ると、大石を疊んだ室が幾つもあるが、是は寺の遺跡である。此の寺も、又壊れ

た上に、砂がかぶさつたものであらう。

余輩は、這般數千年の古文明の遺跡に驚いて、それが歐洲諸大學の埃及學の講座を賑はしてゐるのを喜ぶと同時に、又我々が新進帝國の國民に生れたのを更に喜ぶのである。

四七 埃及の古墳及び木乃伊

金字塔は地上に聳えてゐるけれども、埃及の古墳は、山腹に横穴を穿つて地下界を成してゐるのが多い。尤も金字塔と雖も、其の墳穴の有様は、是と異ならないのである。此の點に於ては、印度の古墳が、地上に盛觀を現はしてゐるのとは、大に趣を異にする。そして埃及の名物たる木乃伊は、即ち其の墳穴の奥に藏められてあつたので、是あるが爲に、數千年以前の古人を、まのあたりに目撃することが出来るのである。

埃及の古墳は、諸方に多くあるけれども、昔のテベスの遺址から發掘せら

れた古帝王の墓穴ほど立派なものはないであらう。墓穴の構造及び装飾から云へば更に金字塔を凌駕するのである。カイロから南すること四百五十哩、ルクソルの町からナイル河を西に渡つて、リビヤの赭山の谷間に出ると、茲に古帝王の墓穴が群がつてゐるのである。

墓の数は、東の谷と西の谷とを合せて四十ほどあつて、構造は區々である。否、當代の墓作りが、己れの技倆を示すの機會と心得て、種々に其の模様を工夫したものと思はれる。今其の標本的のもの四つについて、お話をしよう。

(一)アメンホフイス二世(1461—1436 B.C.)の墓穴は入口が峻しい阪になつてゐて、其の道の極まる所に、廣い深い井のやうな穴がある。漫りに墓穴に入る者は、皆此の井に落ちて助からない。此れは萬一、王の屍を取り出さうとする者があつても、皆此の井に落ちる様にしたものである。今は之に板橋を架してある。それを渡つて、一つの室に行きつまるかと思ふと、左に道

があつて、だら／＼下りの階段があるから、降りて見ると、又大なる室に出る。此の室には、六つの四角な柱が立つてゐるが、其の正面に、更に一段低い室があつて、茲に王の石棺が横たへられてある。此の邊、今は總て電燈を點ずる様にしてあるが、其の光を目當てに窺つて見ると、王の遺骸は、棺の中から、木乃伊となつて、其の瘦せこけた顔を現はしてゐるのである。三千餘年の昔の人が、今日其のまゝに形骸を存してゐる。六柱の室の横に、又小さい穴が二つあつて、茲にも三つの木乃伊が横たはつてゐる。是は王の奴婢の遺骸だといひ傳へてゐる。此の外に、猶王族の木乃伊が九つあつたさうであるが、今は皆カイロの博物館に持ち去られた。

(二)セソス第一世(西暦紀元前一千三百年代の人)の墓穴は、内部壁畫の美觀他に超絶すと稱せられ、入口は亦峻しい。それから阪を下りたり上つたりして、室から室を通りぬけてゆくと、つき當りの王の納棺室に達する。但し王の木乃伊は、カイロの博物館に持ち去られて、茲には無い。併し、其の左方

の室に這入つて見るに、周囲に石の柵が繞らしてあるが、是は遺骸の腸を取り去つて、木乃伊に作つた處だといふのである。

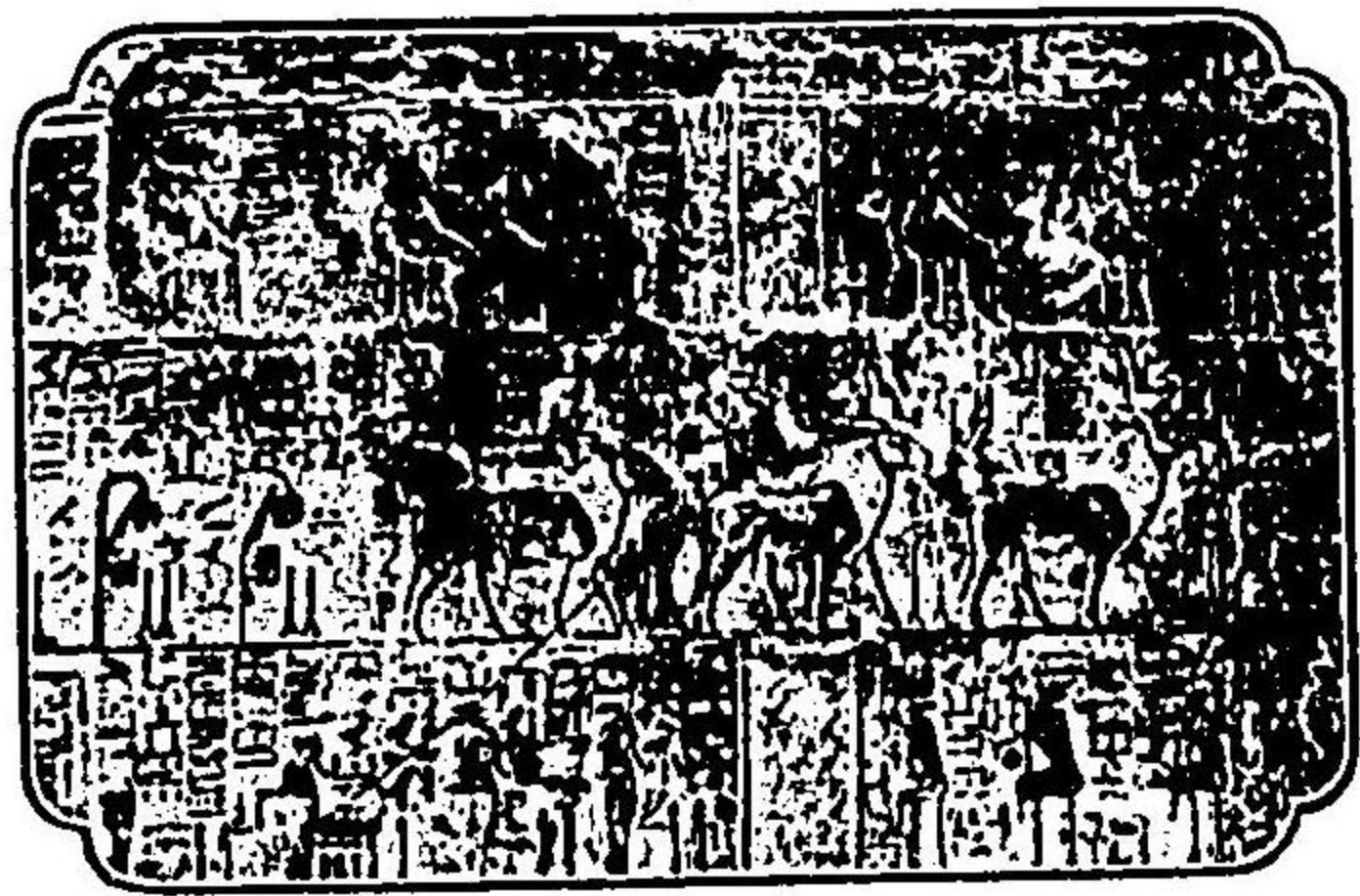
(三)ラムセス三世(西暦紀元一千百年代の人)の墓穴は、這入るとすぐに道の兩側に、小さな室が五つ宛列んでゐるのが特徴である。其の道を行きつまつて右に折れると、更に向ふへ進むやうになつてゐて、是から數多の室を経て、納棺室に入るのであるが、此の奥はまだ電燈がついてないから、入ることが出来なかつた。

(四)ラムセス第六世(前王より少し後の人)の墓穴は、別に是といふ特徴は無いが、比較的廣い道が、三段の斜傾となつてゐる。つき當りの室は、例の如く王の納棺所であるが、木乃伊は亦取り去られて無い。但し其の石柩の蓋が破壊されたままに残つてゐるが、随分大きなものである。

以上いふ如き諸種の墓穴が、其の壁はいふに及ばず、柱や天井(天井は夜の空に象つて星を畫いてあるのが多いが)にまで、彩色せる畫や、凸凹の彫刻が

あつて、多くは王一代の傳記を圖示し、或は王が神前に供へ物をしてゐる所やら、神の形になつて現はれてゐる所やら、乃至は象形文字など、種々雜多のものが畫いてあるが、其の配合は誠によく、特に奥まつたる壁畫に至つては、今猶墨痕淋漓たる如き、實に珍とせねばならぬのである。

是等の王墓より西南に當つて、又王妃の墓所があるが、何れも王の墓の壯大に比すべくもない。又ルクソルの南、更に百三十餘マイルにして、アスアン町に出るが、其の對岸に所謂岩窟墓といふものがあつて、是は更に時代が古く、西暦紀元前約二千年のものであるが、内部は石柱が立つてゐて、所々に簡單な彫刻が存してゐる位のもので、其の内の最も美なりと稱せらるるシレンポウエトの墓といつても、とても右に述べた王の墓の比べ物には



(畫壁の内墓王スベテ)

ならない。併し時代が古いだけに、更に古朴掬すべき所はある。其のシレンポエトの墓穴の道の兩側に、木乃伊の形に作つた像が列べてあるのは、一寸驚かれる。此の中にあつた木乃伊も、博物館に送られてしまつたが、今猶奥まつた穴の内から、木乃伊の頭などがころげ出してゐる。

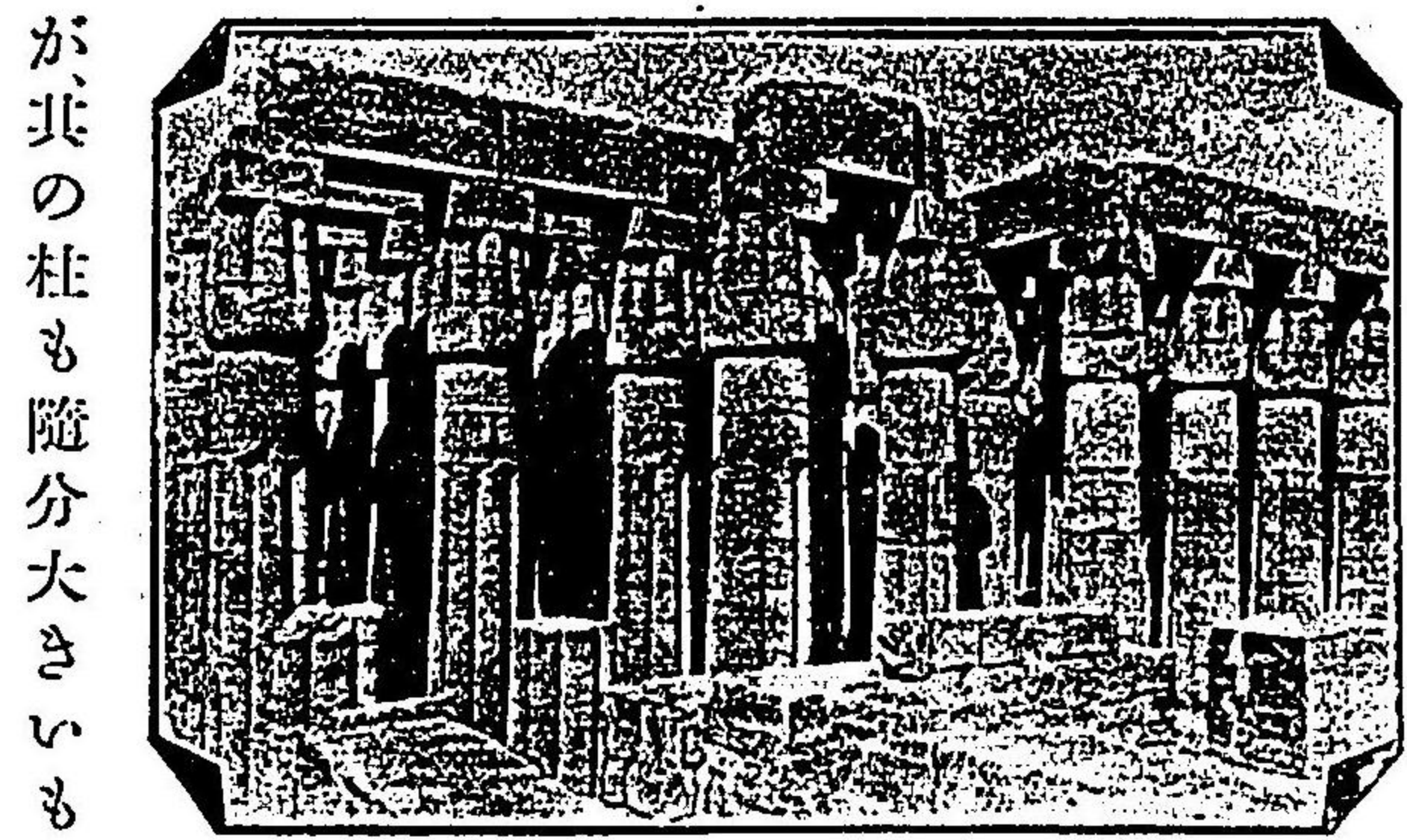
さて是等の墓から發掘せられたる木乃伊を最多く陳列したる所は、カイロの博物館である。實にカイロの博物館は、古埃及の墓の陳列所ともいふべきものである。樓上には、右の木乃伊や、其れを包んであつた布や、又木乃伊を納めてあつた木棺や石棺等が、數知れず陳列してある。此の棺に大小はあるけれども、多くは木乃伊の輪廓に象つて、其の蓋も亦、人體をしばつた形にして、顔がつけてあるのである。遺骸を横にしたまゝの姿であるから、棺の蓋も、足の爪先きの處は、上方に高く作つてある。さて又階下に降りて見ると、木乃伊の棺を藏めたる大なる石棺や墓標の石像や、スフィンクスや、石柱や神像や、巨大なるもの、細小なるもの、雜然として一場に見るを得るの

である。木乃伊は、大層鄭重にしてあつたもので、即ち墓穴の奥座敷ともいふべき所に、石棺があつて其の内に木乃伊形の棺を藏め、しかもそれが二重になつてゐるのもあつて、其の内に木乃伊が、布で、堅くしばつたまゝ、藏めてあるのである。何故に斯の如く大切に遺骸を保存したのかといふと、遺骸が崩れてしまつたならば、死人が次の世に行けないと思つてゐたからである。

四八 埃及古寺の廢墟

埃及に存してゐる古代の遺物は、あながちに墓所のみといふ譯ではない。其の外に、古寺の廢墟も残存してゐる。そして此の廢墟の内には、往々古代帝王の偉業や、技術の進歩の蹟を徴するに足るものもないではない。何れにせよ、非常に古いから珍とするに足るのである。今試にルクソール寺と、カルナックのアンモン寺と、テベスのラムセウム及びメヂーネ・ハブーと、フィ

レイ島のアイシス寺と、アプーシンベルの岩窟寺とについて、其の一斑を述べて見ようと思ふ。



(寺廢のルソクル)

(一)ルクソル寺は、ルクソルの町はづれ、ナイル河に臨んだ處にあるが、是はアメノフィス第三世 (1424—1392 B. C.) の建てたもので、今より三千餘年前の創建である。其の目的はアンモンの神、其の夫人及び其子のコンの神に供へむが爲に建てたものなのである。埃及諸寺の形式の通り、奥に内陣があつて、其の側に諸室が列なつてゐるのであるが、今は大半荒廢して、尨大なる數多の石柱と、ラムセス二世の巨像の形見等を存するのみである。人が六人手をつないで廻つても、まだ足らぬ

位なのもある。此の寺は、アメノフィス第三世の建てたまふといふわけではなくして、それより後の諸王が、或は其の一部を改築したり、又は増築した所があることは、アメノフィスより後のラムセス三世の像及彫刻があるのを以て知るべきのみならず、亞歴山大帝も之に手を入れ、又後世耶蘇教徒が入り來つてから、之を其の教會に使用したものである。もとは茲に、赤色花崗石の、二つの高い柱のやうな方尖塔があつたが、其の一つは後に佛蘭西へ送られた。又此の寺の壁の彫刻で、最も興味のあるものは、ラムセス二世世がシリアに於て、ヒツチ、イスと戦争をしてゐる所で、王が其の馬車を敵軍中に驅り入れ、敵が遂に敗走をする光景、頗るおもしろく出來てゐる。王は戦捷軍の大將であるから、一段大きく現はしてある。加之俘虜の有様が、更に一奇である。首から首へ綱をつながれ、手も又綱を以てしばられて、列をなしてゆく處、統一あり變化あつて、面白い彫刻といはねばならぬ。

(二)ルクソルから北へ行くと、カルナックに出る。其入口に、壊れたスフィ

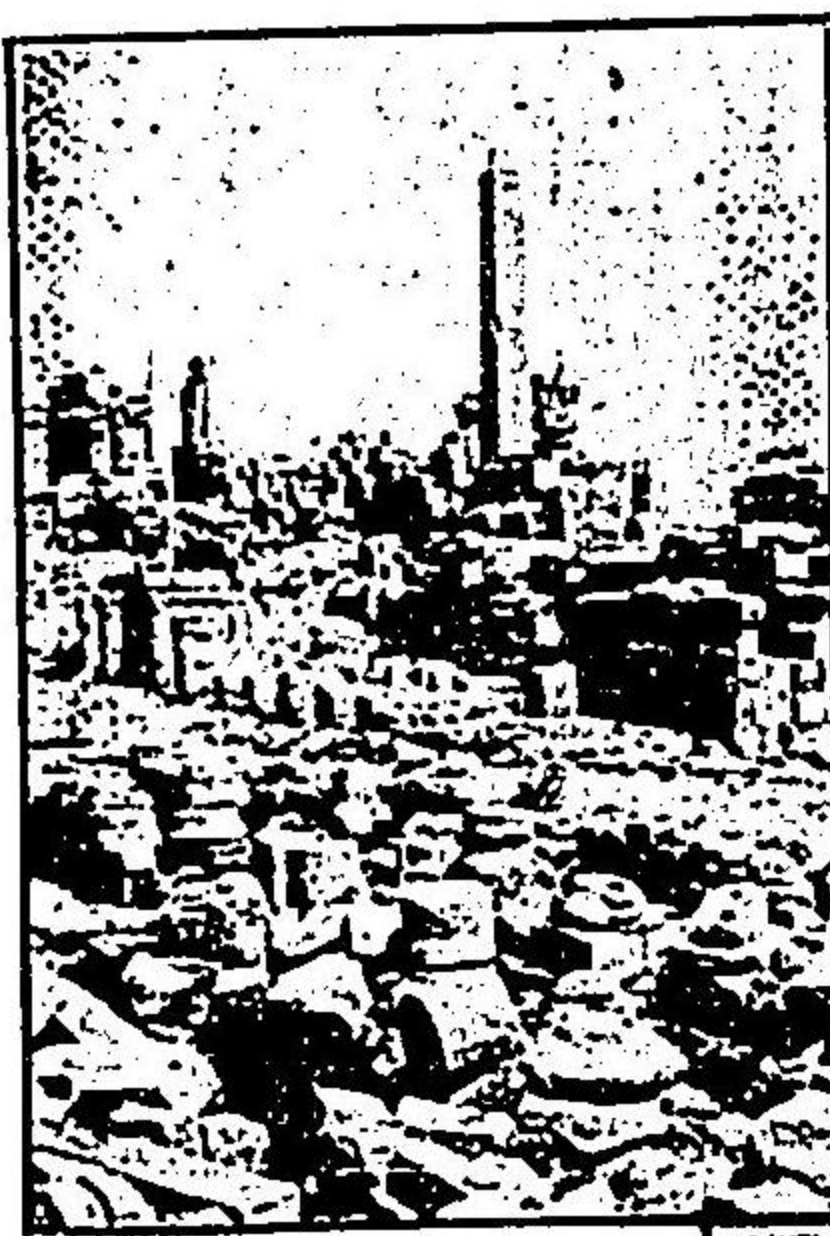
ンクスの多く列をなしてゐるコン寺を通り過ぎると、荒れはてたる村の中に、大なる石壁や、高い方尖塔などが、雑然として聳えてゐる。是が即ちアンモン寺の廢墟である。此の大伽藍は、亦一王の建立に係るにあらずして、歴代の王が手を入れて完成したものである。兎に角アンモンは、當代に於て、最も崇拜されてゐた鎮護の神であるから、人力を吝まず代價を問はずして、其の殿堂を建てたことが思ひやられる。そこで最初に繩張をしたのは、少くとも、西暦紀元前二千二百年代の王であらうといふことであるが、タトモシス第一世(1545—1515 B. C.)が之に手を加へ、マケリー王后(百五フィートの方尖塔はマケリー王后の建てた所と聞えてゐるが)、タトモシス第三世(1515—1461 B. C.)、アメノフィス第三世(1427—1392 B. C.)、ラムセス第一世(1350—? B. C.)、同第二世(1324—1258 B. C.)等、皆亦之に手を加へ、其後トレミー時代にも、更に手を添へてゐるといふことである。門前にスフィンクスの列んでゐること例の如くて、門を入ると、すぐ右の石壁の高い處に船がかいてあるが、

是はナポレオン入寇の時に、書いていつたのであるといひ傳へてゐる。寺の中央の通路の兩側に列んでゐる石柱や方尖塔に驚きながら、左右の天井なしの室の奥を見渡しつゝ、進み行くと、或は大食堂に出たり、或は石門を通つたり、前後應接に暇がない。奥まつたる一室が亞歴山大帝の室と聞いて、少し立ちとまつた。大帝の像は、壊れて見わけもつかない。此の邊の壁畫に、亦俘虜の手をつな

(壁間の彫刻)



(ス ク ン キ フ ス の 前 門)

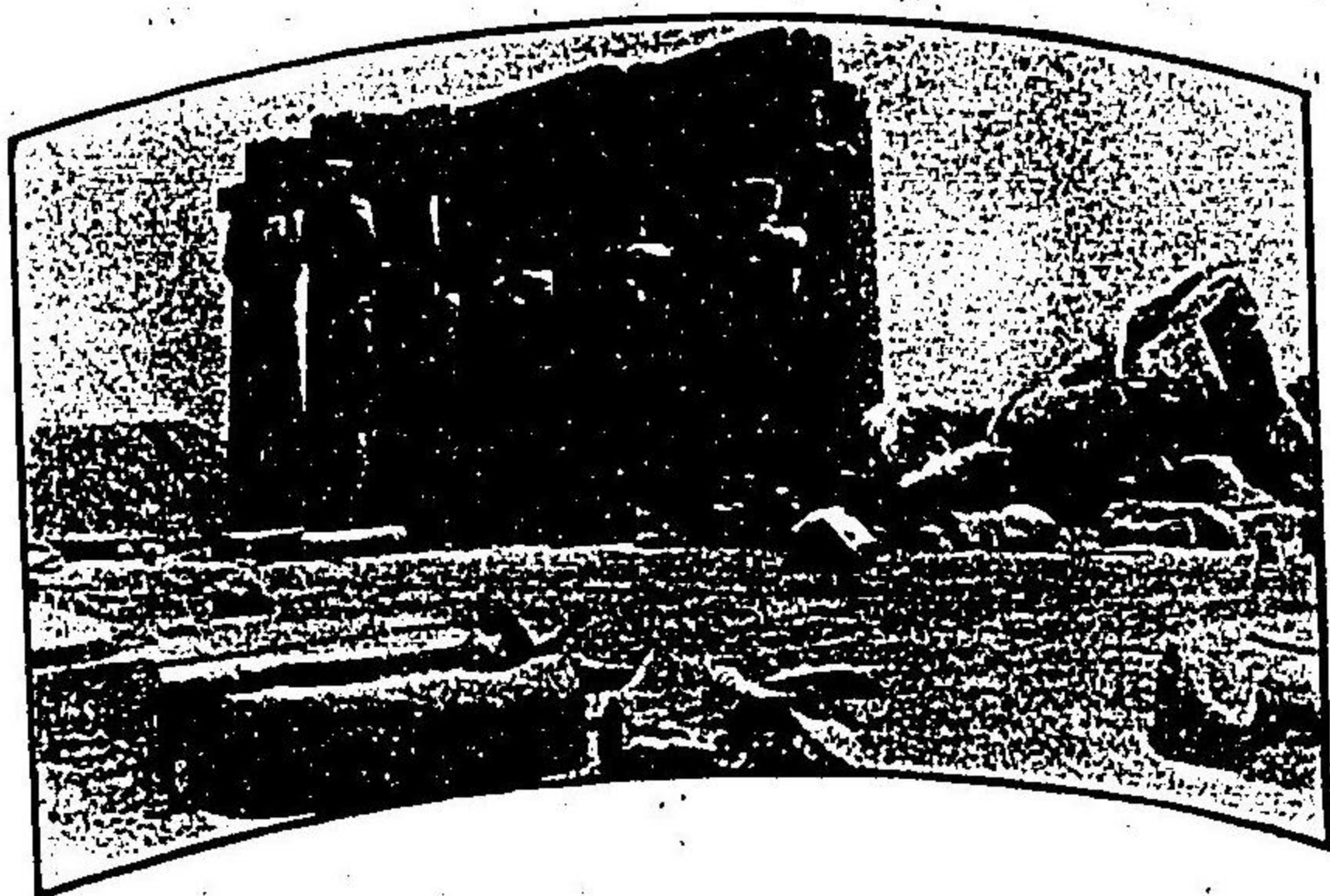


(寺廢のクツナルカ)

がれてゐる有様や、或は一處に殺されんとして合掌してゐる所などがある。此の大伽藍を離れて右手に進み行くと池がある。此の邊の建物も、いたく壊れて礎のみを残してゐる。更にそれより馬に鞭して、右手に走つてゆくと、壊れたスフィンクスの道極まる處が即ちムート寺で、人身獸首の神像の缺けたのが多く立つてゐる。其の後方にも池がある。何れも聖池といふ名がついてゐる。寺の周圍の障壁は壊れてしまつて、徒に砂塵の其の上を捲くに任せてある。

(三)それよりナイル河を西に渡つて、テベスの墓にゆくまでの途中、最も河に近き處に、其の名も著しきラムセウムといふがある。あたふ當年巨匠の苦心の跡も、徒らに亦荒廢して、其の一部を存するのみである。埃及最大のラムセス二世の巨像は、いつの間か顛伏して、破壊してしまつたが、併しそれによつて、近づいて以て其の大に驚くことが出来る。其のすぐ側に立つてゐる石壁に、カデシ戦争の彫刻があるが、王は例によつて馬車を亂軍中に

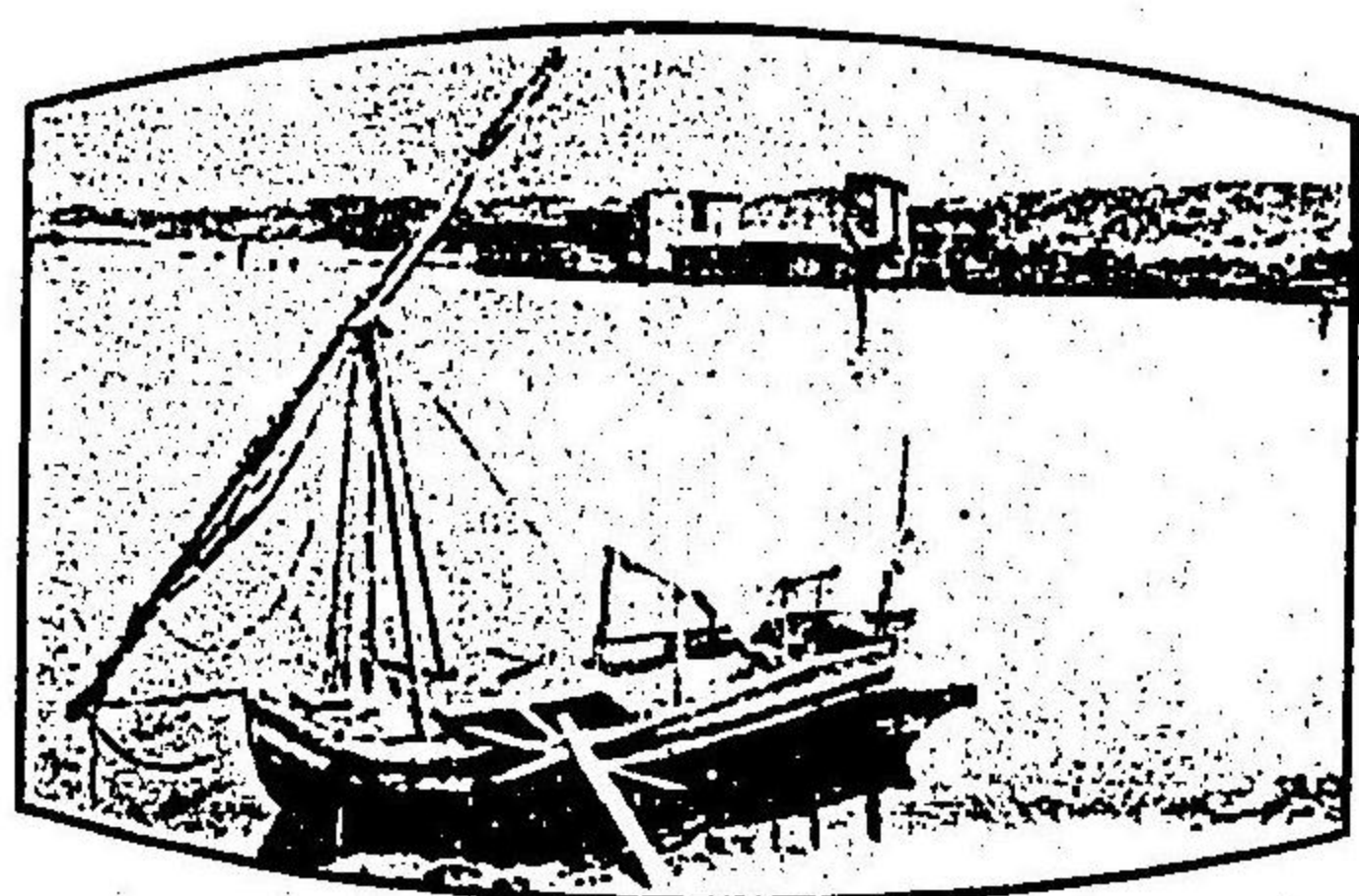
驅け入れ、敵のヒッチ、イスは、敗れて混亂の状態を呈してゐる。さすがに有名なるラムセス二世が、其の盛時に建てた寺だけあつて、人をして昔時の壯觀を追想せしめる。



の跡が、今は其の礎のみを數へしめる。又周壁に、王が神前に於て敵を撃た

むとする書や、俘虜を引張つて行く書が例の如く彫刻してある。此の寺の後方には、住み捨てた多くの住居の跡が、其の累々たる土壁を残してゐるが、是は後世羅馬人が来て、村落を作つた遺蹟であるといひ傳へてゐる。

(五) フイレール島は、アスアンからすぐ南に當れる。ナイル河の川中島であるが、今は全島水中に沈んで、處々に石柱石壁の兀立するを見るのみである。余輩は、漸くアイシス寺に舟を停めて、稍浮き上つてゐる處に昇つて見た。此の建築は、トレミー・フィラデルファス (Ptolemy Philadelphus) の時に始まり、其の次のトレミー三世の時に、大體は仕上げられて、彫刻などは、猶其の後までかゝつたといふことであるが、最早埃及固有の彫刻については、多くいふの要もない。但し石段が階上に導びくやうにな



(る波に1レイフてせ載を客舟扁)

つてゐるから、進んで屋上に昇る。屋上といつても、日本の屋根の上の様に傾斜があるわけではない。扁平である。そして又更に、其の上の高い處に昇るやうになつてゐる。頂上に杖を止めて觀望するに、身は水上の浮宮に立つて、羽化登仙の想がある。

(六) フイレールから汽船でナイルの長流を溯ると一日一夜で、アブ・シンベルといふ處に着く。こゝは殆ど埃及の南境で、別に町でもないけれども、察するにもとは部落のあつた處であらう。西岸に岩窟があつて、其の入口に巨像が幾つも立つてゐるから、上陸して其の窟内に這入つて見ると、是が即ち所謂岩窟寺で、二つの寺が列んでゐるのである。大なる方には、内部に男子の石像が並列してゐるのみならず、總て彫刻が強く男らしい。中には王が俘虜を撃つてゐる處や、俘虜のつながれて行く處などの例の彫刻も見える。小なる方は、總て女らしく出来てゐて、彫刻の人物も女が多い。此の寺は、ラムセス二世 (1324—1258 B.C.) の建てたもので、さすがの石像も、年代に

は争ひ得ずして、頗る磨滅せられてゐる。其の小なる方の寺はラムセスが、我が妃の爲に建てたものなのである。何れも岩窟寺といはるゝだけあつて、岩を穿つて寺にしたものであるから、内部は暗くして燭光を要するが、但し、東の方に向つてゐるから、拂曉日出の際は、日光が其の奥室にまで達する。以上陳ぶる如き古寺の廢墟は、兎に角世界に多く其の比を見ざる古い物であるから、我邦學者も、時々杖を曳かれむことを希望する。東洋學振興の爲に、特に之を希望するのである。

四九 埃及の南境とヌビヤの沙漠

ナイルを溯る汽船を有する會社は、二つあるが、余は都合によつて、アスアンの南セラールから、蘇丹政府の所有に係る汽船蘇丹號に賃して、河を溯ることゝなつた。此の船は、三月十四日(明治四十四年)午後六時半にセラールを發し、翌日の午後五時半にアブ・シンベルに碇泊し、其の翌十六日の午前

六時にアブ・シンベルを發して、其の正午にワ・デ・ハルファに到着した。こゝは已に埃及の南境を越えたるヌビヤ沙漠中の町である。

そこで埃及の南端の國境はどこかといふことについて一言して置きたい。さて此の南境には、別に山河天然の境界線がない。又實際其の境界線が、或は南に進んだ時もあり、或は北に退いた時もあったのである。ベデカイによると、有名な埃及の王モハメッドアリ¹の歿した時には西曆一八四九年、其の南境は、昔にヌビヤの沙漠のみならず、蘇丹のターカヤ、セナールや、コルドファン地方にも及んでゐたとある。それからイスマイル (1818-1879)の時、更に其の南方に領土を擴張して、自ナイルの上流に及び、遂に北緯二度にまで達したのである。然るに其の次のテウフィックの時代に、マーヂの亂が起つて、蘇丹はいふに及ばず、ヌビヤまでも盡く失つてしまつた。此の亂には、埃及軍が大なる損害を受けたのみならず、英國の將卒も、随分犠牲となつてゐる。即ち一八八三年の十一月には、英將ヒックスの率ゐたる一萬

の埃軍は破滅せられ、翌年の二月には、英將ベーカーの率ゐたる三千五百の埃軍も利を失つたので、時の蘇丹總督ゴールドン將軍が、沙漠の險を冒して、直ちに蘇丹の都カルツームに入り、其の亂を鎮定せんとしたが、翌年は亦殿中に於て刺されてしまつた。今日猶此の刺された處が残つてゐる。それから暫くは、南境恢復の見込もなく、遂に今王アッバス二世の時代になつたが、一八九六年に、キツチナー將軍の率ゐる英埃同盟軍が、再び南進して漸くに勝利を得、一八九八年の九月、遂に敵の都オムヅルマンも落城した。是に於て、蘇丹は復た埃及の掌中に歸し、此の度は、純然たる埃及の領土でなくして、英埃政府の支配と定まつて、其の總督には英國人を以て之に充てることになつたのである。そこで現今埃及の南境は、どこ迄になつてゐるかといふに、前にいつたワイヂ・ハルファの北方二十五マイルの地、即ち北緯二十二度の横線が是なのである。尤もハルファの北方の地點は、二十二度より少し北に引込んでゐて、實際はアデンダンといふ處が境になつてゐる。

船セラーを發して、脹れたるナイル河を溯れば、兩岸の秃山、渺茫たる砂原に迷ひ、人の氣はいも少ない。ナイルの水中に兀立する椰子の樹も、一奇觀たるを失はない。日は平砂に落ちて、月東山に出つれば、其の椰子の影が婆娑として寂莫を破るの外、亦遊子の憂を解くものもない。

船はカラブセよりコロスコに進み、コロスコよりアブ・シンベルに向つて、蜿蜒長蛇に似たる航路をたどつて行く。此の間、舊寺古刹の存するもの一にして止まらない。又羅馬時代の城址の廢殘せるものも、船頭より見上げる事が出来る。せめては青羅破壁を攀ぢ、楓葉岩角を繞つたならば、又一段の衰れであらうが、秃山砂丘、とても左様な眺めはないのである。

ワイヂ・ハルファは、船の着く地點より少し南方にある土人の村で、船の着く所の名は、テウファイキエといつて、英人の手によつて造られた處であるけれども、普通にこゝをワイヂ・ハルファと稱へ來つてゐるのである。そして此處から、蘇丹政府の軍用鐵道が、ヌビヤの沙漠を横きつて、南東に走ること

約十六時間、アブ・ハマッドに於て、遂に西南から迂曲して来るナイル河の岸に出て、再びその岸に沿つて南に走ること約十時間にして、遂に蘇丹の都カルツームに達するのである。

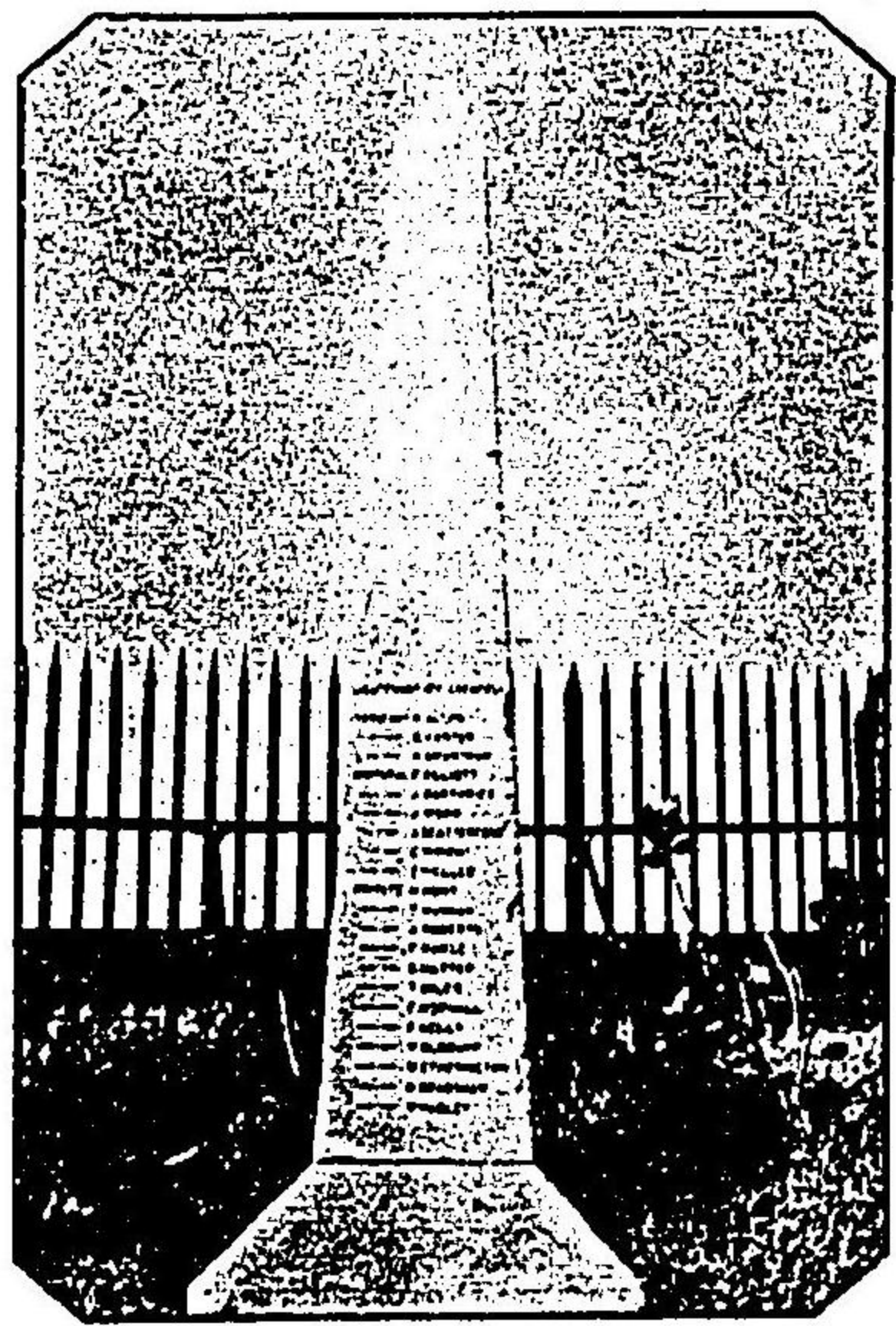
ハルファからヌビヤの沙漠に入ると、初の間は思つたよりも寂しくない。何となれば、處々に地殻が高く露はれて、之に砂のかぶさつてゐる小山が多く見えるからである。又鐵道の沿路にも、旅行隊の野宿したと思はるゝテントの柱穴も窺はれる。但し太陽のある間は、炎熱焼くが如くである。もし風が起つたならば、萬丈の熱塵車を打つて、殆ど堪えられない。日の暮れるのを待つて、涼を納れむとすると、黄色の砂面は、一變して灰色を呈し、恰も死が天地を支配してゐる如き寂しき光景を現出する。そして涼を納れるどころではない。さて小山が處々に見える間は、まだよいが、やがて小山の影も消えてしまふと、實に漠々たる萬頃の平砂となる。大海に譬へようか。波瀾の活氣が缺けてゐる。高山より見おろしたる雲のたゞよひに比べ

ようが。吞吐の變化がない。唯々窒息の想をなして、我が心臓の動くのを生命とするのみである。余は是に於て、此の鐵道を架した英人の苦心、否、更に其れよりも、南方の地角に、第二の英國を建設せんとする英人の勇氣に、今更ながら感服せざるを得ないのである。

五〇 蘇丹の都、青白ナイル、及びオムツルマン

蘇丹の都カルツームに通ずる鐵道は、西曆一八九六年から、其の翌年にかけて出来たのである。何分右いふ如き沙漠の上に作つたのであるから、其の困難は想像の外である。最も難儀なのは水の缺乏で、是亦蘇士運河開鑿の時と等しく、處々に水の供給所を作つたのである。かくして非常の勉強を以て、毎日一マイルづゝの速力で、鐵路を敷設した。もとは、カルツーム北岸即ちカルツームの町がナイル河に向つてゐる對岸の地までに止まつた

のであつたが、今は已に鐵橋も出來て、渡船の不便を見ることなく、直ちに、カルツーム中心部^{セントラル}まで達するを得るのである。



(神魂忠場戦古ンマルヅムオ)

定の後、英國人は再びカルツームを總督府の所在地と定めて、一八九八年から、町の再築に着手したのであるが、それから僅に十數年の今日、兎に角沙漠

つて、建築した町であつたが、かのゴルドン將軍が殺されて已來、マーヂ黨の爲に、一旦榮えむとした町も、空しく破壞されてしまつた。そして河を隔て、西北に當れるオムヅルマンといふ町が、マーヂの根據地で、こゝが一時榮えた。併し一揆鎮

の中に、一都會を作るに至つた英人の働きは、眞に我青年の鑑むべき所である。

カルツームに入ると、故ゴルドンの記念を以て満ちてゐる。先づ總督府の殿中(俗にパレイスといつてゐる)には、將軍の刺された處が形見を止めてゐる。其の宮



(神念記軍將ソドルゴるけ於にムイツルカ)

殿の裏手を、ナイル河に沿うて東に行くと、ゴルドン・メモリアル・カレッジが

ある。此の學校は、蘇丹に於ける最高の學府であるのみならず、校内に蘇丹政府の教育部の事務局があつて、蘇丹の教育を統轄し、校長が即ち教育部長を兼ねてゐる。其の他ゴールドン記念碑のあるは勿論の事は、はてはゴールドン旅館など、いふものも出来た。

さて此のカルツームを中心とせる蘇丹の政治は、今の處、全くの軍政となつてゐる。總督は一方に於て行政の長官で、他方に於ては埃及軍のシルダ（總指揮官）である。此の總督の下に、各省を有する政府が組織せられて、英人が其の主腦となり、埃及人が之に加はつてゐる。地方は十三州に分れ、其の長官は何れも英人である。英人の下に埃及人が居り、又蘇丹人も使はれてゐる。シルダ即ち總指揮官を戴ける軍隊は、十六箇大隊より成つて、第一大隊より第八大隊までは埃及軍、第九大隊より第十五大隊までは蘇丹軍で、其の外又第十六大隊が埃及軍なのである。現今の總督（兼シルダ）は、ウインゲートといふ人で、一八九九年、キチナー將軍の後をついて其の職に任

ぜられたのである。蘇丹政府の歳入・歳出は、年々増加することいふまでもなく、一九〇九年の統計によると、歳入が百三十七萬七千五百九十九リヴル、歳出が百二十八萬五千五百九十九リヴルで、茲に始めて歳入が歳出を償つて餘あるに至つた。其の前年までは、常に歳出超過であつたのである。蘇丹の人口は、約二百四十萬と稱せられてゐる。都のカルツームは、人口一萬八千五百で、其の内歐人は一千人計りである。（最近のスタン・アルマナックによる）。

カルツームの西から、ナイルの河の中へ突き出てゐる三角洲の嘴は、是れ即ち青ナイルが白ナイルに合する地點である。つまり青ナイルは、カルツームの北を流れて、此の三角洲の嘴の先きに至つて、南より流れ来る白ナイルに合流するのである。



（埃及及砲兵の駝使）

て此の青白ナイルといふのは、全く水の色を以て名づけられたものである。即ち此處で落ちあふ二つのナイル河の源流中、東より来る者は、アビシニヤの山間より流れ出て西南より来る者は、コンゴ地方の沙漠を洗つてこゝに来る。そこで一方の水は清く、一方の水は濁つてゐる。一方は青く、一方は白い。その青白の分界が、合流の地點に至つて、極めて顯著である。即ち白い水の中へ、青い水が線を畫して流れこんでゐる。已に流れこんで、青白が混合する邊の西岸に、かのオムヅルマンの町がある。

オルヅマンは、マーヂが一八八三年より其の翌年にかけて建設した處で、一時は號令の出づる處となつたのである。今いつて見ると、依然沙漠中の町であるが、市場もあれば、店もある。回教寺院もあれば、近年小學校も出來た。此の邊で賣る酒類は、多く英國から輸入する。市場では、中央亞弗利加への輸出品を始めとして、土人向きの反物類や、身の飾り物を賣つてゐるが、其の中銀製の腕輪、足飾の類は、町の中でも製造してゐて、是等は婦人唯一の

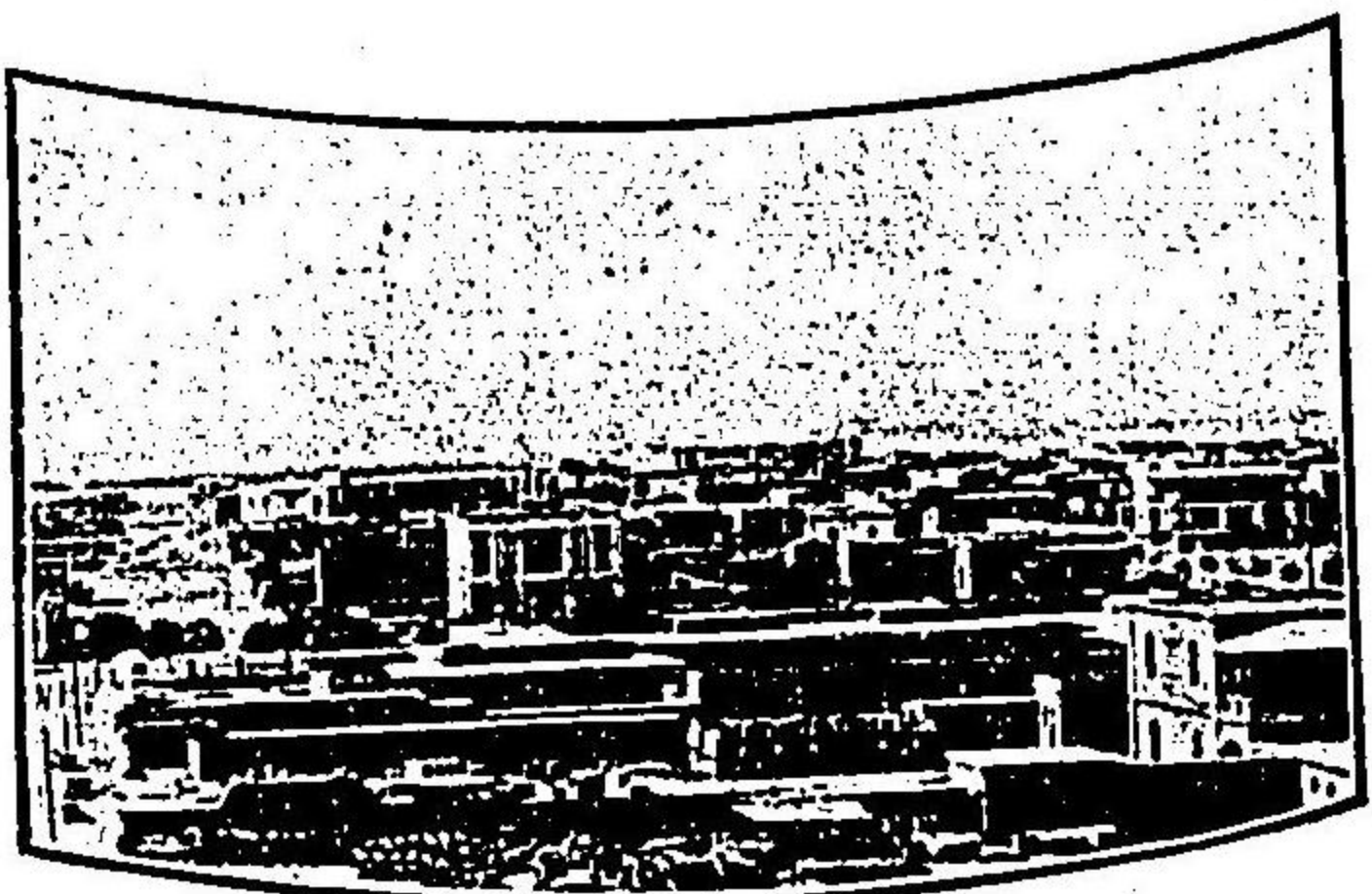
財産となるのである。人口は約四萬五千で、其の内歐人も五百五十人ほど住んでゐる。此の邊のニグロと來ては、随分思ひ切つて黒いもので、白く光るものは、眞に目と齒とのみである。こんなニグロの娘でも、矢張恥かしいことは知つてゐるものと見えて、教會立の女學校を觀にいつた時、英語の讀本を讀ませられて、低い聲で、語尾の聞き取れない様な讀み方をしたのも、又幾分かしをらしかつたが、顔は赤らめたかどうだかは、眞ッ黒て見わけがつかなくつた。

五一 蚊の全滅及び風紀上の注意

蘇丹へ這入つて感心することが二つある。一つは、英國人が國運の發展上、總ての障害物を撲滅する勇氣と、今一つは風紀上の注意と、是である。

(一)總ての障害物を撲滅せずんば止まざる一の例證は、即ち蚊を全滅したことである。余のカルツームにいつたのは、三月の事であるけれども、最早

此の地の初夏であるから、温度は頗る高く、早朝から、室内で華氏の八十度を示すといふ有様。随て蚊は無論盛であらうと思つてゐると、ホテルの寢臺に、蚊帳の設備がない。蚊帳は旅人が持参するとなつてゐるのかと驚いてゐたが、夜に入つても蚊が出ない。翌朝應接室へいつて見ると、衛生局の掲示が貼つてある。蚊一匹たりとも發見せらるゝ人あらば、早速衛生局へ御通知を乞ふといふ意味である。それからゴルドン・メモリアル・カレッジへいつて見るに、多くの蚊の標本が集まつてゐて、中にもマラリア熱媒介の蚊が頗る多い。後に醫師に聞いて、始めて英人の苦心を諒知した。もとは此處も蚊の巢窟で、マラリア熱の流行は恐るべきものであつた。然るに、一たび英人の手に歸してより、英人は先づ此の衛生上の障害物を撲滅することに全力を盡した。蚊を生ずべき總ての腐敗せる池沼は埋められた。衛生巡視官が設けられて、此の巡視官は、勇を鼓して巡視した。たとひ家の内軒の下たりとも、蚊を生ずるの處ある處は、嚴重に消毒した。蚊を取つて來



(街市ムールカ)

た者には金を與へた。かくすること數年、蚊は漸くに全滅せられたのである。が、衛生局は、今以てかの掲示を出してゐる。かくてマラリア熱は、蚊と共に驅逐せられて、カルツームは、沙漠の中に、健康地たることを標榜し得るやうになつた。余は蚊の全滅よりも、英人が深く瘴烟瘴雨の地に進入して、茲に平然として家庭を作り、茲に毅然として新英國を建設し、瘴境を變じて樂土となし、天涯地角に英國産物の消費地を作るの勇氣と、堅忍と、遠大の企望とに感心するのである。

(二)風紀上の注意に關しては、埃及の南境を越へて、ブーヂ・ハルファに來る間の船中で、蘇丹案内といふ書物を讀んでゐると、其のうち、蘇丹政府の事務官長が出した一つの掲示が載せてある。此の掲示は、旅客が土人に與ふる心附け金についての

注意で、一九〇四年十二月に出したものである。其の全文の大意はかういふのである。

我蘇丹總督は、旅客が蘇丹の小兒乞丐、其の他に金錢を與へ給ふことを望み不申候。方今蘇丹人は、未だ腐敗致し居り不申候間、埃及人の如く、漫りに心付け金を要求し、正直に生業を勵むことを見捨つる様の儀無之候。若し金錢を與ふるの御芳志有之候は、病院の維持、貧困者の救援、又は病者の扶助等の料に御寄附被下度、有司は必ずよく之を管理致すべく候。又總督は、其の一部を利用して、蘇丹目下の最急務たる、教育の爲に、之を費さんことを望み候。

右の如くであつて、そして「教育」といふ語は、特筆大書して、人の目に觸れ易くしてあつた。余は此の揭示を實に尤もであると思ふ。余は之を些事として看過することが出来ないのである。此度南洋から、緬甸、印度を経て埃及に來て、國家頹廢の原因が、努力奮勵の氣風の衰微と、僥倖を冀ふの輕薄心

の増長とに基くと、の多きを見て、有識者は、旅客と風俗との關係を輕々視してはならぬと思ふにつけて、益々蘇丹總督府の注意に感じたのである。眞に戒むべきは、乞食根性と泥棒根性とであるといはねばならぬ。佛教喜捨の影響として、人に物を乞ふを自負せる緬甸人も氣の毒であるが、印度や埃及の下層の國民が、小兒に至るまで、手を舉げ頭を下げて、人に金錢をねだるを恥ぢないやうになつたのは、將た誰の罪であらうか。想ひ起す。蘇士の運河を通る時、船の上から、旅客が銀貨を陸に向つて投げると、駱駝を引いてゐた立派な有髯男子が、駱駝を捨て、置いて、其の銀貨を拾ひ取らむと走り寄つて來て、遂には船と競走しながら、遂に手を延ばして、今一つと要求する有様。男の技倆をさげること幾等。之を日本の男兒に見せたなら、さぞや憤慨もするであらうが、此の憤慨がある間は、國民の花なのである。

五二 蘇丹の東境

カルツームから東の方スダン港まで、一週三回運轉の直通列車に乗つて、紅海の西岸へ出るには、二十三時間を要する。此の間は、不相變の熱塵、深く車室を侵して、餘り愉快ではないけれども、ヌビヤの沙漠を横斷した時の様子は、驚くべきことではない。兩側には、砂上に亂立して半枯れんとする樹木を見ることが出来るし、又雨期に水を疏する砂堤などもある。さて其の荒原のあなたは、こなたに、時々火事かと思はるゝ様な煙が、柱を立てた如くに舞ひ上るのは、何かと見てゐると、旋風砂を卷くの光景である。かくて紅海に近づくと、従ひ、段々山が多くなつて、(無論秃山であるが)砂塵にむせびながら、遂に紅海の青海原を望む時が來ると、眞に再生の想がする。

汽車の止まる最終點がスダン港の埠頭で、こゝから又埃及政府の郵船に乗じて、蘇士に出ることが出来るのである。さて此のスダン港は、つい近頃出來たのであるが、入口は中々良く、風を避けるにも便であつて、深さは十尋乃至十四尋、海底は柔かな珊瑚と泥とである。但し水先案内税は當然拂ふ

べきことになつてゐる。此邊の風は、多くは北東より吹き來るのである。埠頭の深さは三十フィートで、岸には百廿五メートルづゝの、五つの錨泊所がある。又電力の石炭輸送器四つと、電力の石炭取扱橋竿一つとあつて、此の石炭輸送器は一時間に三百噸の石炭を取扱ふことが出来るといふのである。其の他、六十噸の扛重機と、十五噸の扛重機とがあつて、各々蒸汽仕掛けである。又船渠には船舶修理の設備がある。燈臺は港の北東十四マイルの處にある。(スダンアルマナックによる)。

かくの如く、スダン港には、相當の設備が整つてゐるが、何分新しい處であるから、今はほんの寂しい港である。併し現在及び將來に於て、蘇丹方面から海へ物を出すには、鐵道を利用して、此の港の厄介になる外はない。蘇丹が、おひ／＼開けて、綿や砂糖を多く産出するやうになつた暁には、此の港が、噸に繁榮に赴くことは明かである。何れにしても、此の港の將來は有望といふべきで、今日の如く人に知られないことは、久しからぬであらうと思は

れる。

五三 埃及及び蘇丹の衣食住

上にも随分埃及や蘇丹の町村の話をしたが、ちよつと想像すると、茅ぶきの小屋か武力屋根の煉瓦作りの家が並んでゐる様に考へられるであらう。然るに實際は、大分趣が違つてゐるのである。尤もカイロやアレキサンドリヤの如き大都會で、而も歐人の多く居る所又は富豪高貴の住居等は格別のことであるから、茲にはいふを要しない。茲にも話をしたいと思ふのは、主として田舎の部落の光景である。

此の部落の光景が、印度から以西は、全く南洋と趣を異にしてくる。南洋の方は、前にもいつた如くに、木や竹で作つた家が多いから、稍我が故園を忍ばしむるのであるが、印度から以西になると、土や煉瓦で築きあげて、之にホワイトポリッシュをしたものとなる。それが段々田舎になると、唯土で方形

に築いたまゝのものになる。更に埃及の田舎に来て驚いたのは、最も簡単な家になると、土を方形又は圓形に築くのはよいが、天井の無いのが多いことと是である。成程雨が少いからそれでもよからうが、併し又此の暑い國に、天井なくしてよくも生きて居られると思はれる。子供の時から馴れて見れば、左程にもないと見えるが、中には漸く植物の葉を並べて、天井にしてゐるものもある。ナイルの河畔に、其の河の泥を以て、唯方形の壁を作つて、其の内に人が屈んでゐるのであるから、遠方から見ると、村があると見えぬ。近づいても、猶且見わけもつかない位である。但し太陽の光線が強い所へ、方形の家であるから、陰影が判然として、茲に始めて家といふことが認められる。段々上埃及から蘇丹へ這入つて、何等の趣味もない砂の上にかゝる土屋の立つてゐるのを見る時は、我國人の様な四季に花咲く庭前を控へた木造の軽い家に住み馴れた者には、一種の苦感を起す外はない。かゝる處の常として、水を得ることが困難で、井もなか／＼深い。尤もナ

イルの沿岸では、河の水を汲み上げる。水を井戸より汲みあげるにしても、河より汲みあげるにしても、矢張印度のやうに牛を用ひる。大きな平面の



齒車を牛に牽き廻はさせて、それが又縦の齒車を廻はす。縦の齒車の軸から綱が下げられてあつて、是に又多くの土製の壺が結びつけてある。壺が水に達すると、自然に水が其の中に這入り、上へ昇つて自然に水がこぼれて、筒の中に流れ出るのである。

水を得ることの困難よりも、恐らく食を得ることは、更に困難なるに相違ない。米はナイルの河口の地より外には、よく出来なから、頗る珍重せら

れ、埃及で作つた米は、之を自分等の食料とせずして、歐洲へ輸出する。そして自家の食用に供する米は、緬甸から輸入するのである。其の他、小麦や、玉蜀黍や、砂糖の木莖などが、常食に用ひられる。蘇丹では、アンヅロボーゴソルガムが、主として食用に供せられるのである。是等のものが、皆ナイルの水の恩澤によつて出来るとすれば、實に此の河の貴重なることも思ひやられる。

男の衣は、ボタンの多い胴着の上へ、胸の少し開いた、そして筒袖の先きを少し裂いた上衣を、だらりと着流して、之を紐で止めることは、日本と同じであるけれども、左合はせに着る。頭には白又は赤い布の烏打帽の様なかぶつて、其の周圍を白い布でぐる／＼巻きにするのは、暖國の俗概ね皆一様である。靴は西洋靴の様で、先きが尖つて、そりかへつてゐるのを穿つてゐる。尤も下等な者は、跣足である。昔から此の國に入りこんでゐる土耳其系の人は、ちやんと洋服を着て、赤い土耳其帽をかぶつてゐる。此の赤帽

は、一般に用ひられてゐるのみならず、官吏は皆之を冠ることゝ定まつてゐるから、英人でも、官吏は皆此の風に従つてゐる。赤帽の勢力も亦たいしたものである。

上流の婦人は、多く見るを得ないけれども、矢張り例の「かつき」を冠むつて、だらりと足の先まで垂れてゐる。そして薄い純白の布で、鼻より下を蔽うてゐるが、是はコンスタンチノール邊の風を移したのである。中流以下の者になると、矢張り頭から、黒い「かつき」を足の先まで垂らしてゐるが、跣足の者も多く見受ける。又黒布を鼻の下から腰まで垂れらしてゐる。そして上埃及の方へ行くに従つては、鼻の上に管状のものをかけて、益々顔の見えないやうにしてゐる。蘇丹の方へ行くと、眞黒な婦人が、これをやつて、其の頭の上に水桶をの



(人 及 埃)

せてゆくのは、甚だ面白い。又印度から埃及にかけて特に目につくのは、婦



(人 婦 の 埃 南)

人の指輪、腕輪、耳輪の多いことでは、鼻輪から、足の指輪までである。而も其の諸種の輪、殊に足輪は、一つや二つに止まらぬのであるから、歩くときには、恰も囚人でも行くかのやうに、ザラリ〜と音がする。併し是が一種の誇りなのである。

五四 信の一字

スダン港から蘇士港まで、約六十五時間の航海中、一日英國人が余に國自慢をしていふには、今や蘇丹は、英埃連合政治とはいひながら、實際は御覽の

通り英人の支配となつてゐる。英人が世界到る處に、廣大なる地積と、多數の人民との支配者になつてゆくといふは、是れ決して兵力ではない。又頭数による譯でもない。兵力からいへば、蘇丹の如きは、僅に五百の英國軍人を有するに過ぎない。あとは皆埃蘇の連合兵である。頭数からいへば、印度三億の大衆中、英人は僅に二千餘に過ぎないではないか。是は兵隊を除いた話で、兵隊を合せても一萬そこ〜である。かゝる少數の英人が、何故印度や蘇丹の如き、廣大なる所を支配してゆけるかといふに、是れ全く英人の品性によるのである。英人はうそをいはない。英人には信が置ける。英人のする事だから大丈夫であらう。かういふ感動が、自然と野人の間にも起つてくる。蘇丹人の如きも、埃及人のいふことは信用しない。そして英人のいふことには、道理があると思つてゐる。それであるから、田舎へいつて見ると、國人同士の間には、争ひがある場合には、英人の處へ来て正邪を判断してもらふ。英人がもし甲が正しいといへば、唯々として皆之を然りとす

る。そして其の争ひが立ろに静まつてしまふ。もし埃及人が判断をするときには、中々容易に之に服さない。あゝ信の一字、是れが自然英人をして支配者たらしむるに至るのである。

大要右のやうな話であつた。いふまでもなく、是は英人側よりの話であるから、蘇丹人の見地からすれば、又其の趣を異にするであらうとも思はれる。併し大體に於て英人の自負する點は、慥に一部分の眞理を語つてゐるのである。印度人や埃及人の如く、英國の支配より脱せんことを口にする國民でも、個人としての英人には、何等の悪感を有してゐない。唯西洋人に支配されるのが好ましくないといふまでである。諺に、主人を善くいふ僕婢はないといふが、支配する異國人を善くいふ國民もないものとすれば、誰が支配しても悪口は絶えないので、個人としての英人に悪感を持たぬのは、前いふ所の英人自負の一理あることを示してゐるものではあるまいか。何れにしても、この英人の言は、頗る吾人の味はなければならぬものである。

やがて船は蘇士の港について、總ての検査も済み、カイロ行の汽車に乗りうつらうとすると、氣のきいたやうな埃及人が来て、色々荷物を運ぶ。中には奪ひあひなども始まる。余の荷物を取扱つた者は、余を汽車に急がせながらいふには、荷物の運賃や、検査料や、何角一切の手数は、私がするから、早く五圓計りを出しなさい、時間が遅れてはならぬから、といふのである。余は之に従つたが、汽車に乗つても、急に彼の者は荷物を持つて来ないから、停車場について驛長に聞くと、検査料も何も全く虚言で、唯三十歩ばかり歩く間の苦力の賃さへ與ふれば、それでよいのであるから、さてはと驚いた。先刻信の一字で天下を支配するといつた英人の國自慢の矢先きに、罔らずも此の事に遭遇して、餘りに對照が著しいのに感謝した。信を得る國民は天下を支配し、人を欺く國民は人に支配せられる。將來我國民は、どちらを擇ばむとするか。國民の最も考慮すべき所、教育家の最も留意すべき所であると思はれる。

五五 埃及の産業、及び外國との貿易

埃及及び蘇丹は、ナイルの流域を除くの外、殆ど沙漠であるといつてよい。然るに此の河が、沙漠一帯の谷を潤して、茲に國土に生命を與へてゐるのであるから、埃及はナイルの恩養とは、昔からいつた通りである。そこで此の河の沿岸の地は、河水の汎濫が終るのを待つて、農耕の活動を現出するのである。汎濫の時期は、上流と下流とで差違はあるけれども、大體からいへば、六月より起つて、十月に至るのである。それであるから、冬期の農業は、上部埃及にあつては、十月の中旬、中部埃及にあつては、十一月の初旬、下部埃及にあつては、十二月の下旬に、種を蒔くを常とする。そして地面は、河水が沈澱させていつた泥の爲に、平滑となつてゐるので、種は其の上へばら蒔きにする。それから四箇月もすると、收穫し得るやうになる。然るに夏期の農業になると、四月より八月までの間に之を行ふのであるが、此の間に生ずるものは、

冬期のやうに容易に成熟しない。例へば米の如きは、五月に種を蒔いて、十一月に刈り取り、棉花の如きも、四月に種を蒔いて、十一月又は十二月に收穫するのである。以上はナイル河の沿岸の話であるが、河口の大三角洲、即ちカイロからアレキサンドリヤ方面にかけての情況に至つては、上流の沙漠の光景と全く違つて、餘程整頓してゐる。即ち大小の溝渠は、縦横に貫通して灌漑に適し、漫に河水の汎濫に任ずるやうなことはない。萬頃の沃野には穂の波が打つて、殆ど我國の田野を見るの趣きがある。

さて此のナイルの沿岸に生ずる農産物の主要なるものは、小麥、玉蜀黍、大麥、及び米。尤も米は、河口の大三角洲の外には出來ない。それから豆類や、葱、南瓜、胡瓜、キャベジなどの蔬菜類、并に砂糖や藍なども出來るが、最も著しいのは棉花たること、論を待たない。煙草も、埃及煙草の名が世界に著されてゐるに係はらず、今は全く其の栽培を禁じてあるから、埃及で製する巻煙草は、皆其の原料を土耳其から取るのである。米も、其の生産地は一部分

に限られて、頗る珍重されてゐるから、埃及で出來るよい米は、歐洲へ輸出すること前陳の如く、而して土人の食料に供するものは、蘭貢又は柴棍より輸入する。

兎に角埃及は、純然たる農國であつて、生産物は棉花であると約言してもよい。それであるから、外國への輸出は、棉花を除いては他に顯著なものはない。一九〇九年の輸出價格總計二千六百七萬六千二百三十九リッタル（一リッタルは二十シリング六ペンス）で即ち約我が十圓の内、棉花は二千四百四十七萬七千七百三十九リッタルの巨額を占め、他のものは、シガレットの三十六萬五千八百一リッタルと、諸品一切を合せての四百二十三萬二千六百九十九リッタルとあるのみである。

此の棉花は、皆アレキサンドリヤの關門を通つて、諸外國に輸出せられるのであるが、一九〇九年九月一日より一九一〇年八月三十一日に至る一箇年間に輸出した棉花の六十七萬一千三百四十三ペール（一ペールは七百三

十ポンド)が、どういふ國へいつたかといふに、最も多く輸出された處は英國で、それから佛國、それから米國、それから獨逸、それから露國、それから埃國、それから瑞西、それから伊國、それから日本で、日本への輸出は、一萬三千七百六十七ペール、即ち總額の約六十分の一となつてゐる。日本と稍匹敵するのが西班牙で、其れより他の國はずつと下つてゐるから、別にとり立てゝいふ程の處もない。

輸入の方はどうかといふに、一九〇九年の輸入價格總計二千二百三十三萬〇四百九十九リツルの内、煙草が八十三萬九千八百八十五リツルで、其の他の雜貨が二千百三十九萬一千三百四十四リツルである。して見ると、約四百萬リツルの輸出超過を示してゐる。

右の輸出入の勘定は、輸入の途中にある貨物の價格、并に再輸出のものは除いてあるが、是を加へたならば、ずつと多くなるは言を待たないのである。埃及蘇丹方面には、日本人支那人などの極東人は、殆どいつてゐないとい

ふも過言でないが、西洋人は多く這入りこんで、主として資本を土地に卸してゐる。工業といつては見るべきものがない。唯上部埃及の砂糖製造ぐらゐのものである。そこで、此等の外國人が占有してゐる地積は、どれ程あるかといふに、一九〇九年の統計によると、六十八萬二千五百六フェダン(一フェダンは約一エーカー)である。土人の所有に係るものは、四百七十六萬四千五百五十フェダンであるが、之を頭數に割つて見ると、土人は一人につき、僅に三フェダン餘に過ぎざるに對して、外國は一人につき、九十九フェダンを有してゐる割合である。

蘇丹に於ても、大に棉花の栽培を獎勵せんとしてゐる。但し埃及政府から蘇丹に向つて、漫りにナイル上流の水を使用しない様に制限してゐるから、土地開拓の上に幾分の影響があるであらうと想像せられる。

五六 歷山大帝の記念港

埃及からの輸作物は、アレキサンドリヤの關門を通るといふことを前にいつたが實に此の港は、埃及に於ける重要な商港であるのみならず、又地中海の一要地である。人口は約三十五萬と稱せられ、その内歐洲人は、ほゞ七分の一を占めてゐる。

此の港が、アレキサンダー大帝によつて創設せられたることは、いふ迄もない。是は今より約二千二百五十年前に當つてゐるが、頃は歴山大帝全盛の時代、埃及征服の餘威を以て、埃及の富を希臘に汲收し、大帝國の繁盛を宇内に誇らんが爲に、建設したのであつた。又實際に於て、當年第一流の商港、且は希臘文明の中心とまでなつたのである。羅馬の時になつては、シザイも行き、アントニーも行き、何れもクレオパトラ手中のものとなつた話は、史上に有名なことである。港の東の方に、ポムペイの石柱が今日にまで兀立して、羅馬人の名残を留めてゐる。

又トレミー一世(323—304 B.C.)は、博物館を建てて、學術の淵藪としたので

あるが、最早其の遺址は存してゐない。しかし今日と雖も、博物館は二つある。大なる方の博物館は、たとひカイロ博物館の壯觀に比すべからずとするも、木乃伊、其の他埃及の古物が多く集めてある上に、希臘及び羅馬時代の物が、なか／＼掘り出されてゐる。例のアントニーの像なども立つてゐる。有名なロゼッタ石の模型なども興味を起さしめる。木乃伊の多くある室の横に、一輪挿の花瓶の様な、誠に形のよい細長いものが、幾つとなしに列べてある。是は死人に對する泣きの涙を入れるもので、貴い人ほど之を多く墓に埋めたものである。

さて又小さい方の博物館は、よく人が見落すのであるが、是は、ポンペイの石柱の北の方の町は、づれにあつて、博物館とは稱してゐるもの、其實は墓である。門を這入ると、大きい井戸があつて、其の井戸の周圍を、ぐるりと螺旋形に傳つて下りる様になつてある。道極まる處、電燈がつくと、是はと驚かれる。横の方に大きい地下室がある。室盡きる處、又電燈がつく。する

と又横に地下室がある。かくの如きこと、殆ど幾回なるを知らない。總じて之をいはゞ、地下に大なる蜂の巢を作つた如きものである。そして其の室内の内に、石のかこひがしてあるのは、大なる石柩を藏めた處で、其他、恰も我が風呂屋の着物を入れる處の如き形ちの棚穴が、幾つとなく列んでゐるのは、全く一つ一つに死骸を藏めた穴である。石柱の彫刻や、折々見ゆる壁畫の模様は、埃及一流の特徴を現はしてゐる。

後篇 西 洋

一 發掘せられたるポムペイ市

西曆紀元前のポムペイ市は、南伊太利に於ける繁華な都會で、人口も二三萬あつたのであるが、紀元後六十三年の地震に引きつゞき、同七十九年のヴェスヴィアス山の噴火の爲に、十フィートから十五フィートまでも、灰の中に埋まり、更に其の後にも噴火があつて、遂に二十フィートの地の下に葬むられてしまつたのである。十八世紀の中頃、圖らずも發見せられるに至つたが、いよゝ正式に發掘を始めたのが、一八六〇年からである。

門を入ると、町に昇つてゆく道があつて、石を敷きつめた人道と車道となつてゐる。其の右側に小博物館があつて、灰の中から掘り出した人體や、諸種の器具などが陳列してある。尤も人體は、全く朽ち果て、其の形だけ

が穴になつてゐたので、そこへ漆喰を流し込んで固めたものである。進んで舊市街に入ると、兩側に店が並んでゐるが、何れも餘り大きいものでない。尤も屋根は皆壊れて、破壁だけが残つてゐるのである。町幅も至て狭く、左右の人道一段高くなつてゐるを除いて、中通りの道は、二間道路が多い。其の最も広いところで三間。横町にはいと、一間道路もある。店の中にも、入口に石を築いて、其の上に幾つもの穴をあけてある店がある。是れは酒屋であつたので、此の穴に壺を入れて、各種の酒が貯へてあつたのである。

町の四極には門があつて、門から門への通りが大通りであつたのだが、是とて廣くないことは、前いふが如くて、そして町の處々に飛石が置いてあつて、左右兩側の軒から、互に飛び通ふことの出来る様にしてある。町には盡く石を敷きつめてあるが、其の石が、車の輪に擦りへらされて、深く凹んでゐるのを見ても、繁花の處はよく知られる。富豪の家は、なか／＼室の数が多く、食堂、應接所、家族の室等、皆整つてゐるのみならず、中庭には花壇を有し、壁

畫彫刻などは、観るべきものがあつたので、其の標本となるものは、ネーブルスの博物館に陳列してある。家の規模は、たいした大きいものではない。

町の中に、寺院、裁判所、市場、共同浴場、劇場などがあつて、町の東南の田間に、アライセア圓形の劇場の跡が發掘せられてある。此のあたりの麥畑も、ちい／＼發掘し了つたならば、此の劇場と町とは連続するであらう。

寺院は、入口が數層の石段になつてゐるのもあり、又廣庭から石段を昇つて禮拜所へつゞく様になつてゐるものもある。目にとまつたのは、青銅の神像の後ろの穴である。此穴から僧侶が聲を含ませて、神託を宣べたのであると聞いて見れば、幽靈の正體見たり、枯尾花の感がある。裁判所は取り立て、いふ程のこともないが、中央が屋根のない廣庭で、正面に裁判官の席が、一段高くなつてある。市場は、大小二つまで残つてゐるが、大なる方は可なり大きく、矢張中央は屋根のない廣庭で、其の周圍に市を張つたものである。そして此の中へは、車を入れることを禁じてあつたものと見えて、入口

に方石が幾つも列べてある。共同浴場は、男の湯と女の湯と、別々になつてゐるのみならず、冷浴と温浴と、各々別になつてゐる。其の中で、最も我々に面白いのは、女の温浴の湯桶の構造が、全く日本の錢湯の湯桶と等しいことである。尤もポムペイのは、木でなくして、盡く石である。又男湯の着物をぬぐ處も、よく日本のものに似てゐる。劇場も、大小二つ残つてゐて、圓形の棧敷のあとも、そっくりしてゐるが、屋根は無く、テントを張つたのである。大なる方は五千人、小なる方は一千五百人の観客を入れるだけの席が設けてある。併し規模の大きさからいふと、アマフィセアターを第一に推さざるを得ない。是れは丸い形に造られてゐるのであるが、其の外側の壁面には、石を囲めて、店を陳列せしむるやうにしてゐる。内側は、大きな楕圓形になつてゐて、其中央が興行場で、周囲の石段が棧敷である。花道はあるが、屋根は矢張ない。棧敷の前に、溝の如き處があるかと思ふと、段々石階をつたつて、地下に降りて行く様になつてゐる。此の地下窟には、猛獸を入れておくの

であつた。

以上は發掘せられたるポムペイ市の情況の大略であるが、たいした大きいものでなかつたことは、町の周囲の城壁の位置を見てもわかる。併しながら、壁畫其の他の事物に現はれてゐる風俗によつて、當時の市民は、已に腐敗して居つたことが知り得られる。國の亡ぶるは亡ぶる原因がなくして、亡ぶるものはない。羅馬を滅すものは、全く羅馬自身であつたのである。

二 伊太利の博物館

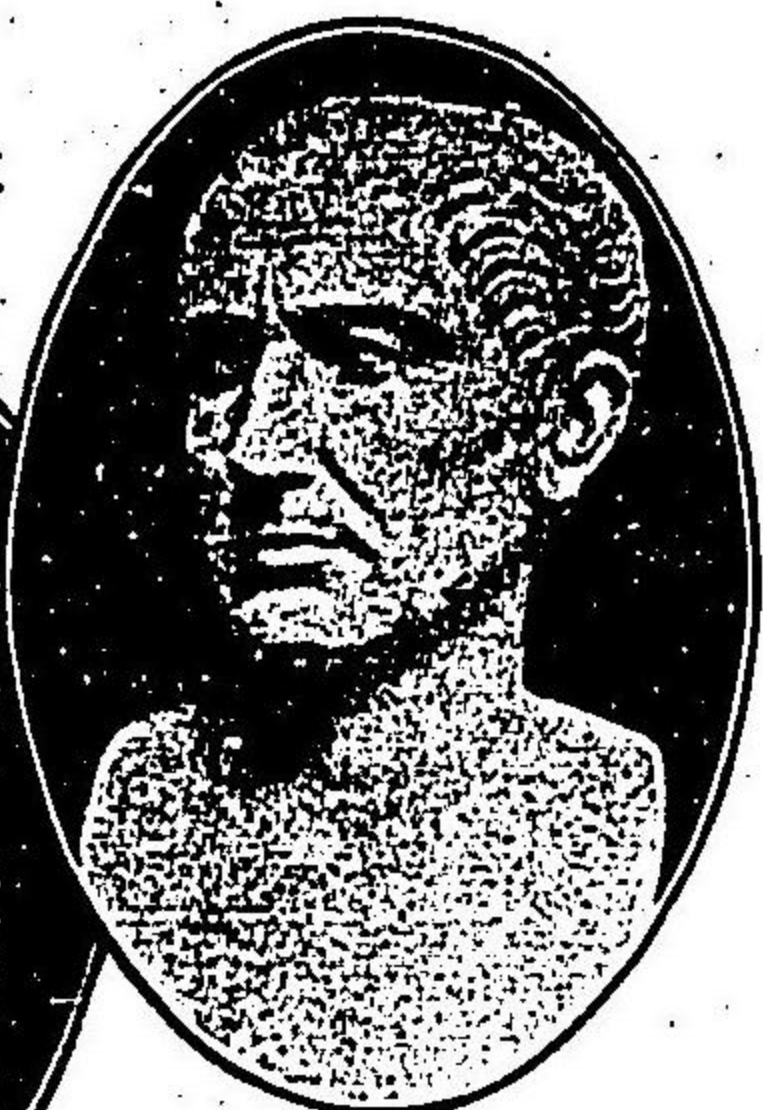
伊太利の博物館といつても色々であるが、茲にはネーブルスの博物館と、羅馬のカピトル博物館と、ヴァチカン博物館とについて、大體の感觸をお話して見ようと思ふのである。

是等の博物館に陳列せられたる彫刻物であれ、繪畫であれ、人物を現はさざるものは稀である。淡墨の花鳥や米點の山水などに至つては、殆ど見る

ことを得ない(二二を除くの外)。是れ大に東洋と趣味を異にする所以である。そして其の人物が衣裳をつけてゐるものにあつては、衣裳の皺から、其れが身體につき纏つてゐる有様が、いかにも實物を見るがごとく、否、實物よりもよく出来てゐるかと思はるゝ位で、驚くべき技巧を示してゐる。併し作者の技倆を顯はさんとするには、肉體を取扱ふのがよいものと見えて、多くは肉體を現はしたものである。そこで其の肉體が、諸種の方面より研究し盡されて、柔軟なる婦人の肉、硬剛なる男兒の骨、千狀萬態、自在を極めてゐる。斯くの如く、昔より人體の研究には、歴史と苦心とを重ねてゐるから、我邦の美術家が、一朝一夕に其の右に出てんとしても、とても及ぶものではない。併しながら、男女の肉體を、思ふ存分に顯はすことに附隨して、茲に起るものは危険なる肉感である。そこで、西洋の繪畫彫刻は、一種しつこい感覺を我々東洋人に與へるが、濫い清楚な味は、頓と與へられない。是れ亦東洋と大に趣味を異にせる點である。しつこい方面に於ては、我々は當分

とても西洋に及ばない。併し清楚な方面に於ては、確に西洋に凌駕してゐる所はある。是れ幾千年の國民性が自然に然らしめたもので、此の長所は、

スルブ1ネ)



(1) ザ1シ)

(の 内 館 物 博



(1) マ1ホ)

羽繪の如きものを出品することも、流行して來たが、矢張西洋は、西洋の長所を發揮する方が優つてゐる。

伊太利はさすがに美術の國だけあつて、博物館に陳列せられたる古來の名畫や彫刻を見ると、最早此の上に出づることはむづかしい氣がする。しつこいが併し重々しい。吹けば飛びさうなものは、一品として無い。特にラフェールのツランズ、フィギエレ、シヨンや、マドンナ、デ・ラ・チリグノイ、乃至はレニーのオーロラの如き名代ものになると、見れば見るほど變化と餘韻とがあつて、そして落ち着きがよい。彫刻でも、ラオコーンはいふまでもないが、カピトル博物館内の死せんとする角闘士や、セント・ピーター寺内のミケルアンゼローのピエタなどに至つては、天晴萬人の嘆賞に値するものたるに恥ぢない。併しながら、是等も盡く肉體を借り來つて、理想をあらはしたものである。肉體を離れては、西洋人の手で物が言へないと見える。東洋の美術家は、更に肉體を離れて、物を言つて見る工夫をしてはどうであらうか。又よしや肉體を用ひるにしても、顔貌の表情もあり、姿勢の變化もあるのだから、必しも西洋の裸體をのみ學ぶにも及ぶまい。裸體は物

が言ひ易いてあらうが、どうも高尚でないことは、吾人の感ずる所である。

三 羅馬の名所

凡そ世界の都市の中で、羅馬ほど名所に富んでゐる所はない。ちよいと横町を通つて見ても、古い趣味のある泉から水が吹き出てゐる。小さな古刹、舊門まで限なく書き列べるならば、優に一冊の書籍になるのである。

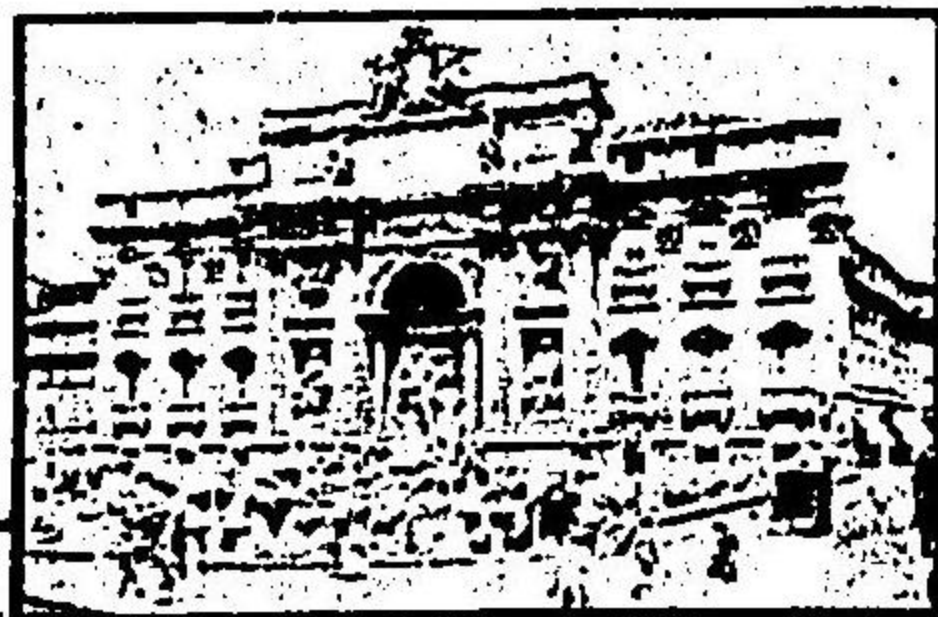
そこで茲には、(一)コロシナム、(二)フチーラム、(三)

ヴァチカン、(四)パンセオン、(五)セント・ピーター寺、(六)バラチ

ン山上の宮址、(七)舊アピヤ街道ぐらゐに止めておいて、タ

イバー河の古橋や、アンゼロ城、乃至は、ガリバルヂの記念

碑などをも、省略しようと思ふ。

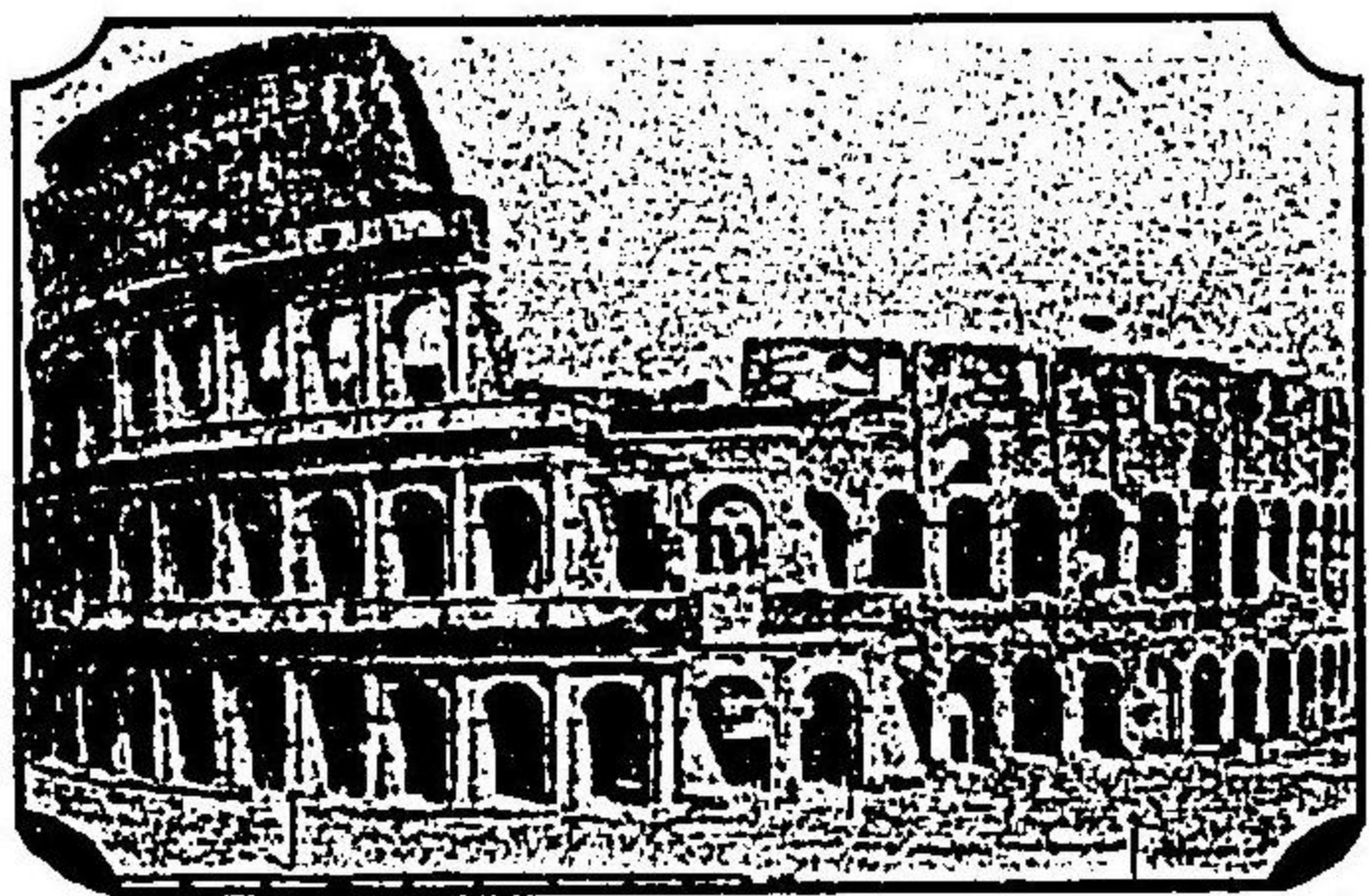


(泉のピレツ)



(城ロゼンア)

(一)コロシウムは、昔に聞こえたる羅馬の大劇場で、西暦紀元八十年に、タイタス帝の完成したものである。其の形は、ポンペイのアンフィセアターを



(部外、ムアシロコ)

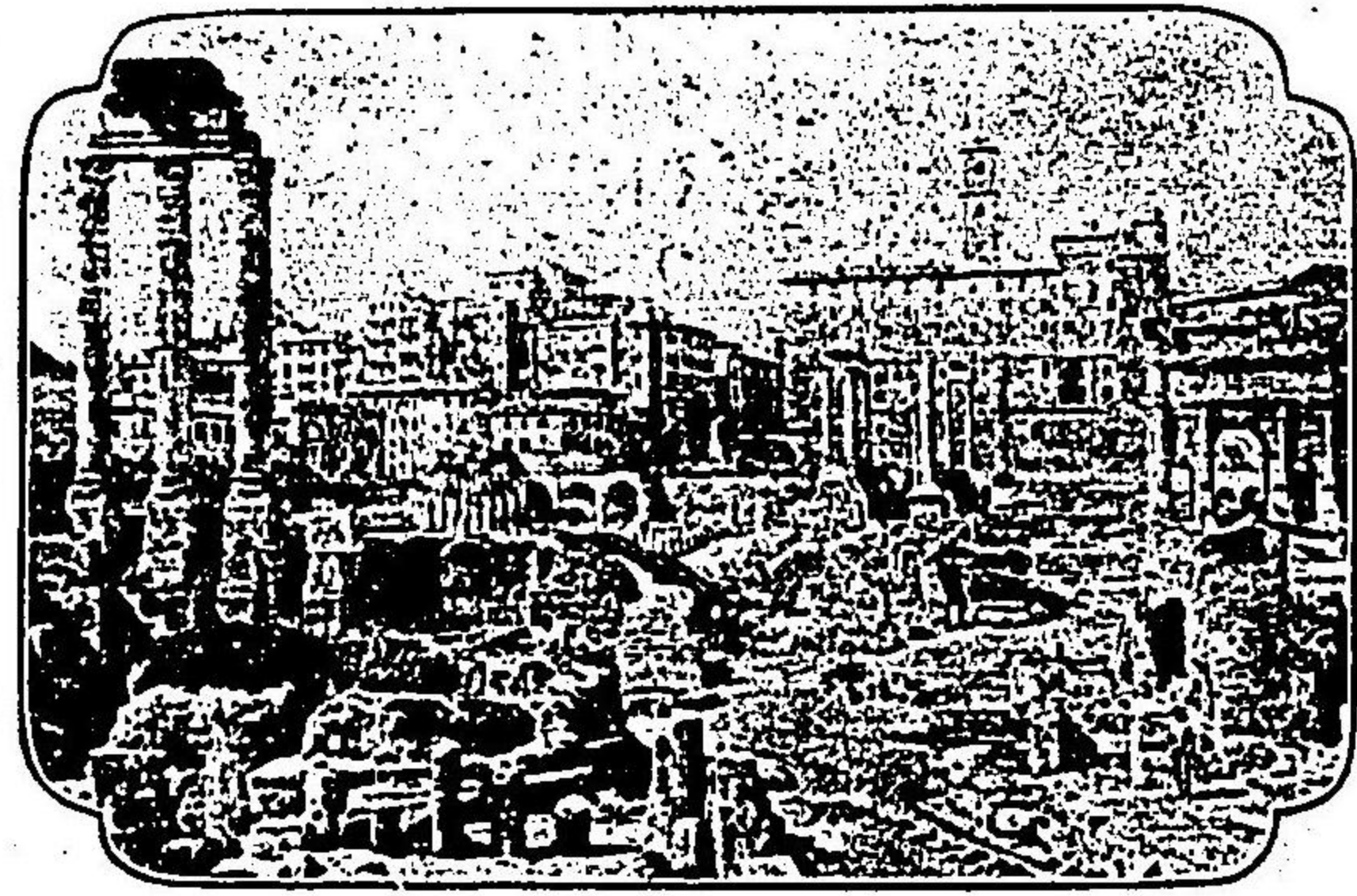
大きくした様なものである。丸い建物の周囲は、ざつと我五町ほどで、高さは約我二十六間ある。よく保存せられてゐる部分を見ると、四層より成つてゐて、三層には廊下があり、最上層には窓がある。入口は四方にあつたので、其の中の一つは、帝王の爲に保留されたのである。棧敷には、四五萬の観客を容るゝ席があり、其の正面のは、帝王及び貴族等の爲に設けたものである。かゝる大なる建物で、且萬人の群集する場所であるから、屋根がない。そこで周囲の観客の頭の上は、天幕を張つたのである。内部の土中を發掘するに従つて、多くの地下室があることがわかつた。そして其の内

には、猛獸を入れておく所もあつたのである。

この大劇場の中では、人と猛獸との角闘を行はせたもので、其の人は(イ)俘虜を主とし、(ロ)自ら進んで角闘を試みんとする者(ハ)及び角闘を職業としてゐる者などであつた。憐れなる俘虜は、無論殺されむが爲に場内に現はれるのである。自ら進んで角闘を試みんとする者は、何れ腕に覺えのある剛の者に相違ないが、其の中にも、王族のコンモードルといふ人は有名なもので、多くの猛獸を殺したといふことである。角闘を職業としてゐる者に至つては、随分命掛けの商賣であるが、何れにしても、殺風景な興行といはなければならぬ。併しそれによつて、當時の羅馬の活氣を推知するに足るのである。今日最早こんな殺風景な興行のなくなつたのは、喜ぶべきであるが、さりとて又、其の反對に、あたら有望な青年男女を腐敗せしむるやうな芝居は、考へてもらひたい。

(二)ブチーラムは、バラチン丘とエスクキリン丘との中間にあつて、羅馬上

古の市場である。餘り廣い場所ではないけれども、多くの人が集る中心點

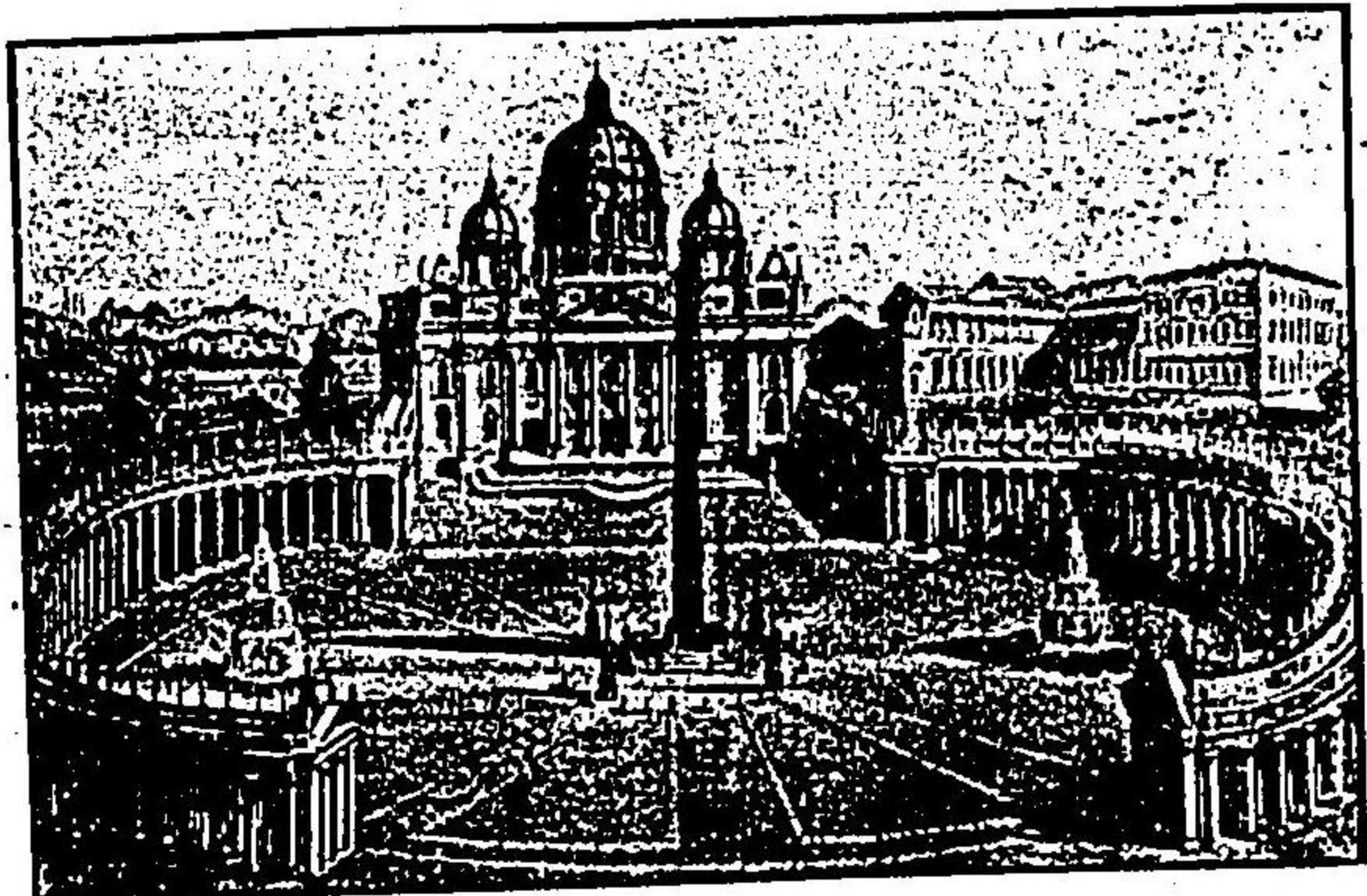


(ムライチラフ)

角シーザイの死骸は、此のフチーラムの中央の小山へ葬つたといふこと

であるから、其の一方に公會所及び裁判所も出來、それから段々後になると、此のフチーラムは、専ら人民の集會所となつても、この市場ではなくなつてしまつた。そして、又隨分立派な建物も建てられた。シーザイは最初に之に手を入れた人であるが、そのシーザイが刺されて、死骸がこゝに持ち來たされた時、有名なアントニーの演説が、あの小高い所で行はれたのであるなど、聞いて見ると、誰も皆等しく、セーキスベヤイを低誦して、其の演説の文句や言ひ廻しが口へ出てくる。兎に

ある。



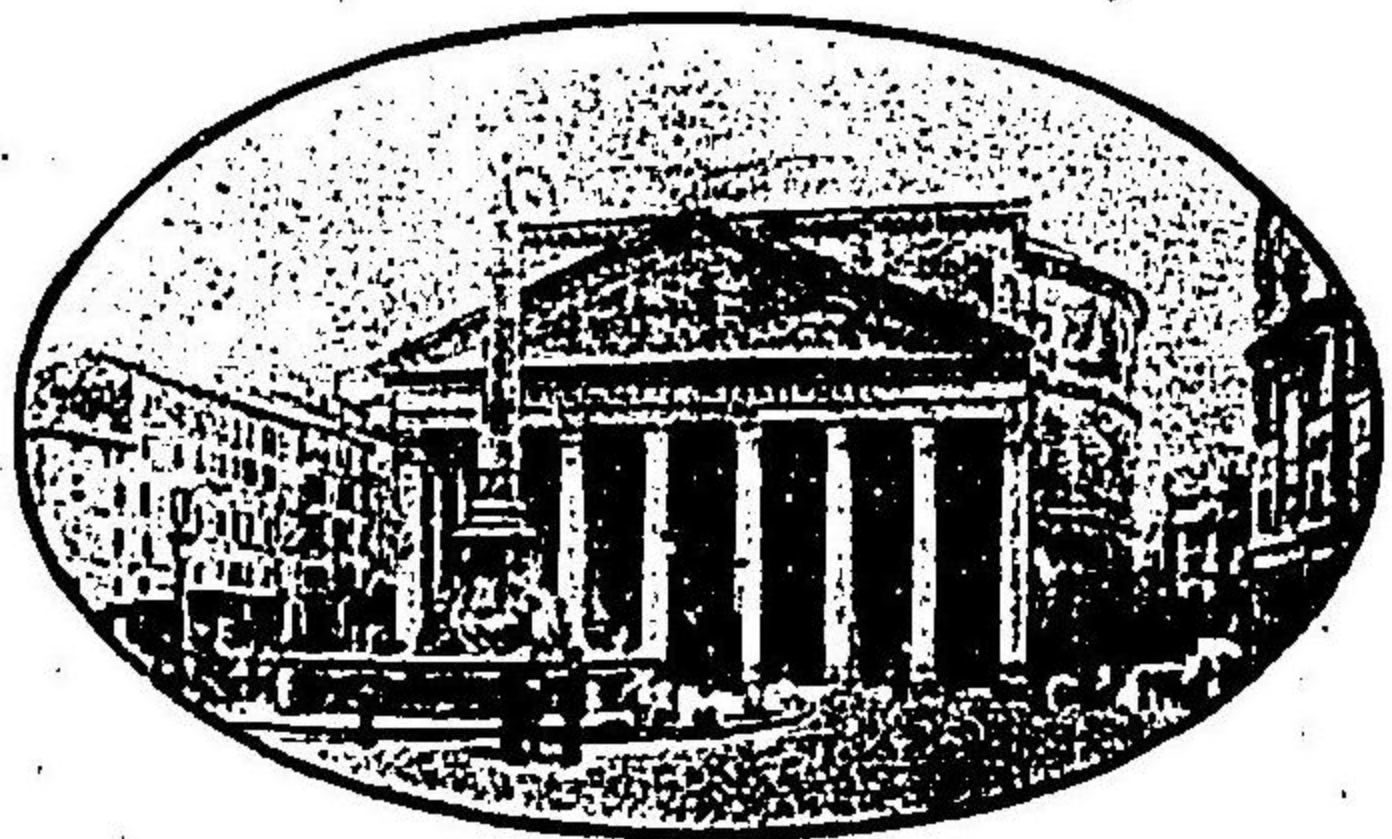
(宮ンカチアウ)

此の世界の首都の中心點が、一朝羅馬榮華の夢破れて、空しく荒廢に屬し、はては石切場となり了つたのみならず、土や砂がかぶさり、
くして、四十尺の地中に埋まつたとは、歲月の戯れも實に驚くべきものである。一八七〇年より發掘に着手し、今日では、散亂した礎の間から、ヴェスバシヤ寺の三柱や、サターンの寺の八柱などが兀立してゐるのも、又一種の古趣がある。

(三) ヴァチカンは、法王の宮殿だけあつて、入口からして已にたいしたもの、當代の帝王をして、盡く脚下に跪かした昔を追想せしめる。殿内の名畫や彫刻は、

燦然として目を奪ふばかりであるが、之に關する感觸は、矢張前に一言した如くである。

(四)バンセオンは、羅馬の古建築中、そっくり保存せられてをる唯一のものであるが、最初には、唯門の處だけ出來たのを、ハドリアン帝に至つて、中央のドームを建てた。此のドームは、高さも直徑も同一で、共に百四十二尺であるが、頂上の圓い穴には、屋根がない。圓形の大廣間の隅々には、七つの神像が立つてゐる。そして、ヴィクトル・エマニエール二世の墓と、先王ウンベルト一世の墓とは、兩側に相對してゐる。墓といへば、土の上へ卒都婆でも立てゝあるのかと思ふかも知れないが、さうでなくして、寺院の床の下に遺骸を納めて、之を大理石で蔽ひ、其の上に手向けをする處が、壁にくっ附けて設けてあるの、我



(ン オ セ ン パ)

邦の墓とは全く様子が違つてゐる。余のこゝにいつた日は、獨逸の皇太子殿下が、漫遊の途上に立寄られたあとで、殿下よりの手向けの花が、まだ其の前に置いてあつた。殿下の用意は亦感ずべきものである。

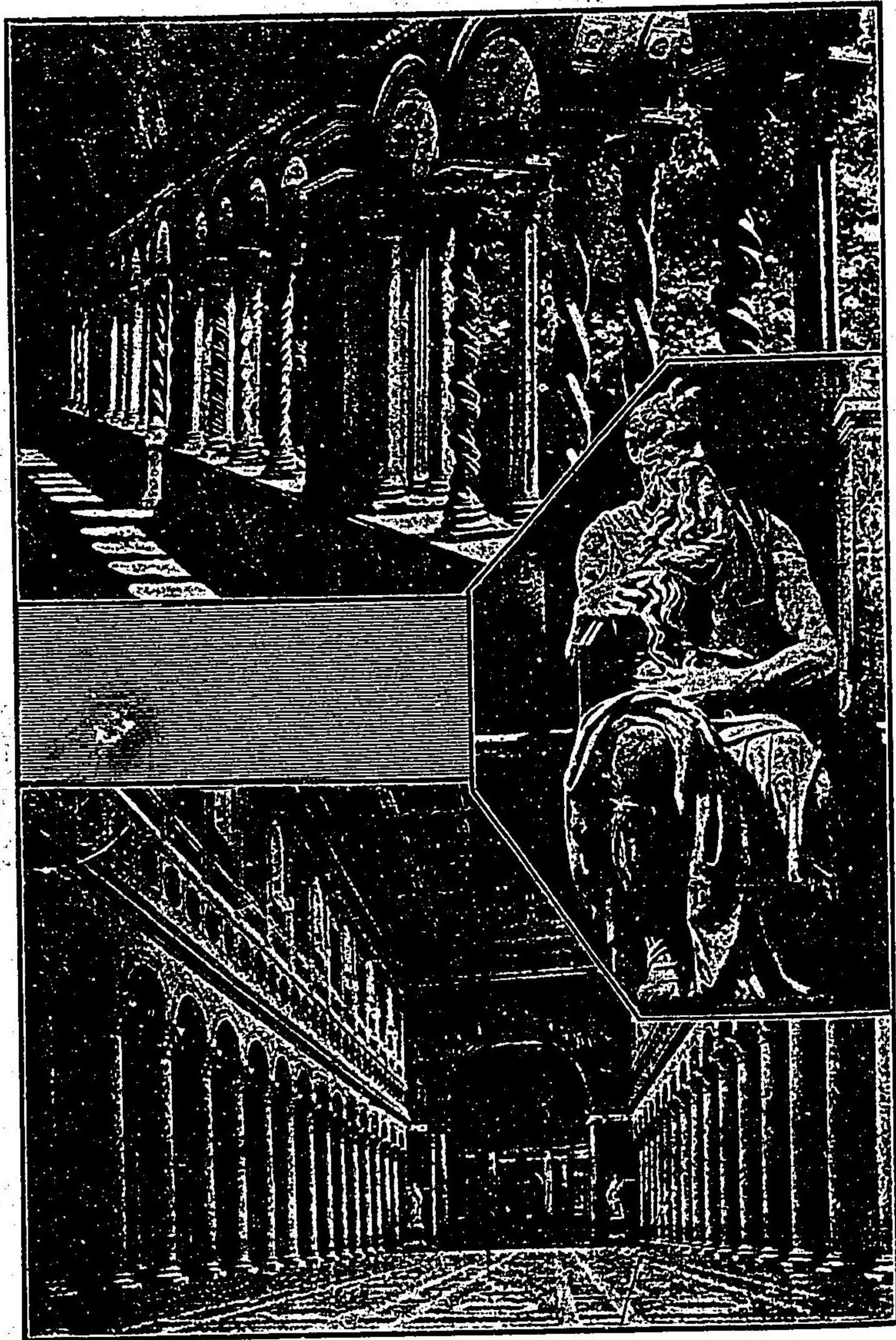


(寺 ル イ オ キ マ ヤ リ マ)

(五)主たる寺院としては、セント・ポールや、セント・ジョンや、セント・マリア・マギオールなど、何れも眼を驚かすのであるけれども、セント・ピーター寺ほど盛なものはない。此の寺は、コンスタンチン帝の建立したもので、大廣間の廣く且高く、裝飾の行届いて、ドームの美麗なる等、實に形容の辭もない位である。それもその筈で、此の寺の修繕増築の爲には、ラファエールやミケルアンゼロが、一代の工夫を凝らした所があるのである。ラファエールは早死したから、たいした事はしなかつたが、ミケルア

ンゼロは中々手を入れてゐる。即ち玄關特にドームは彼の意匠に成つたものである。正面にセント・ピーターの墓所があるが、此の邊に行くとも目も眩せむばかりに思はれる。廣間の左右に多くのチャペルがあるが、何れも唯立派といふ言葉の外はない。シャルマン帝の大威權を以てすら、法王レオ三世から帝冠を授かつたのは、即ち此の寺の内なので、其の後の帝王も此の寺で戴冠式を行つたことの鮮からぬを思へば、眞に此の寺の名譽ある歴史と當代に於ける法王の大勢力とを追懷するに足るのである。

(六)パラチン山といふと、高いやうに思はれるけれども、さうでない。有名なる羅馬の七丘皆然りて、早い話が東京の上野山王臺や、芝の愛宕山といった様なものである。此のパラチン山の上には、歴代帝王の宮殿があつたのであるが、今は皆廢頽して礎のみを存してゐる。併し昔の盛況は、食堂の跡を見ても偲ぶことが出来る。食堂の隣室に、泉水の設があるが、此れは水が吹き出てゐたのではなくして、中央の築き山に香木を植ゑ、其周圍に香水を

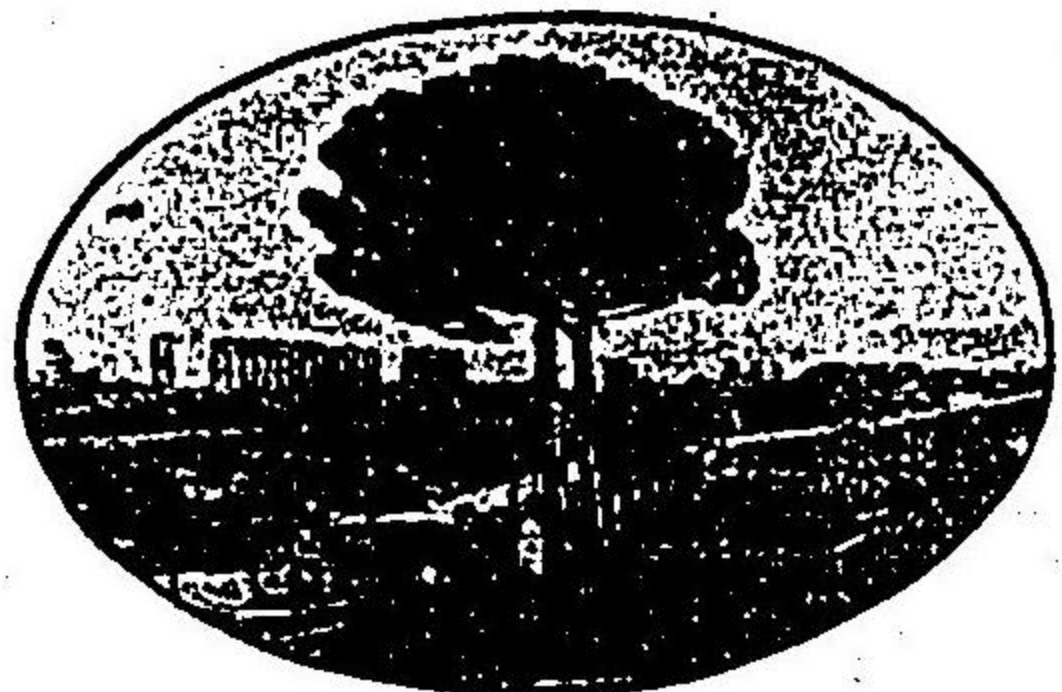


廊内寺—ターヒトンセ(下) ロゼンアルケミ(中) 廊廻寺ルーボトンセ(上)

漂はせて、食事が始まる頃になると、窓をあげ放つて、食堂に馥郁たる美香を送つたのであるといふ。此の邊の土をかき別けると、もとの床が顯はれて来るが、是亦すばらしいモゼイクであつたことがわかる。あゝ、奢る平家は、久しく續かなかつたのである。

(七) 舊アピヤ街道は、バラチン山の西麓から南方に通じ、ネーブルスを経てプリンデシまで續いてゐた道で、今はあれはてゝ、雨の降る時は、東京郊外の街道を通るが如く、馬車の輪が土に食ひ込むのであるが、昔はまさか、かうてなかつたらうと思ふ。羅馬への入り口には門がある。道の兩側には、有名な人の墓が随分あつたので、今でも一二は残つてゐる。羅馬から此の街道への出はづれの西側に、大建築の壞れたものが聳えてゐるが、是はカラカラ帝が、西暦紀元二百十二年に作り始めて、アレキサンダー・セヴェラスが、同二百二十三年に完成したといふ公共浴場である。浴場の内には、一千六百の大理石の腰掛があつたといふから、腰をかけないで浴する客を合すれば、隨

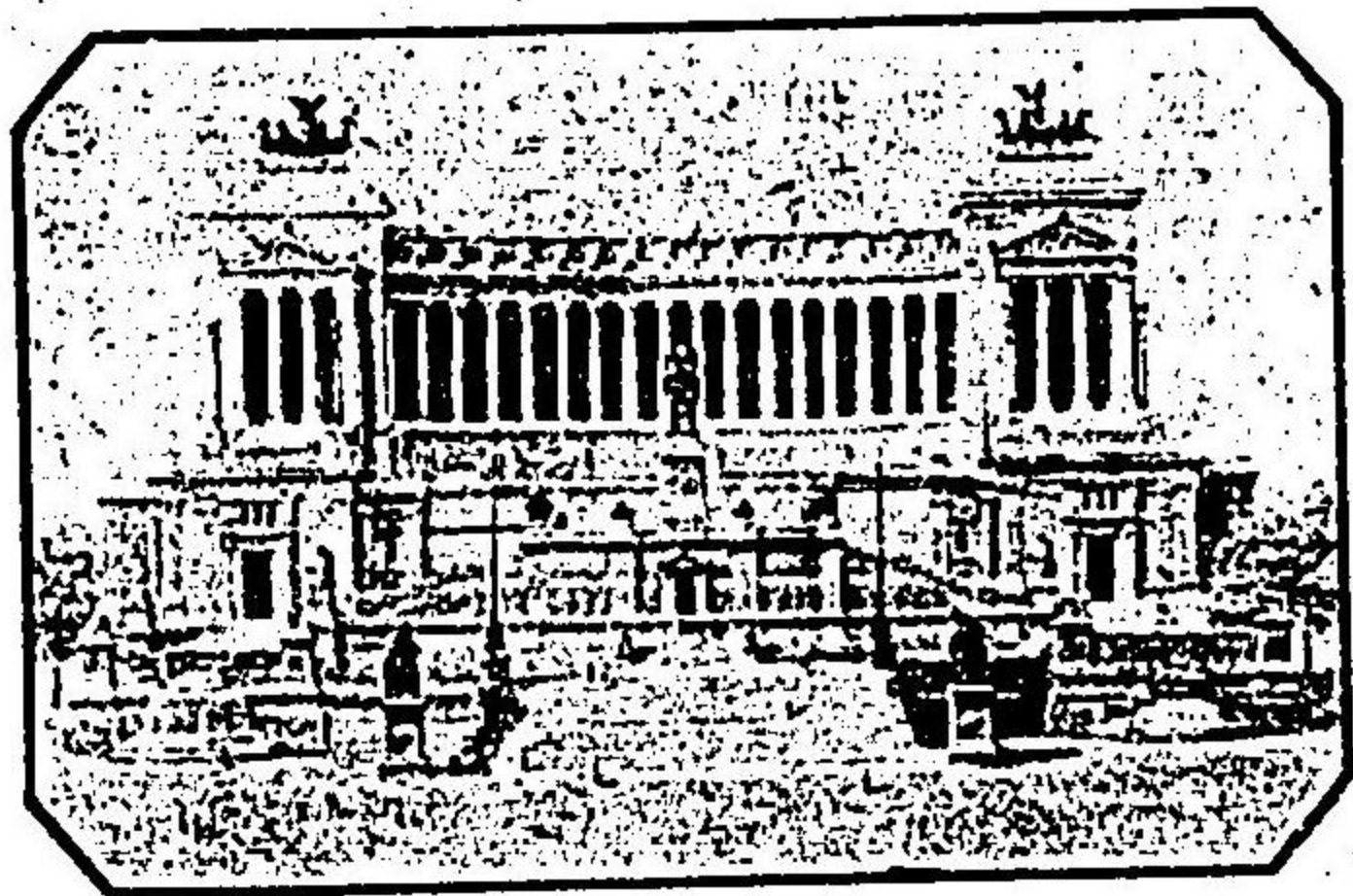
分多數の人を浴せしむるに足る設備である。ペデカ「によると、帝政時代の羅馬の沐浴法は、中々行きとゞいたものである。浴客は、先づ微温室に入つて體をこする。それから熱室に入り、或は熱したる空氣を通ぜる發汗浴をすることも出来れば、或は湯の中へつかれることも出来る。それから冷浴で以て元氣を恢復する。そして又體をこすつて身仕舞をするのであつたといふ。恰も今日の土耳其湯の如くである。かゝる贅澤な沐浴であるから、浴場に運動場も附設してあれば、庭園はいふに及ばず、圖書室もあつたので、又かのコロシウムの大劇場は、アビヤ街道を隔て、すぐ向ふに見えてゐる。



(趾遺の道水古と道街アビヤ)

街道を段々南に進んで行くと、又西側に小高い原があつて、今は作物を栽培してゐる所があるが、何ぞ圖らむ、其の地下には、廣大なる地下室が蜂の集の如く無數に列なつてゐる。入口は誠に小さいが、中に這入つて見ると、前

後左右にぐるりと廻はつて、殆ど盡くる所はない。中は無論眞の闇であるから、蠟燭を點して、僧侶に導かれて行くのである。是は、かのアレキサンドリヤの地下の墓處と同一のもので、全く昔の墓場である。細い道の兩側には、恰も繭棚を見るが如くに、土を穿つて棚を作つてあるが、茲に死骸を



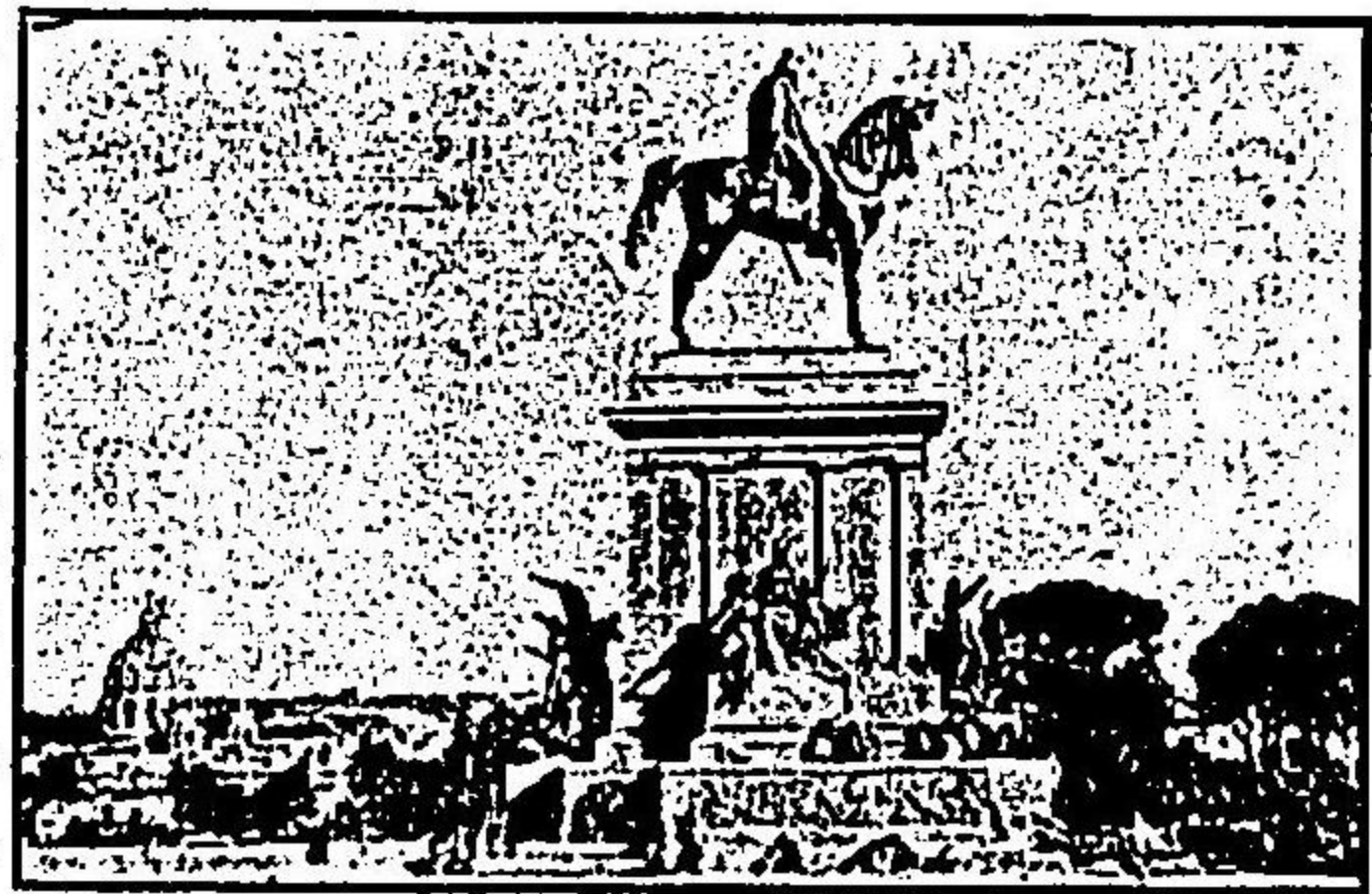
(碑念紀ルエヌニマエルトクキヴ)

葬つたのである。そこで西曆紀元第三世紀の初から、第四世紀の初にかけては、法王さへも随分ここに葬られたのである。今日まで發掘せられた此の墓の面積は、十八キロメートルであるといふから、ざつと四里半とは廣いものでないか。右は羅馬の史蹟のほんの一端に過ぎないが、鎌倉に入つて頼朝時代の人の香ひがするやうに、羅馬の史蹟を巡つてゐると、いつしか身は昔時の羅馬に佇んでゐるかのやうな氣になる。當年の世

界の首都今は昔の夢と消えて、ヴィクトル・エマニ
ユエル二世の記念碑や、ガリバルディの銅像を以て、
國の誇りとするに至つた。「かし家と唐様で書く
三代目。榮枯盛衰の原因結果は國民の最も研究
して、忽にすべからざる所である。

四 里昂の商業會議所

里昂は染織工業の地である。町の中を横流す
るローンの清流なる水に晒した染物には、何處の
ものでも肩を比べることが出来ないとい稱せられ
てゐる。かゝる染物を以て鳴る地だけあつて、染物に關しては、土地の人は
餘程研究してゐる。商業會議所の陳列所にいつて見ると、古代模様の標本
が、何れの國の物たるを問はず、頗るよく蒐集してある。佛國自らの物は、無



(紀念紀チルパリガ)

論遺憾なく陳列してあるから、例へばナポレオン時代には、嗜好がだうであ
つたなどのことまでがよくわかる。それから埃及や土耳其はいふも更な
り、支那日本の物まで、ちやんと整へてある。聞けば一片の襪襪に對しても、
殆ど價を問はずして集めたものであるといふが、土地柄誠に然かあるべき
ことである。斯の如くして、東西古今の粹を取つて、之に新工夫を加へるの
であるから、よいものが出来る筈である。

此の陳列所と相對して、同じ建物の内に、商事裁判所をも設けてある。加
之、殖民教育をも此の商業會議所で行つてゐる。しかもそれが、近頃始まつ
たのではなくして、余のいつた時(明治四十四年)には、最早十二箇年目になつ
てゐたのである。又こゝに殖民地博物館があるが、是は會議所の、最上階の
一室で、別にたいしたものでもないが、主として佛國殖民地に於ける産物の
標本が、なか／＼よく集めてあるのみならず、諸種の地圖もあつて、殊に支那
の雲南廣東方面の踏査圖もあつた。

殖民學校の講師として、支那語及極東の風俗習慣を講じつゝあるクラ
ン氏は、日本や朝鮮にもゐたことがあつて、其の著朝鮮書籍解題は、學界に名
のあるものである。余の里昂にいつた時は、木島副領事の斡旋によつて、此
の人に面會した。氏は引籠中であつたに係はらず、大に喜んで、余輩を書齋
に延いて、其の藏する所の書を示してくれた。朝鮮の書籍は十部ばかり見
えたから、かの書籍解題を著した時の事及び其の書籍は今何處へいつたら
見得るであらうかなどの事を尋ねたが、答は餘り謙遜的であつた。即ち「解
題を書いた時は、當時の駐韓佛國公使の藏書や、其の他諸方を尋ねまはつて
書いたに過ぎないので、一々著者の手を經た書籍のみではなく、孫引きも澤
山ある。又其の後、かゝる書籍の行くへは、どうなつたか、消息を詳にせぬ」と
いふことであつた。氏は又言葉をつゞけて、佛國に居ては、極東の事を調べ
る便りが頗る悪い。極東の調査は、貴國が最もよき位置にあるといつてゐ
たが、眞に然りである。我々は、大に努力して、此の方面の研究の魁をするの

覺悟を要する。

五 宗教勢力の程度

伊太利や佛蘭西を通過して感ずることの一つは、耶蘇教の勢力が次第に
衰へつゝあることである。或地方に行くと、寺は婚禮と葬式との外に、餘
り用をなしてゐないといふところも無いではない。巴里邊では、耶蘇教に
よつて安心立命を得んとするの誤たることを、公然演説する者すら現はれ
て來た。又佛國では、教育と宗教とを分離することについての騒ぎが起つ
たことは、人の知る所である。從來はいふまでもなく、學校に於て耶蘇教を
説いて來たので、僧侶は乃ち教育に關係してゐたのである。然るに最近に
なつて、教育は全く宗教より獨立せなければならぬといふ主義が、政府の執
る所の方針となつた。そこで聞く所によると、佛國政府は、僧侶を教育界か
ら放つて、寺院の勢力を仰へようとした。そこで從來寺院の有してゐた財

産は名こそ善男善女の喜捨といへ、其の實は寺院からの強制に出たもので、是れ所有の効力のないものである。所有の効力のないものは、當然政府の収入となるべきものである。かういふ様な理窟で、寺院の財産をも没收しようとしたが、寺院でも容易に之に従はない。遂に血を見るに至つた所もあるといふことである。又たとひ血を見ないにしても、僧侶は之を動産に代へて、外國に持ち出したものも鮮くないといふ噂がある。かゝる有様で、余の佛國にいつた時は、内閣が動搖してゐたが、何れにしても、耶蘇教の勢が、昔日の如く盛でないことを證明してゐる。

さて耶蘇教とても、何れの宗教にも伴つた弊害のあるとは、免れない所である。總て宗教は、自己に安心を與ふべき力となるものであるけれども、精神が形式に負けて來ると、立ろに弊害を生ずる。耶蘇教も、だいぶん形骸となつて來た傾がある。併しながら、歐羅巴人が、從來此の耶蘇教によつて、どれ丈け救はれて來たかといへば、殆どいひ盡せぬ程である。此の博愛の教

によつて、社會の秩序を維持し、信義の念を厚うし、公利公益を起したことは、幾何であらうか。今耶蘇教が衰へることとなつたならば、歐洲の徳義の維持は、困難となりはすまいか。併しさうなつて來れば、又茲に精神上の革命が起るであらう。現に今日は、歐洲の人も、耶蘇教の形骸から脱して、進歩せる世界教の起るを待つてゐる者が、鮮くないのである。

六 佛蘭西に於ける東洋研究

佛蘭西人のうちには、なか／＼東洋の研究に熱心な學者がある。クーラ
ン氏が、リオンの殖民學校で、支那語を教へ、東洋の民俗に關する講義をしてゐることは、前にいつた通りであるが、凡そ佛人中、身親しく朝鮮にあつて、深く朝鮮の事を研究した人といへば、獨り氏を推すの外はないであらう。併し朝鮮の研究は、あながち氏の獨占でなくして、巴里のコレージュ・フランシスのシャヴァンヌ氏の如きも、支那學の蘊蓄を傾けて、朝鮮の研究にまで手を

延ばしてゐる。尤もリオンは、東洋研究の便宜に乏しいが、巴里には國民圖書館ナショナルもあつて、こゝには朝鮮の書籍も六十一部あるぐらゐであるから、この朝鮮の書籍は、前の京城駐劄佛國公使コラン・ヅプランシー氏の寄贈したものであるが、東洋研究の便宜からいつても、巴里の方がよい。

余の巴里滞在の頃、ソルボン大學に於て開かれつゝあつた東洋學關係の講義は、(一)ツェボア氏の殖民地地理、特に佛領印度支那、(二)グレボル氏の東洋人の古代の歴史、特に埃及人種の亞細亞的起原、(三)オーマン氏の露國の言語及び文學、(四)ルヴォン氏の東洋人の文明の歴史、特に日本の近代史であつた。ルヴォン氏は、此の外に日本の純文學に關する講義をも開いてゐるが、聽講者は、日本近代史の方に多い。又コレージュ・フランクスに於ける東洋關係の講義は、(一)シャヴァンヌ氏の支那鞑靼、滿洲の言語及び文學、特に前漢書の講義、(二)カサノヴァ氏の亞刺比亞の言語及び文學、(三)レヴィ氏の梵語及び梵文學、(四)フィノー氏の佛領印度支那の歴史及び語學等であつた。

それから政治大學エコール・セヤンス、ポリテクニクに於ける東洋關係の講義は、(一)サンティムール氏の日清戰爭後の極東事情、(二)セイレイ氏の比較殖民學及び各國の殖民政策、(三)シルヴェストル氏の東方亞細亞の政治經濟問題、(四)ベレ氏の亞弗利加及び極東に於ける佛領の地理等であつた。猶此の學校では、來學年から、東洋に關する講義を増加する計畫だといつてゐた。その外殖民學校でも、勿論東洋の事を説いてゐるが、殖民學校の話は、更に他日を期することゝしよう。

若し夫れ巴里の東洋語學校に至つては、一七九五年の創立以來、孳々として東洋語の教授をなし來つたことは、いふまでもない。而も其の語學は、もとは(一)亞刺比亞語、(二)トルコ語及びクリミアンタル語、(三)ベルシャ語及び馬來語の三講座のみであつたが、其の後段々と増加して、今では其の上(一)アルメニヤ語、(二)近世希臘語、(三)露語、(四)ルーマニヤ語、(五)ヒンヅスターニ、(六)支那語、(七)日本語、(八)安南語、(九)マルガシー、(十)スダニース、并に(十一)極東國及び回教國の地理歴史法制等を以てするに至つた。そして是等諸國語は、實用上

必要なものと、學問上必要なものとの差別があるから、勢ひ之を兩分して、教授法をも別にしてゐるのである。

さて此の東洋語學校の校長はポアイエ氏で、露語を専門とする人であるが、此の學校に又、ヴィシエ氏、コルヂエ氏などがあつて、支那語の大家と推されてゐる。ヴィシエ氏は、支那語の外、蒙古語をも研究してゐる。コルヂエ氏は、癡に支那群書解題を著はしたが、今又日本のをも著はさんとしてゐる。一日ヴィシエ氏が、余をホテルに尋ねて呉れた時、余は不幸にして不在であつたが、其の名刺には、筆蹟美麗に、支那の時文で來意が書いてあつた。

巴里には又日佛協會といふものがあつて、余の滞在の中にも晩餐會があつた。現今の會長は、久しく日本にゐたベルタン氏で、此の人は日本の戦争の歴史に關する著述があるのみならず、今や又「根付け」の研究をも發表せんとしてゐる。此の協會では、随分日本に關する調査をすることがあるので、現に會員の一人たるマルク・サヅラ・マゼリエ氏の如きは、日本の歴史及び文明

（今五卷迄出版）といふ著書がある。

其の他新聞記者で、ヴィルター・ヅラゲリーといふ人があるが、此の人は、朝鮮の事に興味を有して、已に之に關する著述を出版してゐる。

又博物館では、(一)ギメー博物館に、なか／＼日本の繪畫其の他が集まつてゐる。是れは故ギメー氏の蒐集に係るものである。嘗に日本の物のみに止らず、支那の物、印度の物、埃及の物なども餘程集めてある。併し朝鮮の物には未だ及んでゐない。それから(二)ダネリー博物館には、日本の香盒が多く集められて、日本繪畫の賣物もだいぶんある。併し是等よりも更に注意すべきは、ルーヴル博物館たることを待たぬのである。ルーヴルは、人も知る如く、佛蘭西第一等の博物館だけあつて、陳列の範圍が頗る廣く亘つてゐるが、今其の中で、東洋に關係ある部分を一言して見ると、先づ亞細亞古物部には、アッシリヤや、フィニシヤや、パレスティン方面などから集めて來た珍物の外に、支那の燒物や、日本の塗物などもある。埃及の物は、別に一部を

なしてゐる。又シャヴァンヌ氏が支那から齎らし歸つたものも鮮くないが、更にペリオ氏は、一九〇六年より一九〇九年にかけて、トルキスタン方面を跋渉して、彫刻や壁畫や、其の他の物を持ち歸つたので、是に又一室を提供してある。凡そかゝる學問的の探檢に對しては、國民が尊敬を拂ふのみならず、其の筋でも獎勵の爲にかゝる世界に名ある博物館の一部を割いて、物品の陳列にあてしめてゐる。

七 巴里の誇り

巴里の誇りは何であらうか。世界最高のエイフェル塔か。否。それよりも、セイン川を隔て、之と相對する凱旋門であらう。門より一直線に東南に通ずるはシャムゼリゼーの大街道。其のつき當りがコンコルドの大廣場。廣場の中央に立つは、もと埃及のルクソル寺にあつた高塔ではないか。それを過ぎるとチュレリーの大庭。それからルーヴルとなつて、セイン川につきあたる。余は此の間に、巴里の誇りが十分發揮せられてゐると思ふのである。



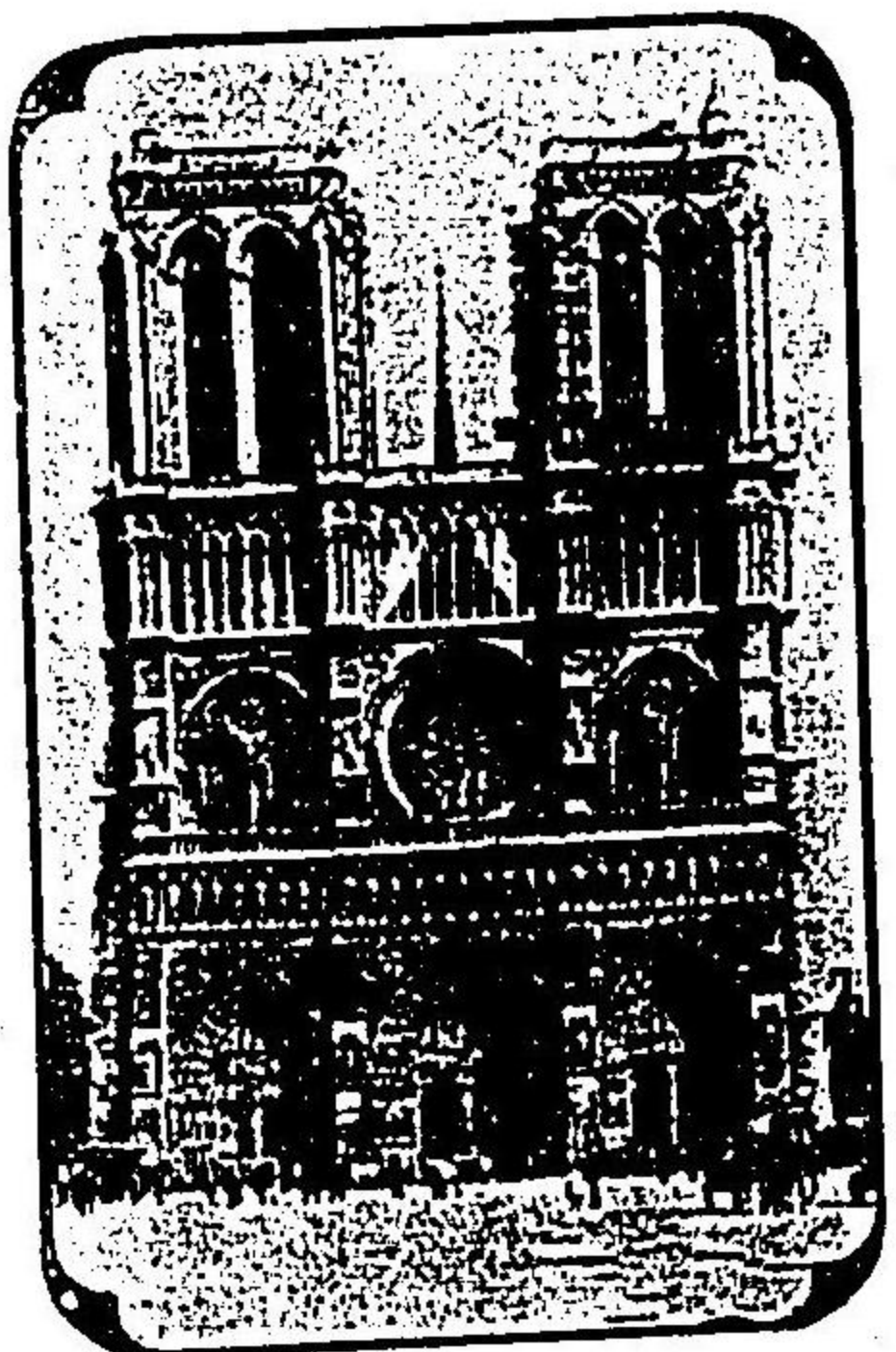
(門 旋 凱 里 巴)

エイフェルの塔はよく人に知られてゐる。が、此の塔によつて現はされたる佛人の氣性を解する人は、多くありや。蓋し佛人は、何事につけても、廣く世界を見まはして、其の魁をしようとするのである。併しながら、佛人が最も意氣とする凱旋門は、蓋世の英雄ナポレオン全盛の時に、勝ち誇つたる盛裝の軍を歡迎したものかと思へば、當年の光景と、きつぱの佛國根性が、眼前に髣髴とあらはれてくる。門の頂上に、普魯西亞の都から分捕つて來た勝利の神が立つてゐたのを、普佛戦争に再び取りかへされて、今はもとの伯林のブランデンブルグ門上に光輝を放つてゐるが、神像は取りかへ

されても、ナポレオン其の人が佛國の誇りたることは、依然たるのである。
 シヤムゼリゼーの大街道何ぞそれ美麗なる。兩側に櫛比せる高樓や、人の通る道や、翠色滴る並木や、中央の廣い車道はいはずもがな。晝となく夜となく、自動車の流れてゐる有様。夜に入つて電燈がつくと、道は光つて油を引いた如く、人影は娑婆として地に落ちる。凡そシヤムゼリゼーを通る客は、男となく女となく、我こそは世界流行の魁といはんばかりの氣取り方。そこへ日本の「きもの」嗜好が加はつて來たのも、世の中は二十世紀である。ナポレオンが、例の白ツボンで、多くの將卒を率ゐて、こゝを練りあるいた華々しさは、最早百年の昔となつたが、街耀を好む巴里人の眼底には、今も猶其の面影が映じてゐるのである。

自動車に流されながら、コンコルドの廣場へ出ると、こゝは色々の歴史的變遷を経て、一八五四年、ヒットルフの設計によつて、今日の美觀を呈するに至つたのである。ルクソール塔の異彩は、慥に四隣の噴水等を壓してゐるが、

是は一八三一年に、マホメット・アリから、ルイ・フィリップに贈つた記念物である。さて此のコンコルドは、今こそは肥馬輕裘の都人の群集するに任せてゐれど、佛國革命の時には、誠に鬼氣人を襲ふ所であつたので、一七九三年正月二十一日には、ルイ十六世はこゝで刑せられ、シャイロット・コルデイ



佛國革命の時の名
 有に時命革國佛
 (寺ムダルトイノるな)

や、マリー・アントアネットや、ブリッ
 ーや、フィリップ・エガリテーや、皆こ
 の露と消えたのであると思へば、
 身の毛もよだつばかりである。

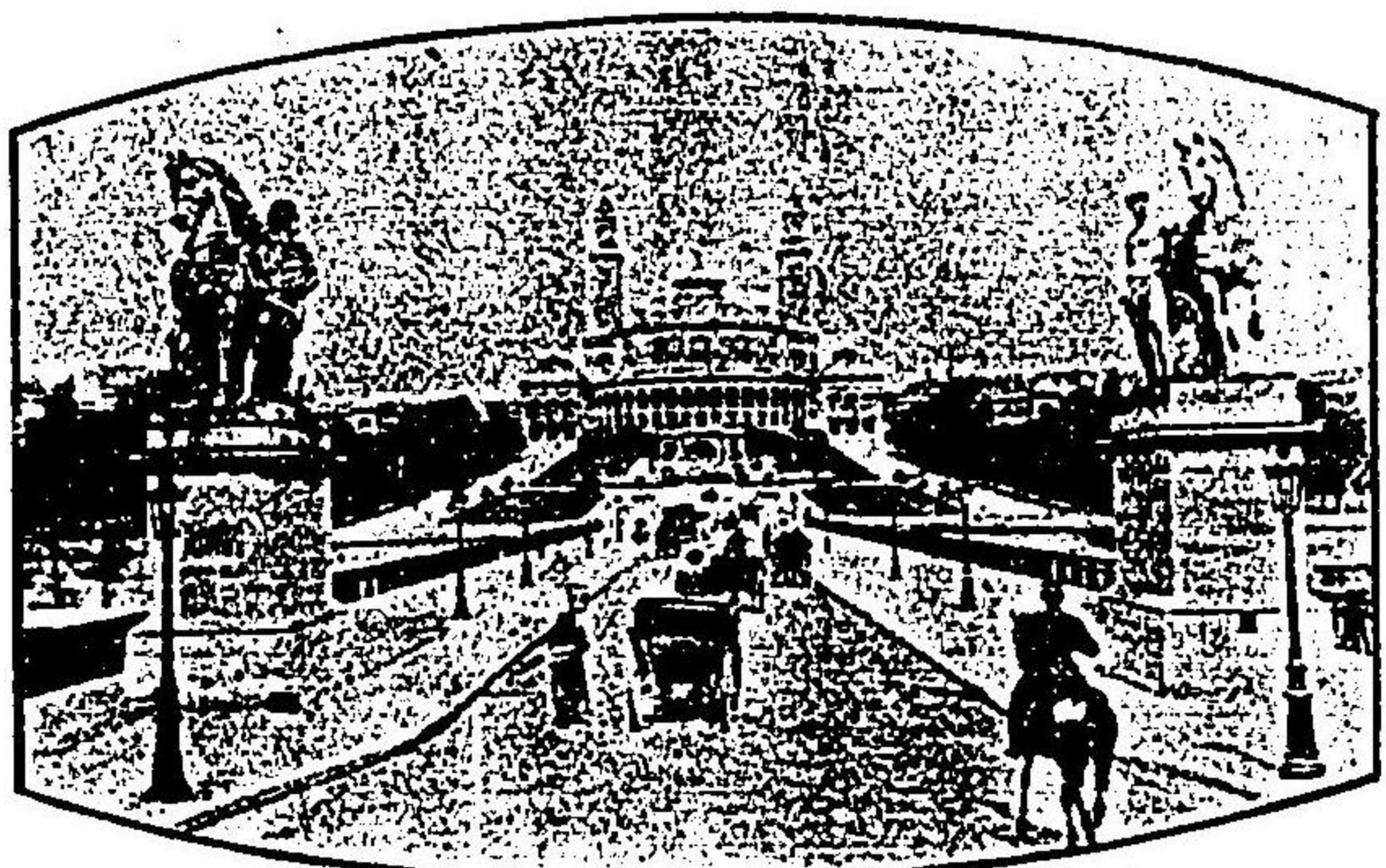
それからつゞくチュレリーの庭。
 庭の東隅は宮殿の一部であつたが、

一八七一年、例の一揆に焼かれてしまつた。チュレリー宮は、革命の時には、大騒ぎのあつた所で、一七八九年十月五日、ルイ十六世はヴェルサイユ宮からこゝへ引うつされる。一七九二年六月二十日には、一揆が此の宮殿を襲

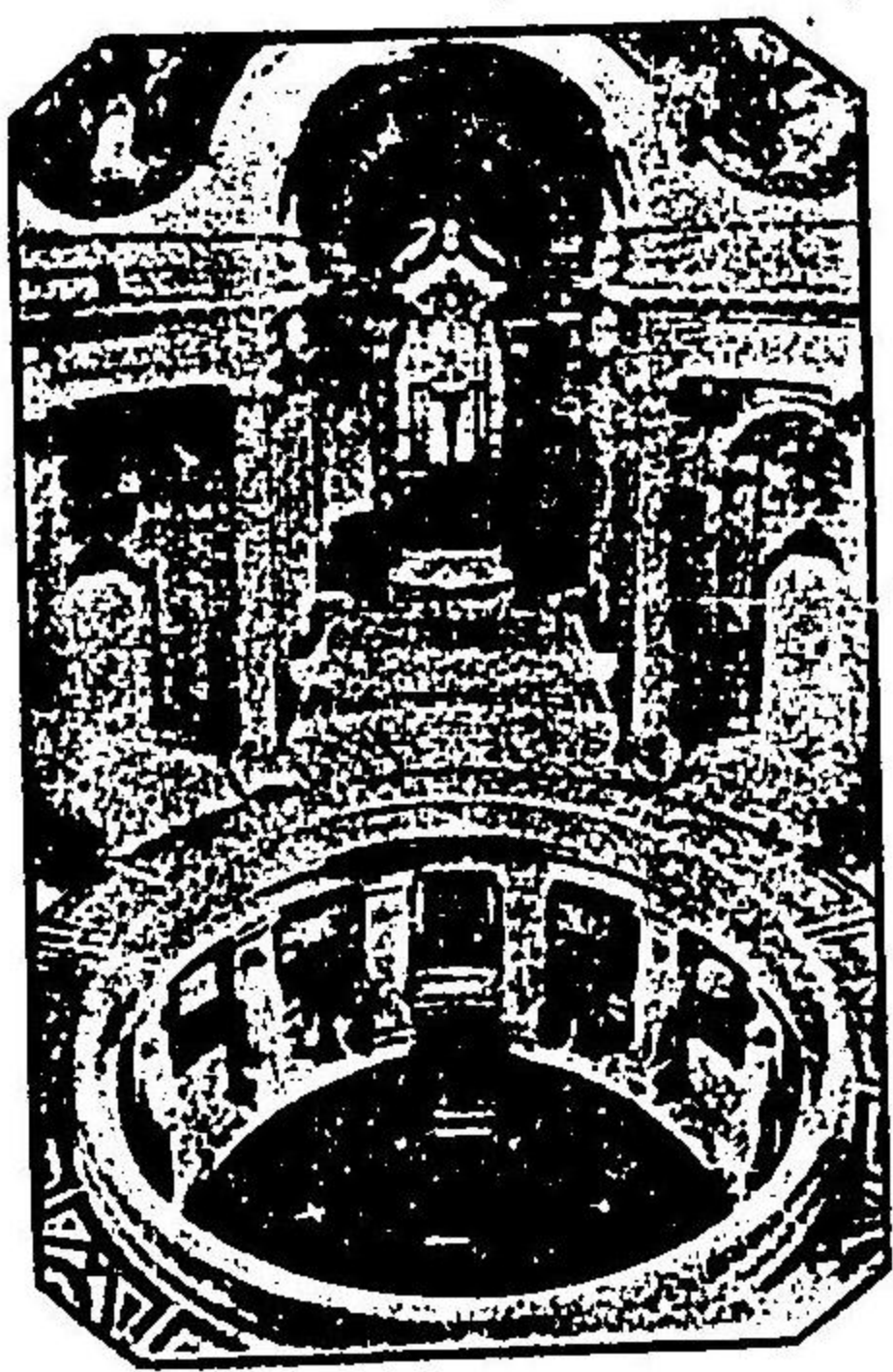
撃する。衛兵は撃殺せられ、宮殿は荒されるといふ有様。革命の後には、ナポレオン一世も、一時こゝにゐたことがある。が、チャールズ十世の宮となつた時には、一八三〇年、一揆が再びこゝを襲つて、王を放つたのみならず、間もなく宮殿は焼かれたのである。かくの如き慘澹たる歴史を有してゐるが、又其のうちには、佛國人の理想たる、自由、平等、信愛の意味も、どこにやら表現せられてゐる。

ルーヴルに至つては、頗る人口に膾炙してゐるだけあつて、其の起りも中々古いのである。即ち十二世紀の終から、已にこゝに宮殿があつたといふ。博物館になつたのは、一七九三年よりのことであるが、其の壯大なる建築、其の珍奇なる蒐集、げにも倫敦の大英博物館と共に、天下に覇を稱するに足るのである。

巴里に於て見るべき所は、右の外、ソロカデロや、ナポレオンの墳墓や、パンテオンや、マデレーン寺や、色々數へ立つれば盡さないけれども、巴里の誇り



(ロデカロツ)



(墓墳翁那)

ハ 佛國教育の實際

佛國教育の實際を述べる前に、さつと佛國學制の要點を云つて置かなければならぬ。佛國の小學校は初等(二年)中等(二年)上等(三年)となつてゐて、義

として、佛人生粹の特色は、右に述べた一帯の地に發揮せられてゐるといつても不可はな

義務教育は、六歳から十三歳まで七年間であるが、幼稚級の設ある學校では、七歳から小學に入るを許し、又全く其の設のないのみならず、他に何等兒童啓蒙の途のない處では、五歳から小學に入るを許してゐる。そこで十歳では、中等小學を了へたまで、それから後は、引つゞいて中學に入る者はそれによし、然らざれば、上等小學を繼續しなければならぬのである。さて其の初等小學の教科目は、修身、讀方、算術、文法、書取及び國語練習、暗誦、歴史、地理、實物示教、唱歌、圖畫、手工、體操、遊戲、合計三十時間。中等小學の教科目は、修身、讀方、暗誦、國語、書方、算術、理科、生理、歴史、地理、圖畫、手工及び線畫、唱歌、體操及び遊戲、合計三十時間。上等小學の教科目は、中等小學の教科目に加ふるに、衛生、家事、經濟、兵式體操を以てせるもので、授業時間は矢張三十時間である。

小學校を終へるとリセーに這入る。リセーは大體之を二つに分つとを得るのである。即ち尋常中學と高等中學とである。尋常中學は四箇年で、羅旬語を學ぶものと、之れを學ばざるものとに區別されてある。何れも四

箇年たるは同じである。高等中學は三箇年で、其の最終の學年、即ち第三學年に於ては、又二つに分れて居る。其の一は文科、今一は數科である。そこで尋常中學の教科目をいつて見ると、羅旬を課する方に於ては、修身、國語、羅旬語、希臘語、近世語、歴史及地理、數學、理科、圖畫で、合計二十二時間又は二十三年時間。羅旬を課さない方に於ては、修身、國語、習字、簿記、法制、近世語、歴史及地理、數學、博物、物理及化學、圖畫で、合計二十二時間又は二十三時間である。高等中學の學科目は、頗る複雑であるが、第一學年に於ては、國語、羅旬語、理科及近世語を主として學ぶ者には之を除くのであるが、希臘語、是は希臘語及び羅旬語を主として學ぶ者のみに課する。近世史、古代史、古代史は希臘語、羅旬語、近世語などを主として學ぶ者のみに課する。地理、近世語、數學、物理及化學、理科、實習、圖畫、合計二十五時間、二十六時間又は二十七時間となつてゐる。第二學年に於ては、右の學科目に加ふるに、羅旬實習、是は理科や近世語を主とする者に課せないが、物理、是は希臘語、羅旬語、近世語などを主とする者に

は課せないがを以てして、合計二十三時間二十五時間又は二十七時間となつてゐる。第三學年に於ては、文科の方では、哲學、希臘語及羅甸語、是は隨意科となつてゐる、近世語、歴史及地理、數學、物理及化學、博物、圖畫、隨意科で、合計十九時間二分の一又は二十二時間二分の一となつてゐる。數科の方では、哲學、近世語、歴史及地理、數學、物理及化學、博物、理科實習、圖畫で、合計二十七時間二分の一又は二十八時間二分の一となつてゐるのである。さて此の中學全體を終へるのが約十七歳で、それ以上は大學又は各種の専門學校に續く事になつて居る。大學は文、理科、法科、醫科の四科に分けてあるのが普通である。

以上の諸階段は、我國の如く、各學校にわけて、別々になつてゐるのは少なく、多くは、幼稚級から、又は小學校から、中學校まで、一つのリセーに併置してある。之れが又實際の話をなす上に於て記憶を願ひたい事柄である。尙一つ注意を要すべきは、宗教と教育との分離である。從來宗教は學校の修

身教育の中心となつて、僧侶が其の教師をしてゐたのである。故に校内に寺院の設けのあるのが普通である。然るに最近に於て、佛國は諸種の事情に鑑みて、教育を宗教より獨立せしめるといふ主義に移つて來た。此れ教育上及び精神界に於ける大變革である。そこで前いふ如く、政治家と宗教家との間に大なる衝突が起つたけれども、兎に角修身教育は、宗教より之を離して、國家に於て行ふといふ趣旨に一定して、現に斯く行ひつゝある。けれども、實際に於ては尙全く分離するに至らず、依然學校内の寺院も、そのまゝになつてゐるところが多い。

次に中等教育に移つて、先づ規定のことから述べて見ようが、生徒數は一定して居ない。里昂のアンペイヤ中學校では一千三百人、巴里のアンリイ四世中學校に於ては一千人、ルイル・グラン中學校に於ては千五百人、モンテ・イヌ中學校に於ては千七百人。斯の如く區々になつて居る。尤も、此れ等の生徒數は何れも多い様であるけれども、前にも云つた通り、小學校又は幼

稚園までも、中學校に併置してあるものが多いのである。但し師範學校は、云ふまでもなく、教育實習、其の他の關係より、生徒數を少くする必要があるから、募集人員を一定して、生徒數を少くしてゐる。例へば巴里の師範學校に於ては、生徒定員百二十となつて居る。而して、此の師範學校では、卒業生の義務年限を十箇年としてあつた。

服制の如きも亦一定されて居ない。但し中には之れを定めて、外出の時のみ着用せしめる學校もある。例へば、ルイル・グラン中學校の如き是である。又此の學校では、木曜日と日曜日との外は、舎生の外出を許さない。其故は、佛國の學校では、木曜日と日曜日とが休日であるから、此の兩日に外出を許す事になるのである。モンテ・ヌ中學校に於ても、亦此の通りである。

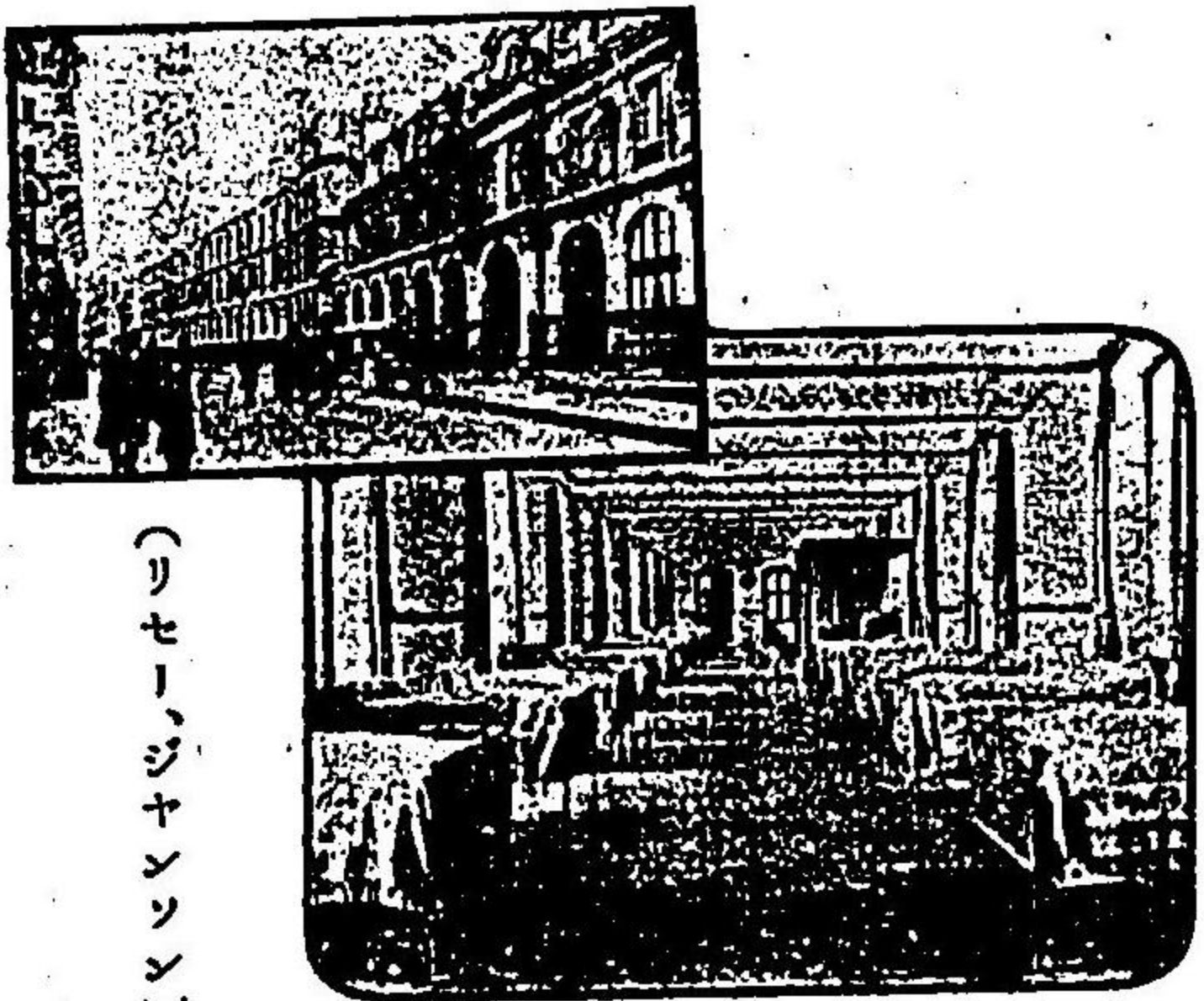
授業時數は、午前が二時間、午後が二時間或は三時間となつて居るのが多い。モンテ・ヌ中學校では、午前午後共二時間づゝ、ルイル・グラン中學校は、午前二時間、午後二時間或は三時間となつて居る。そして午前は、八時から

始まると十時に終るので、それから晝食までは、自修をさせる。ジャンソン中學校に於ては、一週教授時數が三十三時間若くは三十四時間と規定されてあつた。序に教員の受持時數を見るに、

モンテ・ヌにては、中學部が十五時間、小學部が十九時間の受持である。但し歴史の教師に限つて、教授の準備が甚だ困難なるために、毎日二時間以上受持たないことになつて居る。

教授の實際を見るに、學科目中、近世語學は區々であるが、英語、獨逸語、それから西班牙語までも教へて居る所がある。ジャン

ソン中學校の如きは即ち是である。ルイル・グラン中學校に於て、英語の教授を見たが、教科書は詩集を用ひて居る。甚だむづかしいと思つたが、其の



(室 寢 舍 宿 寄)

(リセー、ジャンソン)

詩を教ふる間に、教師と生徒との問答が頗る多い。而して語句の説明中、文法だの、歴史だの、諸種の問答を試みて、多くは之を生徒に説明させ、そして語學を練るので、練ると云ふことには大に注意して居る。倫理は第三學年から始めて課することになつてゐる。現にモンテレーヌ中學校でも之を見たから、第二學年まではどうするかと問ふと、其の間は生徒の家庭に於て、カンリックの教義を説き聞かせるのに任せて置くのである。ジャンソン中學校でも倫理の授業を見たが、矢張り學術的説明に偏するの嫌を免れることが出来ない。特に教科書の無いのは、一層の困難である様に見受けた。體操は學科目の中にも見えない位であつて、總て運動で體育をやつてゆくから、兵式を課するなどには誠に少い。ジャンソン中學校では、兵式體操をやらせてゐるといつてゐたけれども、逆も我國の様には行かない。ルイ・ルグラン中學校には、兵式體操なく、唯木曜日に射的を行つて居るばかり。モンテレーヌ中學校に於ても、兵式體操はなく、徒手體操、器械體操、及競走などをやつて

ゐた。併し何れも力が十分這入つて居る様には見えない。是れ一つは、服装の關係もあると思ふ。奇麗なるカラーを嵌め、ズボン釣りを着け、胸の開いた上衣の儘體操をしては、逆も自由に行へない。但し體操が斯の如き状態であるからと云つて、生徒の體格はどうかといふと、これは頗る良い。蓋し「體育」に關する注意は頗る行き渡つて居るのである。さて又モンテレーヌ中學校に於て地理の授業を見たが、教師は唯記憶によつて之を教へて居て、教科書は無い。否、教科書は有つても、餘りにむづかしい爲めに、其の大略を摘んで、授けてゐるのである。而して生徒は、其の要點を筆記して、且よく發表しつゝ、業を受けて居た。又此の學校の博物の授業をも見たが、矢張り教科書が精し過ぎるために、口授を以て之を教へて居た。斯の如く、教科書に關しては、日本が遙に整頓して居るのである。然るに學力をつける事に於ては、なか／＼成功して居るやうに見えるのは感心である。授業に幻燈を使用する事は、非常に行はれ、殊に地理、歴史、理科等の教授に於て、最も多く之

れが用ひられて居るのは美しい。

問答は、中々よく之れを行つて居る。生徒の發表は頗る巧である。併し生徒を黒板の前に呼び出して、書物を読ませながら、之れと問答をするのを多く見たが、其の生徒一人の教授には極めて親切であるけれども、級全體の教授としては、如何なものであらうかと思はれた。されど大體に於て、生徒は自由に發表する習慣のついて居る事は美しく見えた。

訓練に就いて述べて見ようならば、中學校卒業までは、務めて生徒の行爲に干渉するけれども、大學に至つては全く放任の有様である。此點については、英國と大差あるのである。巴里の師範學校に行つて見たが、此處では、生徒の風儀が頗る質素であつた。寄宿舎の掃除の如きは、生徒自ら之れを行ひ、洗濯も或る部分は生徒がするといふ位。又外來者に對する態度も甚だ懇切である。余の行つた時には、生徒の一人が親しく案内して呉れたが、此の時は、無論課業のない時間で、其の案内は頗る周到であつた。

管理は餘り行き届いて居るとも見えない。教室に於ける生徒は寧ろ亂雑で、随分思ひ／＼の事をして居る。教師も亦餘り之れを咎めない様である。參觀人が教室に入ると、生徒は之れが爲めに注意を奪はれて、沈着の態度を失つて来る。教師も授業を中止して、參觀人と話をするやら、又參觀人の爲に諸種のことをやつて見せるといふ様なこともある。序に一寸附け加へて置くが、佛國の學校では、文部省からの紹介なくしては、容易に教場を見せない。是れ參觀人のために、教授を妨げらるゝ虞があるからであらう。家庭との連絡を調べて見るに、モンテ・マ中學校に於ては、校長自ら其の衝に當り、通信簿を以て之を行つて居る。併し其の通信簿は、餘り整頓せる形式を備へてゐるでもなかつた。又學校の展覽會等に父兄を招待して、懇談を行ふこともある。此の外特にお話すべき施設も見あたらなかつた。かゝることは、寧ろ我國の右が方を折つてゐる。

設備について見るに、其の良いは、大抵私立である。而して寄宿舎を設

けて居るのが多い。乍去、入舎は必ずしも之れを強ひない。遠方から通ふ者を收容する位のところである。モンテレーヌ中學校長は、寄宿舍に入れると、恰も牢獄に在るが如き感を起させるので、之れを強ひない」と云つてゐたが、是れ佛國寄宿舍の實情をよく云ひ表はしたものかと思つた。併し寄宿舍の構造、特に寢室、食堂の如きは中々美麗である。アンリヤ四世中學校の寢室は、中央に階段があつて、其處から四方へ部屋が分設されてあるから、寢室の監督が頗る便利である。ジャンソン中學校の寄宿舍の如きは、内部の整頓せるのみならず、病院の設備もあつて、而も其病院の中に、二つの教室すら設けてある。即ち身體に差支のない限り、此處で勉強せしむるのである。此の學校に於ては、教室は比較的小さかつたが、之れは強ち此の學校のみに限らず、何れの學校に於ても同様の感がある。又机の高低等に關する注意も少く、而も其の机が床に造り附けてあるのが多い。實驗室、藥品の備附等はよく整つて居る。是れ生徒の實驗を重んずるが爲めである。併しなが

ら、物理器械、博物標本等は、其數に於ては、我國のそれよりも見劣りがせられる。物理器械は、其數が少いけれども、よく之を利用せしめる事には注意を怠らない様である。標本も買ひ込んではあるが、我國の中學で、其の附近の標本を採集して、學術上の發見をしてゐる様なことは、見えないやうである。次に小學校教育に移つて、先づ訓練の方面から云つて見るならば、教師はよく其の職に落ち着き、よく其の任を盡すことに満足して居る様に見える。巴里のクージャ町小學校に行つた時も、此の感を強くした。又兒童は、幼少の時より、よく人に慣れて、人懐しく、人に親しむ傾向の顯著なる事を認められる。例へば我々の如き外國人が參觀に行つても、或は「オハヨウ」とか、或は「今日ハ」とかの挨拶をするのみならず、手を握つて禮を行ふ者すら多かつた。又余の前を通る時には、「御免下サイ」といふのを例として居る。若し云はない兒童があると、教師は再び元の席に歸らしめ、「御免下サイ」と云はせて後に、通らしむるのが普通であつた。

家庭との連絡を見ると、通信簿は十五日毎に父兄の證印を受ることにして居るのがある。ブードネー町小學校の如き即ち是である。但し特に父兄會といふべき類のものは見なかつた。

教授の方面を見ると、かの修身は色々になつて居るが、下の級で三十分、中の級で四十五分、上の級で一時間授けて居る小學校もあつた。即ちブードネー町小學校の如きは是である。外國語は隨意であるが十歳以上の者に獨逸語を授けて居る學校もあつた。體操に十分力のはいつて居る様に見えるのは例の如くである。又兵式を課せずして、射的を行つて居る高等小學校もあつた。劣等生の注意の如きも比較的少い様に思はれた。

然るに、兒童の成績の良好なることは實に豫想外で、それは發表より推しても之れを知り得るのである。既に小學校の上級生にもなれば種々なる事を知つて居る。即ち我國ならば、中學校か高等女學校の生徒でなければ、知つて居ない様な知識すらも、彼等は既に之を有して居る様に見受けた。

之れには、色々の原因がある。教授も、其の効果に重きを置いて居り、又社會一般の状態や家庭の情況も、兒童に自然に知識を與へることになつて居るであらうが、又一つには、讀書が我國よりも大いに容易な事も、與つて力あることゝ感ぜられた。

設備に就いて云へば、運動場は比較的小であつて、數個處に分設されて居るのが多い。何と云つても、我國の如く、土地や空氣が潤澤でないから、我國の運動場を追懐して、徐ろに我の幸福を感じた。尤も村落になれば別である。階段の如きも、頗る狭くして、寧ろ家庭と異ならざる様に思はれる所が多い。我國ならば、混雜を極むる事と思はれるが、そこは向ふの躰だけある。手洗場の完備して居ることは云ふまでもない。殊に手先を清潔にすることは、歐米一般の躰の一つとなつて居る。又時計、寒暖計の如きも、頗る注意して置かれてある。併し、机に對する注意は、不行届のやうに思つた。即ち机は多く床に造り附けてあつて、随分高過ぎるのがあり、腰掛も亦高く、兒

童の足の浮いて居るのも見受けられた。教具が我國の如く潤澤でないと思はれる事も、中學校の場合と同じである。

教室には、多くの掛物が掛けてあつて、寧ろ多過ぎはせぬかと思はれるぐらゐる。即ち児童の注意の集注力を阻害しないかと憂ひ得るほどの程度である。併しながら、教室は多く教師自己の室で、之れを自分の家庭の如く取扱つて居るのが普通である所から、斯る結果になつて居るのではあるまいか。而して教室は何れも狭い様であるが、奇麗なる點、又家庭的なる點に於ては、前いふ通りで、我國のそれよりも優つて居るかと思はれた。

終に規定のことを一言せんに、教授時數は一週三十時間であるが、木曜日は通例休むからして、土曜日までも五時間教授して居る。小學校を終はると、三箇年の補習を行ふのであるが、其の間の授業時數は、三十五時間までやつてゐるのである。一學級の児童數は、四五十人より多い所はない。

或る小學校では、幼稚園から小學校に這入らんとする児童に對し、女教員

が之れについて、小學教育を施すの準備をして居る所を見受けた。クイジヤ、町小學校の如きは是である。又職工の児童に晩飯を與へて居る小學校もあつた。其の他、極めて安い食料を以て、児童に晝食を供給して居る學校は少くない。

九 富豪の美舉

巴里にアルベルカインといふ人がある。獨力で身代を仕上げた人で、齡已に知命に及ぶも、未だ結婚もしない。孳々として働いて、其の擧ぐる所の巨万の利を以て、社會公益の事業に投ぜんとしてゐる。世界一週會の企ても、亦其の一である。

世界一週會の目的は、佛國の學者を外國に出して、正確なる外國の知識を齎らし歸らしめ、又外國の學者に、佛國を正しく理解せしめるやうにして、互に國情を悟り、人情を知り、思想感情を融和するの機會を作つて、延て世界

の平和に貢献せんとするものである。斯の如くにして、是等學者の調べたる事項は、之を印刷して書冊となし、以て世界オビニクインテリナショナルの定論を作らんと試むるものである。會には名譽會長を置いてあるが、是はオヴラックといふ人に任せて、カーン氏自らは、資本主たるのみなのである。

カーン氏は、此の事業の端緒を、佛國の大學に開き、獨逸に試み、英國に試み、米國に試み、日本に試み、今又露國にも之を試みんとしてゐる。それによつて、是等諸國の學者にして、世界を周遊しつゝある者は鮮くないのである。巴里には、此の會の俱樂部が設けられてある。地はブロンニエ公園の西端、セイン河の畔。一條の橋を隔て、サンクルーの公園に相對する勝區である。建築敢て宏壯といふにあらざるも、清楚にして寧靜、頗る勉強に適してゐる。其の内には圖書室があつて、各國の國語を以て編纂されたる圖書及び會員の調査研究等が陳列してある。

試に窓を推せば、翠色滴らんとする樹蔭より、新鮮なる空氣が襟を掠めて

入る。食卓に就けば、懇切なる給仕が、葡萄の美酒を運んで来る。もし夫れ日曜の清暇に乗じて、地續きのカーン氏の庭園に逍遙せば、蒼蔚たる山林、卑濕の平澤、嬋娟たる美花、怪奇なる巖石、應接に暇あらざる内に、佛國式の花道も通ることが出来れば、爪哇式の園池を賞することも出来るが、特に日本式の堂塔茶室及び其の庭園に至つては、人をして驚嘆せしめる。

余輩も亦其の庭園の美にあこがれた一人であるが、更にそれよりも、年々歳々、巨万の私財を擲つて、學者に便宜を興へ、平和の天使をこの世に降らしめんとする氏の道樂には、一層感心する。それにつけても、日本にはまだ斯の如き篤志家を出すの餘裕あるを聞かざることを、何となく恥かしく思ふのである。

一〇 巴里近郊の名勝

巴里からセイン川を西南の方に下ると、セーヴルに着く。こゝには有名

なる国立陶器製造所がある。さすがは佛國だけあつて、国立の製陶所を持つてゐるのみならず、其のうちには、各國の各時代に亘れる標本を陳列し、而

も其の標本を參考として新工夫を凝らし、其の新工夫によつて、天晴セーヴルの陶器をして、天下の逸品といはしめむとするの努力は、感ぜざるを得ないのである。近時東洋、特に日本の趣味が、著しく西洋の美術に影響を及ぼして來たが、此のセーヴルの陶器にも、明かに其の影響を認め得るのである。



(物燒のルヴーセ)

セーヴルから汽車で、更に西の方へ行くと、ヴェルサイユに着く。こゝは、ルイ十四世の建てた町で、ルイ十四世は、常にこの宮殿に住んでゐたのである。それからルイ十五世、ルイ十六世等の諸王は、皆こゝを都として、豪奢を極めたのであるから、い

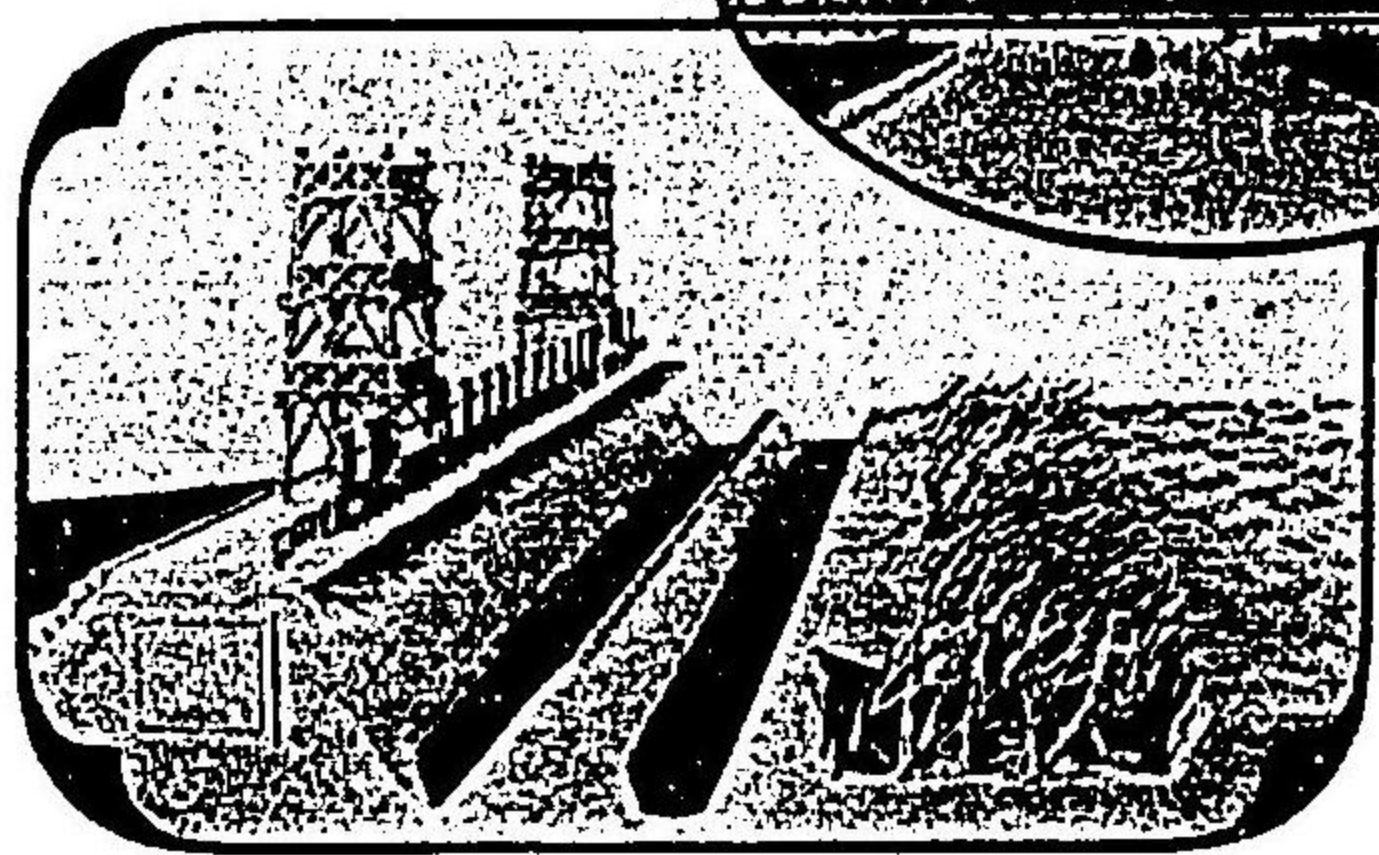
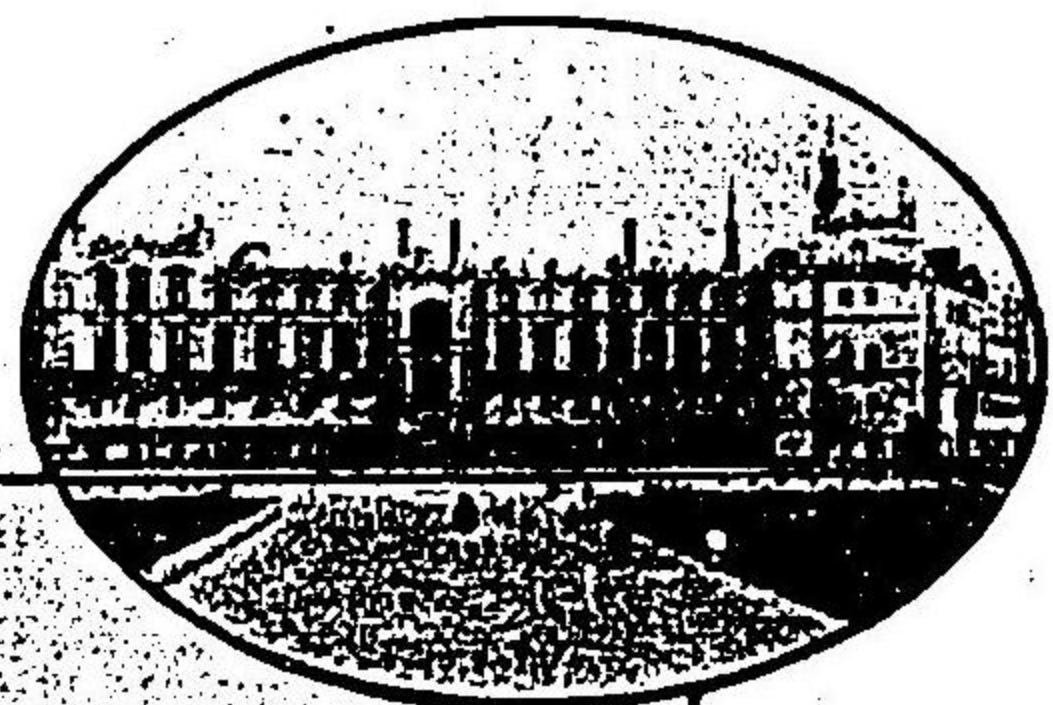
かに其の宮殿の立派なるかも思ひやられる。宮廷貴族等の豪奢の中には、おのづから婦人の勢力も蔓延して、共に腐敗を招くの因となつたであらうが、猶それよりも恐ろしいのは、財政の困難と、一般人民の不平とであつた。佛國の革命は、斯の如くにして其の端緒を開いたのである。革命の端緒が一旦開けると、恰も大河の決するが如き有様で、殆ど底止する所がない。一七八九年十月、巴里の暴民は、大舉してヴェルサイユ宮を襲ひ、王に迫つて、チユレリー宮に移らしめた。其の後ヴェルサイユ宮は、ルイフィリップの時になつて、ぼゞ舊時の盛觀に復し、又其の一部分が開かれて、繪畫陳列所となつた。普佛戦争の時、普魯西亞王ヴィルヘルム一世は、進んで此の宮殿に陣し、一八七一年正月十八日、遂にこゝで獨逸皇帝の位に即いた。榮辱盛衰の極端なる歴史を一場に集めて、人をして万感胸に溢れるを禁ぜざらしめる。莊麗なる殿内の裝飾、思ひ出多き大幅の名畫、碑研たる園中の花、さては林間の池水に浮べたる短艇など、今は人の遊覽に任せてあるが、余等は其の美と

其の快とに酔はむとする内に、又多くの懼れを抱き、多くの戒めを得るので

ある。

ルゼンサ)
(宮ンマ

ある。



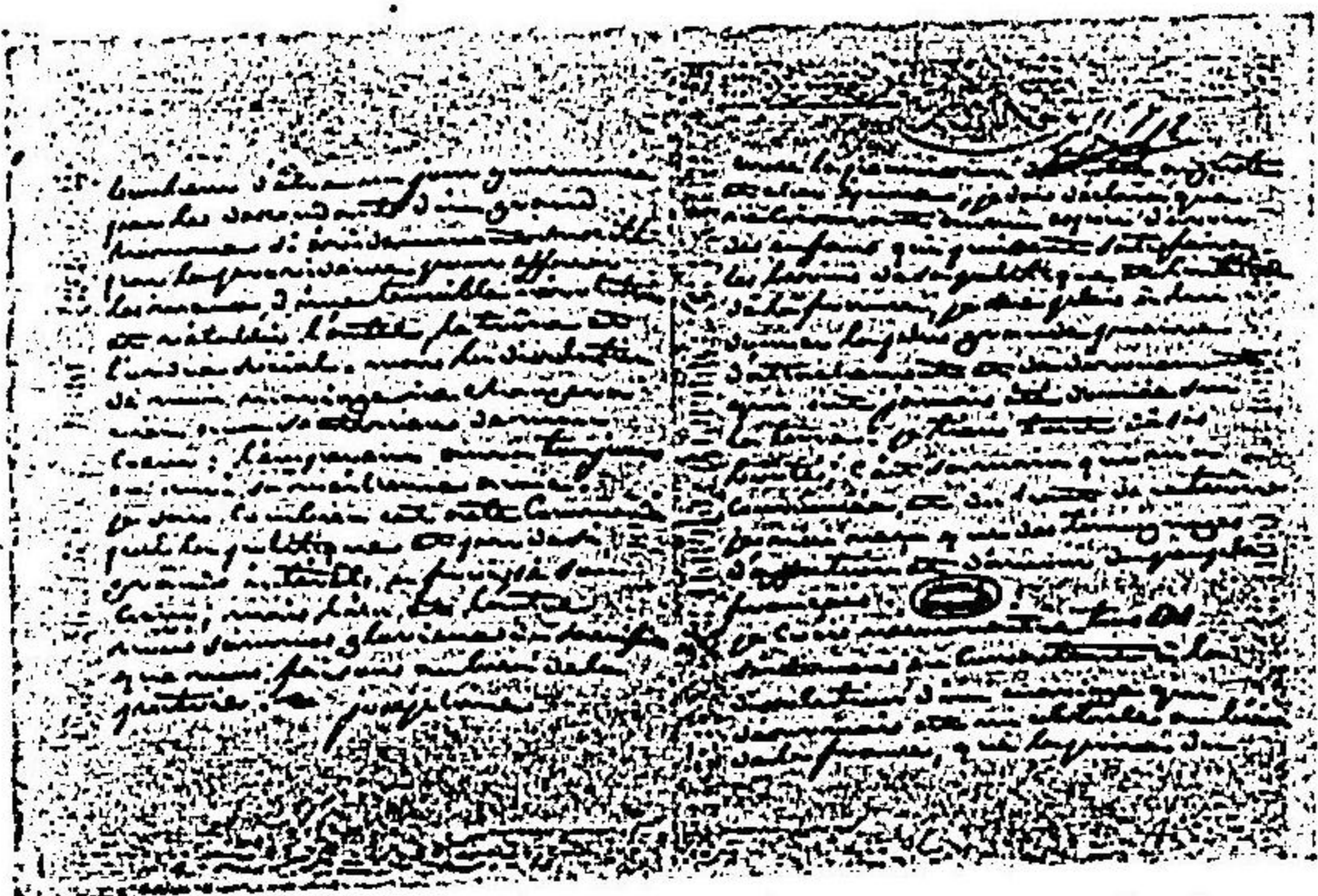
(型模の柵堡IザIシるたれらせ列陳に室一其)

てゐる。ヘンリー四世の時に建てられた部分は、一七七六年に壊されて、今

ルゼンサイユから北の方、巴里の西郊に當つて、サ
ンゼルマンといふ處がある。こゝは昔
から、佛國帝王の夏宮のあつた處で、其の
城は、十二世紀に始めて出來て、歴代に手
を加へたものである。英國との戰爭中、
一旦破壊されたことがあるけれども、チ
ャーレス五世の時に恢復せられ、更にフ
ランシス一世の時に現今の建物が出來
て、フランシス一世の結婚式を行つた寺
や、ルイ十四世の生れた處なども現存し

は、只亭榭のみが残つてゐる。霽日亭に上つて、午餐を試みむか、其の眺望の
絶佳なる、殆ど筆紙に盡されない。城内は今
博物館となつて、佛國の上古から、カロヴィン
家の時代に至るまでの珍品が集まつてゐる。
就中第十三室にある、羅馬人のゴール征服の
説明の如き、史家にも一方ならざる好資料を
與へる。シーザーがアレ ज्याを撃つた時の
堡柵の如きも、随分残酷なものであつたこと
がわかる。

サンゼルマンから巴里への歸途に、マルメ
イゾン館といふがある。是は、ナポレオンの
先夫人ジョセフィンが離縁後の住居として、
有名な所である。こゝにも又ナポレオンの記念品が多く、ある上に、更に人



(簡手のソイフセヨジるせ諾承を込申の婿離の翁那)

の同感をひくものは、ジョセフ・インの記念物で、其の死んだ室などに至つて、

最も感動を起さしめる。ナポレオンがセン・ト・ヘレナに流される時には、こゝで一族に分れたといふ。それからまもなく、ジョセフ・インは死んだのである。

巴里の西端のブロンニュから、川を隔て、西方には、サンクルーの町がある。セインの流れに架する橋上の眺めは、我が東京の御茶の水よりも美しく、サンクルーは其の川に臨んで、後ろに丘を負うた雅致多い町である。

宮殿の跡から森の間にわけ入れれば、清趣人の胸襟を爽かならしめる。この宮殿は、昔時富豪の邸宅であつたのを、ルイ十四世が買ひ入れて、大建築をしたのである。



(宮ノゾイメルマ)

例のナポレオンが、兵力で解散した五百人會議は、即ち此の宮殿に於て開會せられたものなので、ナポレオンが帝位に即いてからも、此處の景色を愛して、屢々來たことがあり、又ナポレオン三世も、こゝを夏の住居としたといふことである。但し其の宮殿は、今はほんの一部分より残存してゐないが、森につゞく公園は、幽邃にして眺望宜く、巴里の雑沓より出て、而も巴里の雑沓を見下ろす所いかに、累代のナポレオンに愛せられただけの價値は十分である。余輩は其の美景よりも、更に其の景色の内に、亦革命とナポレオンといふ佛國の特色が添つてゐるのを、面白く思ふのである。

一一 巴里と倫敦との風俗の差違

巴里から倫敦に移つて見ると、著しく風俗の違つてゐることは、一二にして止まらない。

(一)巴里では、珈琲店が軒を並べてゐる。赤白の線を畫したる暖簾は、到る

所の町に見ることが出来る。然るに倫敦では全くその様のことはないから、途中で食事をするとか、珈琲でも飲む場合には、普通の家造りになつてゐるレストラントか、又は地下の穴倉造りになつてゐる茶店に這入つて行くのである。此の穴倉造りになつてゐる茶店は、多くは招牌も何もないから、初めての客にはわかり兼ねる。何れにしても、巴里の如く、珈琲店が顯著でない。又巴里のは、前にいふ如くに、赤白の線を書したる暖簾が、家の軒から廂を成して、前につき出してゐるので、其の直ぐ前は、人通りの路であるから、暖簾の下で、麥酒や珈琲を飲みながら、其の前を通る所の男女老幼の風俗を眺められる。否、此の眺めを、佛人は何よりの楽しみとしてゐる如くである。食事をする人は格別であるが、そうでなければ、多くはレストランの中へ入らずして、此の軒の下で、酒や珈琲を飲むのを常とする。佛人が此の軒下を非常に好むことは、朝から已に來てゐる人のあるを以ても證せらる。夕陽已に落ちて、電燈漸く明かなるに及んでは、其の股賑名狀すべからざる程で

あつて、又此の雑沓の處に姿を見せに來る婦人も、頗る多いのである。然るに倫敦に行くと、ぼつたり様子が違つて、殆どかういふことはない。巴里に住み馴れた人が、倫敦を淋しく思ふのも、是が爲である。

(二)巴里では、男女手をつないで歩くのが普通である。倫敦では、日本の如く、男女別々に歩くのが普通のやうに見える。尤も巴里でも、日中用事で路を急ぐ人の如きは別であるし、又倫敦でも、晩涼を追ふの散歩などは別である。が、大體に於て、右にいつた差違は、目に着くことの一である。

(三)巴里では、裸體婦人の名畫彫刻が多い。町に張り出してゐる廣告の繪にすらも、女が足を出して踊つてゐる所などが少くない。倫敦では、是れが誠に少ない。余は倫敦の廣告繪に、女を見たことは稀である。美術展覽會などにいつて見ても、此の差違がよくわかる。倫敦の美術展覽會で裸體婦人の畫の少い理由を英國人に聞くに、答へて曰はく、裸體婦人の繪などを多く出すと、英國の紳士淑女は、いやがつて見に行く人が少ないといふ。是れ

亦國情の差違の一斑を表明してゐるであらう。

(四)婦人の服装に至つては、巴里が世界の流行を作ることはいふまでもない。そして巴里の婦人間には、顔にも白いをぬり、唇に紅を施すことがなかく、行はれ、而も其の化粧の濃厚なること、我が京都式である。倫敦の婦人には、特別の人を除くの外、殆どかゝる粉粧を見ない。茲にも人情の相違が現はれてゐる。

(五)町の雑沓は、兩者何れも世界の大都會の觀を呈してゐるが、巴里のシヤンゼリゼーの如きは、さすがに廣い町だけあつて、自動車は何臺走つても、餘裕は綽々である。但し人が町を横ぎることは、頗る危険であるから、餘程よい機會を見て、而して横ぎるのである。倫敦の町は概して狭く、特に東區の商業中心部の方面へ行くと、人馬の雜沓で、一層狹隘を感ずる。併し其の繁榮は、實に一方ならずして、肩摩穀擊とは最早常套の形容語でなく、實際となつて現はれてゐる。又倫敦は、煙や霧が多いから、家が黒くなり易い。それ

て町の奇麗なる點よりいへば、倫敦より巴里の方が勝つてゐるし、雜沓の點からいへば、倫敦の方が一入である。そして通つてゐる人々の様子からいつても、巴里の方が悠長で、倫敦の方が忙しさに見える。巴里の人は、預け金の利子で一生を安樂に暮らす人が多く、倫敦の人は、自己一臂の力によつて、一生の運命を開拓せんとする人が多いことの一端が、かゝる所にも見え得るのかと思はれる。

一二 佛人と英人との感心な點の比較

佛人の感心なことは、先づ勤儉貯蓄が風を成してゐることである。巴里の様子は、いかにも浮華厭ふべき如くに見えるけれども、是はほんの一方面の外観のみで、他方に於ては、非常に勤儉な所があるのである。特に巴里を一步離れて田舎に出ると、農民の勤勉節約なことが、感ずるの外はない。成程普佛戦争敗軍の結果、莫大な償金を獨逸に取られて、是では國が持ち切れ

ぬてあらうと思ひの外、直ちに其の償金をば、手より手に拂つてしまつたのも、決して偶然ではないのである。今日に於ても、實際に世界の資本主となつて、天下の市場に金を融通してゐるのは佛人ではないか。已に餘資がある。是に於てか、學術の研究等も、道樂的に出来る。其處へ、花々しく人の魁をしようとする性質も加はつてゐるから、發明もなか／＼出来る。空中飛行器の研究などには甚だ適してゐるので、此の様なことにかけては、まだまだ我國人の及ぶものではない。

英人は佛人ほどの貯蓄心はないけれども、男一匹で、天涯地角、到る所に自ら其の運命を開拓するの勇氣に富んでゐる。我は一個獨立の健兒である。己れの方で己れの生涯を仕上げてゆく。政府のお蔭も、大臣の引き立も、いらないのである。かゝる氣風があるから、總て事業は、政府の指導を待たずして、民間から起つてくる。學校の事に至るまでさうである。そこで自治團體が非常に活動をする。従つて大臣などといつても、左程えらいものと

はせられてゐない。どつちかといへば、倫敦市長の方が、或は幅がきくのも、即ち是が爲である。かゝる個人本位でありながら、又熱烈なる愛國心を持つてゐる。英人が聞きぐるしい程、國自慢をするのも、是が爲かと思はれる。小僧のクライブや、廢兵のブルークや、學生のローズなどが、いつのまにかぼつり／＼と、印度の大部、ボルネオの一角、さてはアフリカの南端に、地球の色をかへる様な男らしいことをする。余は殺風景なボルネオのラブアンや、沙漠の中のカルツームで、ホイスキーソダを乾盃しながら、勇み立つて、ロングリップ・ゼキングを歌つてゐる英人の團體を見て、其の颯々たる英氣を羨まざるを得なかつた。

一三 英王戴冠式日所見

英王ジョージ五世陛下の戴冠式については、新聞や雜誌で、随分委しく書き立て、あつたから、特にお話する程のこともない。そこで、其の式の情況

は述べないが、式日に目撃した英人の有様についての所感は、聊一言して見ようと思ふ。

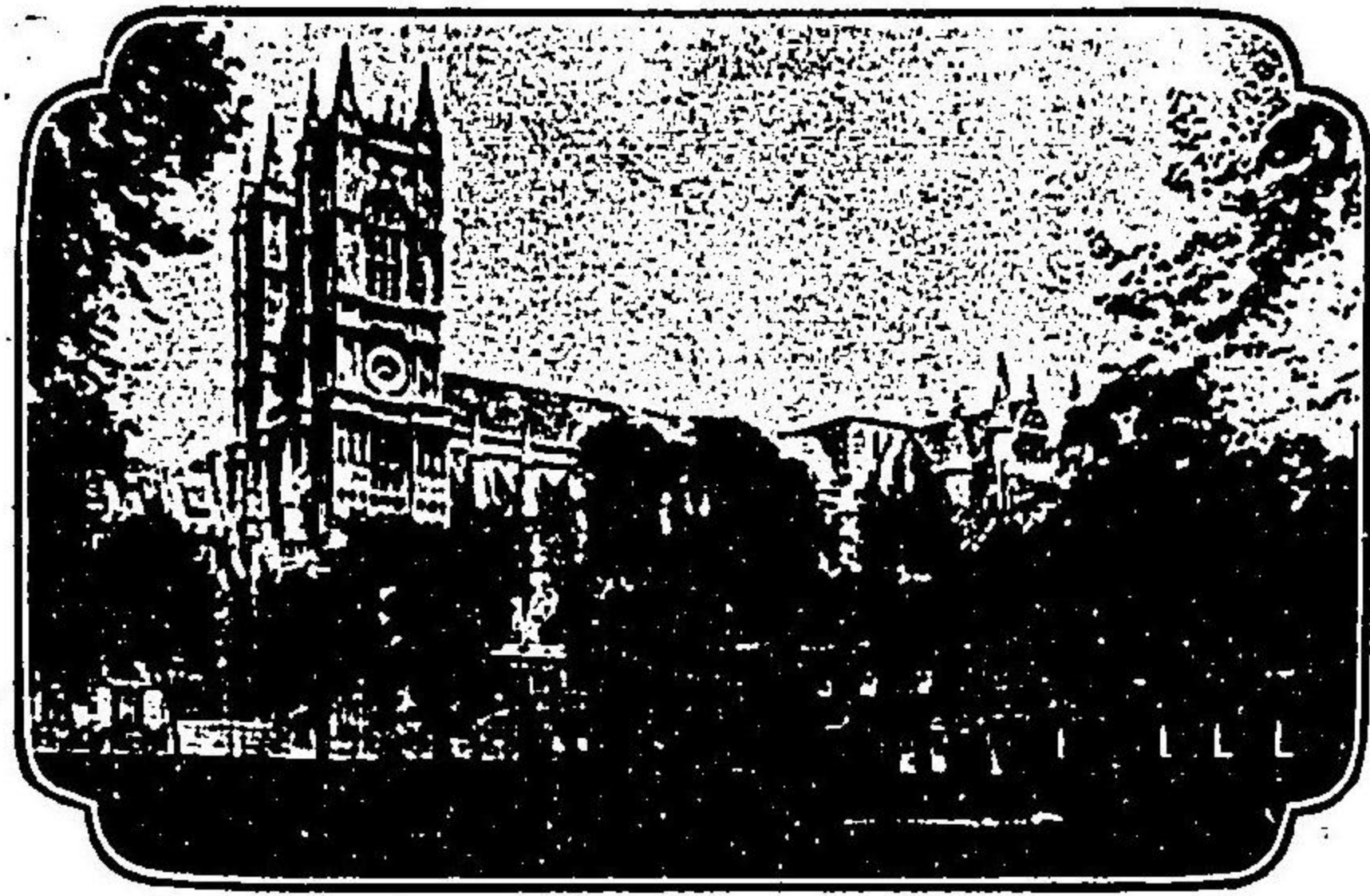
戴冠式といふ聲は、餘程前から世界を賑はしたので、鳳翬通過の道筋に築かれたる棧敷は、早く賣切れるといふ話は、余が伊太利や佛蘭西を旅行してゐる間から聞かえてゐた。察する所、學校などは、式日の一週間も前から、或は休みになるであらう。その月六月一ばいは、殆ど大騒ぎに終るであらうとは、誰でも想像する所であつた。戴冠式は迫つて來た。倫敦の町は、棧敷や、花飾りや、縁門や、作り物で満たされて來た。學校は依然として授業してゐる。商業も毫も平日に異ならない。式の前日になつた。學校は矢張授業を繼續してゐる。

式の前夜は、安眠する人が鮮い。なぜならば、翌朝八時までには拜觀の場所へ行かなければ、門が閉ざされて、倫敦に入ることを得ないからである。この門は、平素無いものであるけれども、大混雜と危険とを豫防せんが爲に臨

時に町の四方に出來たので、此日は、倫敦變じて、我徳川時代の江戸となつたのである。さていよ／＼二十二日の朝がほんのりと明けると、人は皆拜觀に出かけた様子である。馬車や自動車は、皆數日前より約束があるとして應じない。どうせ地下鐵道も、乗合自動車も、満員であらうと思つて、停車場にいつて見ると、案外にすいてゐて、何等の混雜もない。

併し門を這入ると、さすがに人馬は充填してゐる。道は馬車と自動車とがぎっしりつゞいて、立錐の地もない。兩側の人道は、人の山を築いて、殆ど進み得ない。多くの時間を費した後に、漸くにしてベルメル街の棧敷に到着した。余の周圍には、約四百人の看客があつて、二階の棧敷にも、亦それだけの看客がある。向ふ側も、兩隣りも、窓といふ窓、棧敷とふ棧敷には、人の顔が並んでゐる。

兩陛下は、十時半に Buckingham 宮を出られ、ホワイト・ホールから Parliament 街を通つて、ウェストミンスター・アベイの式場に赴かれ、歸路ベル



(イペアリスンミトスエウ)

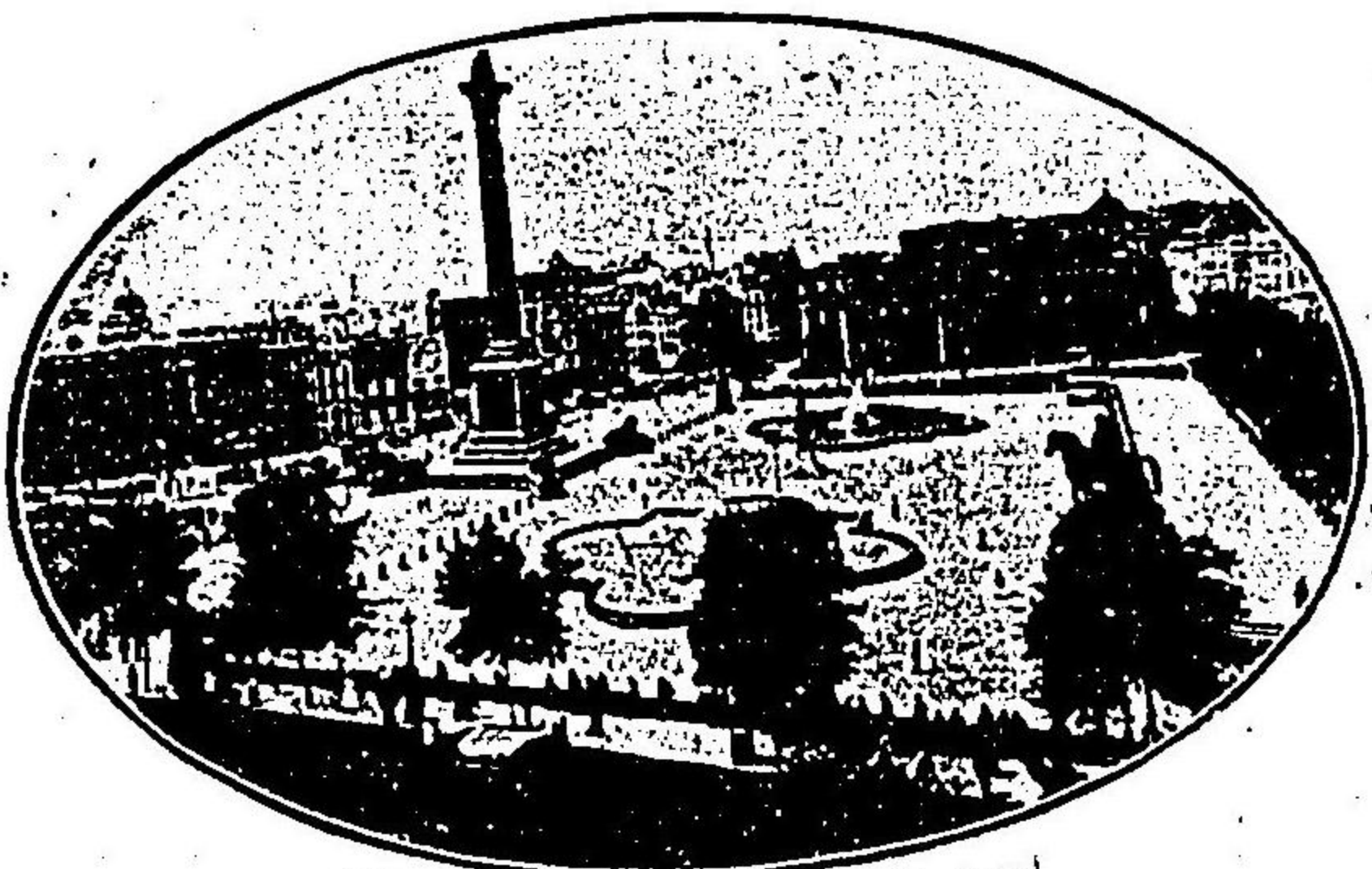
メル街からピカチリィを経て、其の宮殿に入らるのであるから、今我々の居るペルメル街を通られるのは、午後の三時頃にもなるであらう。其の間、是等の多くの人々は、棧敷で待つてゐるのであるが、毫も押すな、どうするの喧騒はない。只時々、立つて内へ這入つて行く者もあるから、便所に行くと行くのかと思つてゐたが、己に十二時にもなるから、余も立つて内の食堂へ這入らうとした。豈圖らんや、二つの食堂は、人を以て埋まつてゐる。無論座することは出来ず、皆立食をやつてゐる。こゝが若し公共的修養の足りない國民であつたならば、餓鬼道に落ちた様な光景となつて、喧嘩の一つも始まる所である。然るに、各自ら抑制して、

敢て人を煩はさないやうに務めてゐるから、互に小癢に障ることもなく、全體が都合よく行はれてゐる。自ら支配するに馴れたる風は、學びたいものである。

雨は降らんとして又止んだ。やがて兩陛下は通行せられる。其の前後左右の行列の花々しさは、茲にはなくてはなからう。世界各国の代表者等はいふまでもなく、さすがは太陽の没する所がないとまでいはるゝだけの領地を有せることとして、諸方の領地からの人々の千様萬態なるを見ても、一は以て驚かれ、一は以て羨まれる。行列は別れて三段となつてゐたが、風聲が前を通ると、群集は帽子を掲げハンケチを振つて、敬祝の意を表す。我が日本であつたなら、臣民は感涙にむせんで、肅々として頭も掻き得ぬ所であるが、そこは又國風が多少違つてゐる。風聲のすぐ後方に、肥馬に跨つてゆく人氣者のキツチナゝ將軍は、だいぶん喝采をあびせかけられた。我々のうれしかつたのは、日本の御名代の宮殿下が、多くの注意を引かせ給ひ、

乃木東郷兩大將が、亦鮮からぬ喝采を受けたことである。

御通行が済むと、人々席を立つて歸らうとする。來る時には、人々様子を見計らつて、成るべく混雑しないやうに來たが、歸る時は一時になるから、一層の混雑である。漸く人の波に漂ひながら、ツラファルガルの辻まで出ることを得た。併し何等の危険もなく、又巡查が、人馬の通行を能く支配するには、感心であつた。



(辻のルガルアラツト)

一四 倫敦に於ける東洋研究

英國の學風は從來德育を主として、智育を其の次にしてゐた。然るに、近

年獨逸風が漸々勢力を得、現にロンドン大學は、寧ろ獨逸の學風に倣ふを以て主旨とするものである。さすが保守的の牛津大學の如きも、最近此の風に動かされむとしつゝある有様であるから、將來は、多少英國學風の變遷を見るであらうと思はれる。

東洋學の研究に於ても、從來學究的に研鑽するといふよりも、常識的に應用する方に長所を發揮して來たのである。何分英國は、方々に領地を持つてゐるから、従て東洋語を授くることも古く、又之を學ぶ者も、他國よりは多い筈であるが、主として之を實用に供するのである。そこで牛津大學へいつて見ても、梵語支那語は教へてゐるが、支那の歴史は授けてゐない。但し日本の事は、日英同盟や日露戦争などで、大に注意を喚起した結果、此の大學に於ても、日本史の概要を授くることとなつて、一九一〇年から向ふ三箇年、試験的に其の講義を開始した。其の講師に選ばれた人は、ガピンスといつて、久しく日本や朝鮮に外交官として駐在してゐた人で、余に於ても舊知で

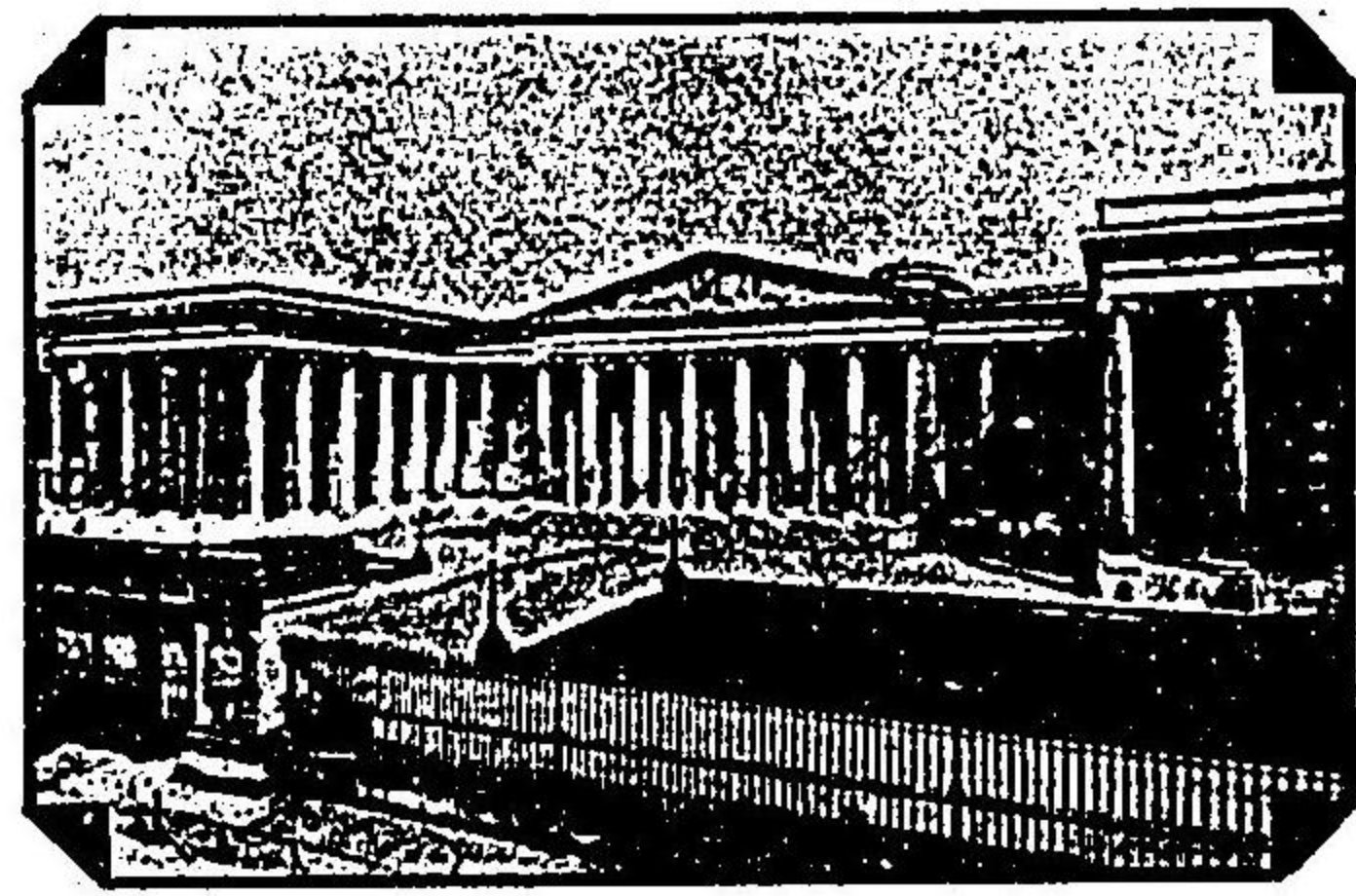
あるから、一日氏を訪ふたら、氏は大に喜んで、延て其の講筵に列せしめた。講筵は日本の進歩といふ題で、余のいつた日は、日本の封建制度より立憲政體の樹立までといふ講義であつたが、聴講生は多く婦人であつた。

劔橋大學に於ては、本年度一九一一年より一九一二までの講義目録の中に、東洋學に關係のあるものをいつて見ると、(一)東洋研究部(二)外務學生部(三)印度文官部の三部があつて、東洋研究部に於ては、ヒブリーニ語、アラビヤ語、ペルシヤ語、支那語、梵語、バビロン年代學、シリヤ文書及作文、回教史、土耳其語、コプト語等を授ける。外務學生部に於ては、アラビヤ語、土耳其語、ペルシヤ語、露語等を授ける。印度文官部に於ては、印度法典、印度史、梵語、ヒンドスターニ、ベンガリ、マラーチ、緬甸語、タミル語、回教法典等を授けるのである。ロンドン大學では、文科大學に於て、アラビヤ語、緬甸語、支那語、ヒブリーニ語、ヒンドスターニ、マラーチ、タミル語、土耳其語、梵語、バリー語、印度史、印度法典、印度哲學、馬來語、ペルシヤ語、アラメイク語、アッシリヤ學、埃及學等の講

義があるのみならず、日本語の講座まで設けられて、ロングフィールド教授の名さへ、そこに見えてある。併し同大學にいつて聞いて見ると、實際まだ日本語は授けてゐないのであつた。但し近き將來に於て、ロンドンに一大東洋研究所を設立して、こゝでは日本語をも教へることにするさうである。

ロンドン大學本部の棟續きに、インピリアル・インスチテュートといふ所がある。是は、主として殖民地研究の爲に設けられたもので、其の中には、英國の各殖民地及び印度の物産陳列所もあり、殖民地よりの來客會議所もあり、又英國婦人移民會や、殖民地看護婦會や、亞弗利加會なども、其の中に事務所を置いてゐる。

英國人は、前にいふ如く、自力を以て事をする風があるから、學校の教授以外に、私に東洋の研究をしてゐる人も鮮くなからうが、餘りに著はれてゐない。さて又東洋研究の材料の集つてゐる處についていへば、第一に大英博物館を數へなければならぬ。此の博物館も、亦已に世界に著名であるから、

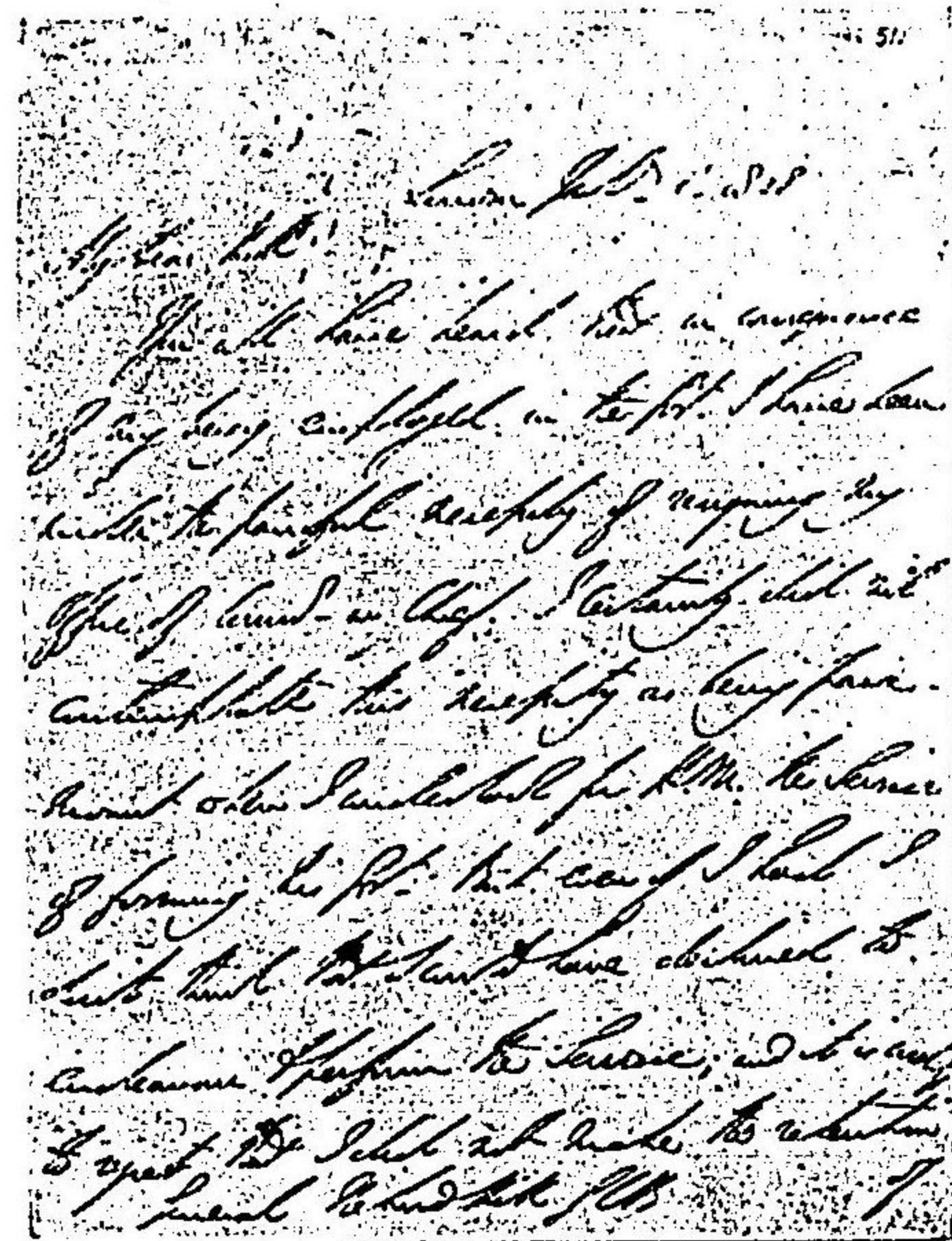


(大英博物館)

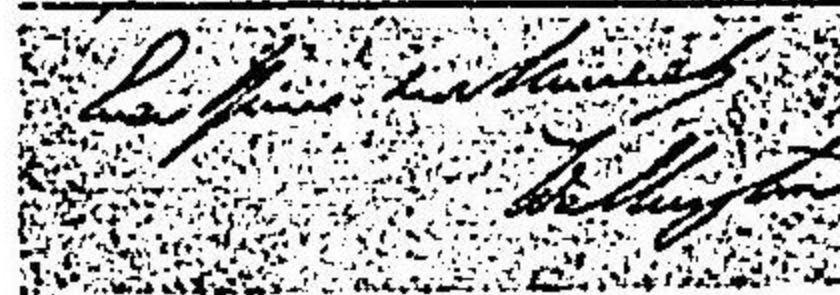
日本の繪畫も随分あつて、一の特別室を成してゐるのみならず、未だ陳列に至らざる

内部の説明を省略して、唯東洋に關係あるもの、一斑を述べて見よう。

此の博物館は、あらゆる方面のものを網羅して、世界の粹を蒐めんと擬するものであるから、支那



(リウニントン筆蹟)



(大英博物館の筆蹟の一)

ものも多くある。書籍にしても、支那や日本のものが、書棚に溢れてゐて、其の目録は、各一部の冊子をなしてゐる。朝鮮の書籍はと窺がつて見ると、僅に十部ばかり、二階の一隅に押し込められてあつたが、其實、單に是れのみならず、止まらないのであるけれども、他は皆支那の書籍の中に混入されてある。

掛りの學者のいふには、何れ朝鮮本を別にする考であるとのこと。さてそれが、凡そどれ位あるものかと思つて、目録に當つて見ると、増補文献備考は余が朝鮮に居た時見附け出したのであつたが、某外人が、此の博物館に送つたことを思ひ出して、懐舊の情が起つた、喪禮備考、歴史提綱、國朝寶鑑、朝野僉載、二倫行實等の書籍はあるが、三國史記もなければ、燃藜記述もない。

それからヴィクトリアアルバート博物館へいつて見ると、日本の陶磁器、漆器、根付け、根付けは西洋人が好んで之を集め、英佛獨蘭の諸國に來てゐるものだけでも、非常な多數で、やがては、日本に其の跡を絶つに至るであらうと思はれる。燈籠、大佛などよりして、はては大なる五重塔の模在まで陳列し

である。この五重の塔は、故大久保利通氏の寄贈にかゝれるものである。以上は、倫敦に於ける東洋學の研究及び其の材料の大要を述べたに過ぎないが、要するに、大體に於て實用的の傾向が勝つてゐる様に感ぜられるのみならず、東洋の歴史及び其の慣習の研究に至つては、まだ隔靴搔痒の感あるを免れない。

一五 英國の普通教育

英國に於ては、五歳より就學して、十二歳まで義務教育になつて居る所もあり、十四歳まで義務教育になつて居る所もある。夫から中等教育が五年或は四年である。大學の修業年限は區々になつて居て、三年もあり四年もあり五年もある。さて是等の諸學校の内、歴史もあり成績も良く、生徒の集まる學校と云へば、多くは私立であつて、其の學風は言ふ迄もなく紳士を養成するといふ點に歸着して居る。けれども最近に於ては、獨逸の學風が

段々英國にも流行して來て、實際的に學術を研究するといふ方向に進まんとしつゝあることは前にいふ通りで、此の世紀の後半に至らば、英國の學風が大に變化するであらうと思はれる。さて先づ中等學校のことから、見た所の一斑をお話しよう。

ハロー學校 此學校は、倫敦から汽車で二十分計りの距離にあつて、此學校の爲に町が出来て居ると云うても差支ないのである。従つて校舎の位置は頗る良く、眺望は絶佳である。校舎は、追々に建てられた爲に、棟が別々になつて、或は美術學校或は物理學校、或は圖書館と云ふ風に別れて居る。圖書館にも、學生の圖書館もあれば、一般の圖書館もあり、又校長の校宅にも、頗る多くの圖書が集めてある。而して此學校は、約三百年前に創立されたもので、最も古い校舎の如きは、頗る古色を帯びて居る。其内部を視れば、昔の儘の机腰掛が、古びたまゝに残つて居り、又壁間には昔此學校に於て學んだ學生の姓名が刻附けられてある。其學生中から、英國で最も有名なる政

治家文學家などが輩出したに依つて、後には其彫刻が尊重すべきものとなつて、今日に於ては、學校から卒業生の名を木に刻して、之を掲げることによつて變つて來たのである。さて随分多くの學生の中には、良くない者もあるのであるが、校長は此最も古い建築物の中に之を呼寄せ、斯の如き由緒ある學校の恥辱を顧みないかと云ふ風に訓戒すると、如何なる不良な者と雖も、其の過ちを悔いて、改めざるものは尠ないと云ふ。歴史ある古建物を訓戒の目的に使用することは、頗る趣味あることと思ふ。此學校は、修業年限五箇年で、一の學年は、各二組から成つて居る。學科課程は、近世科と古典科の二つに別れ、近世科で授くる科目は、宗教、羅典語、獨逸語、佛蘭西語、英語、歴史、地理、數學、幾何、理科、自然科學、圖畫又は唱歌、幾何、書法等である。此科は高等科四學級、初等科六學級で、授業時數は一週十六時間から二十八時間に達して居る。古典科の方の學科目は、宗教、羅典語、希臘語、佛蘭西語、獨逸語、英語、歴史、地理、數學、自然科學、圖畫又は唱歌で、此方は高等科五學級、初等科四學級と、

其下に又二學級ある。授業時數は二十二時間四分の一から二十五時間四分の一で、何れにせよ體操はない。併し科外の運動は頗る盛で、運動場の如きも實に立派である。尤も體操の教師が居つて、瑞典體操を課して居るのみならず、機械體操をも教へては居るが、之は隨意科であつて、生徒も、寔に尠い。學生の要する學資金は、年々百五十磅から百八十磅。中には二百磅位を要する學生もあるが、之を日本の金に換算すると千五百圓から二千圓迄掛かると云ふに至つては、頗る贅澤と云はなければならぬ。學生は常に燕尾服を着て、麥稈帽子を戴いて居る。夫れが制服であつて、實驗をする時の如きも、其儘で之を行つて居るなどは、餘り儀式的に見えて、不便であると思はれる。然らば教室内に於ける生徒の業を受けて居る状態は、定めし躑躅正しいものであらうと思ふと、強ちさうではなくして、随分如何と思はれる者もある。併し其氣風を通じて見れば、頗る良いやうで、中には校長の背後から來る生徒で、校長に面をあはさないのに、帽を脱して禮をして行くやうな

こともある。我國の昔に能く言つた如く、弟子は三尺距つて師の影を踏まないといふやうな實例を、外國に於て見ることが得たのは、甚だ麗はしく且つ耻かしく思つた。又各組には、生徒中より組長を任命してあるが、此の組長は、遊戯運動に於ても、義勇に滿ち義侠に富み、紳士的美徳を發揮して、チャンピオンとなり、學問の成績に於ても、良好なる者が多いのである。従つて其權力も中々強い。或は組の中の悪い生徒を、或程度まで罰する事を許してある。其の替りに又、組の儀表となつて、總てを代表する丈の實力がなくてはならぬのである。夫から學校の中には、寺院の設けがあつて、毎朝祈禱をする。獨逸に於ては、學生がカレッジからカレッジに移り行く風が、隨分行はれて居るさうであるが、英國に於ては、轉學の風が殆どない。故にハロー學校に學ぶ者は、始終ハローに居るのであるから、自然校風に感化されるのである。斯の如き状態で、學生の監督も頗る行届いて居る。即ち生徒の多くは、教師の家に預けられて、始めから美風を養はしめん事を努めて居

る。現に校長の家にも、六十人計りの生徒が居り、其他の教員の家にも二十人三十人と預つて居る。學生の部屋を見ると、中々良く整頓されてあつて、殊に校長の家では、恰も晝食に際して、食堂に案内されたが、六十人の生徒が一室に集つて居る上に、校長及び夫人家族も俱に此處に列席して、宛然一家族の如く食事をするのであつた。殊に校長夫人は、餘程しツかりした人で、能く全體を引廻してゐるやうに感ぜられた。

イートン學校 此學校の所在地は、倫敦から汽車で約一時間の距離にあつて、其處の料理店では、學生に一切酒を賣らない。是はイートンばかりでなく、他のカレッジの所在地でも殆ど同様であるが、酒氣がないから、之を乾いた町ドライタウンと稱して居る。此學校も其の淵源頗る古く、校舎は古色を帯びて居るが、聞く所に據れば、校舎よりは人物に金を多く費して居ると云ふことである。學生の制服は、モーニングコートに絹帽で、是亦紳士の躰を養はんとして居ることが直に判る。併し實際には十分躰が行互つて居るとも見え

兼ねる點もある。教室に入つて見ても比較的亂雑である。但し實驗室の如きは頗る良く、學生の實驗も行届いて居るやうに見えた。教授の有様は、教科書を悉く用ゐると云ふ譯ではなく、話が多いやうである。或時間に又機械體操を觀たが、矢張感服する程でもなく、生徒數も誠に少なかつた。併し體育はなか／＼盛である。珍らしく思つたのは、此學校で柔術を行つて居たことであるが、ほんの僅かの人に過ぎなかつた。生徒の數は一千以上で、殆ど皆寄宿舎に居る。それが我國の寄宿舎の如く、一つに纏まつて居るのではなく、普通の家が二十六あつて、其一つの家に約四十人を定員として寄宿させて居るので、是れに一人の監督が附いて、其の下に生徒の中から長を選んで之を助けしめる。其監督の家族は、家續きの別の棟に住んで居るやうになつて居る。余の此學校を參觀した時には、英國文部省の紹介で、豫め日を定めてあつたにも係はらず、校長は、ちよつと顔を見せたばかりで、ハローと大差があつたのみならず、案内もございいて、我々の特に望を囑して

行つた參觀の主旨が、十分達せられなかつた。要するに余等は、此の學校では失望した。

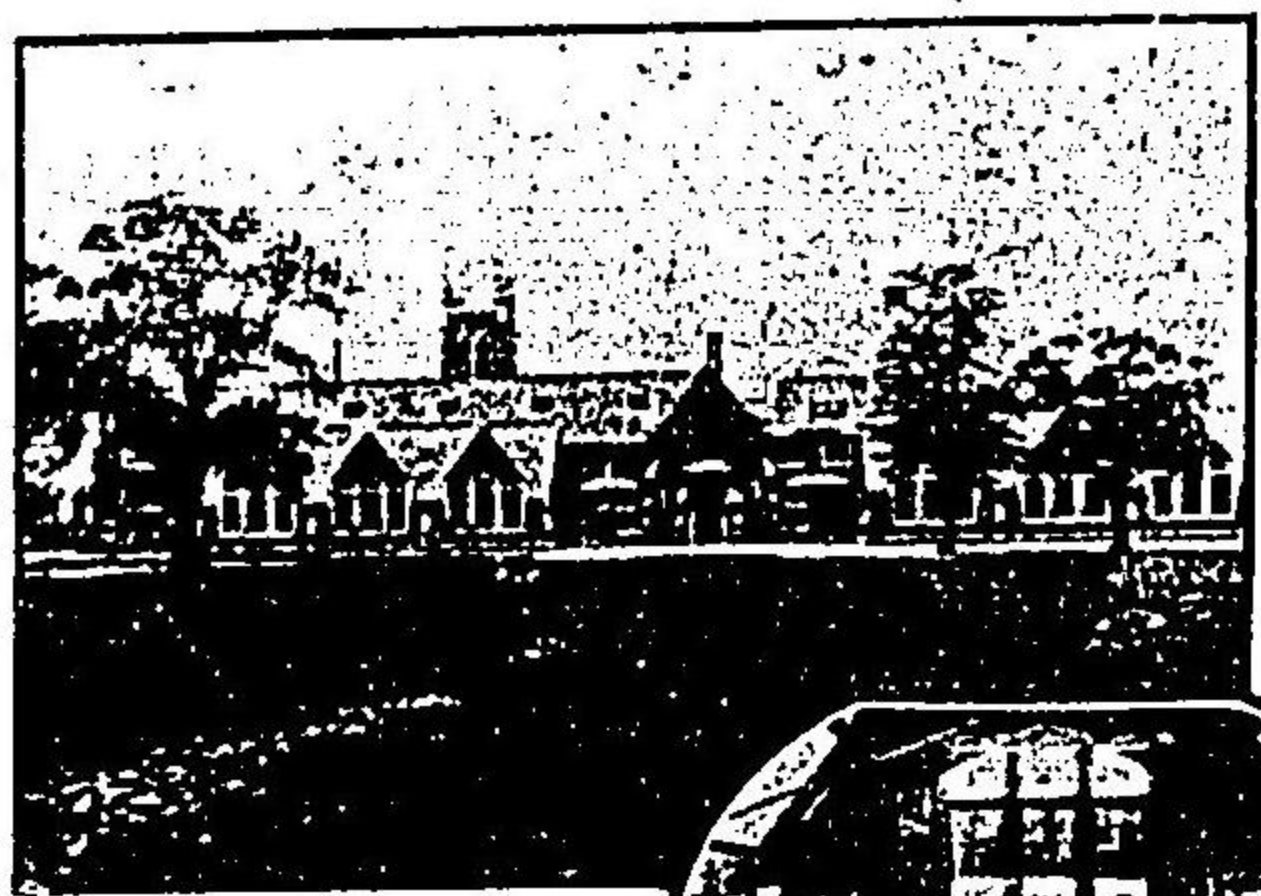
セント・ポール學校 此の學校は修業年限四箇年で、古典科、近世科(此内に兵事科を含む)及び數學科の三部に分れて居る。學科課程の如きも、學生の好みに任せて種々に込入つて居るのである。生徒は五百七十人程居るが、餘り富者の家庭からは來てゐないさうで、月謝も従つて安く、一年二十五磅に過ぎない。運動場は立派で、水泳場の設もある。其他の状態については特に取立て、申述ぶることはない。

ゴールドスミス學校 此の學校は倫敦大學の一つに數へられてゐる師範學校で、生徒の數は五百名、其内に男女があつて、是れは別の組にしてある。一學級の定員は二十五人となつて居る。水泳場の設けもある。講堂は甚だ廣く、正面には立派なオルガンが造付けてあつた。此の學校に入る生徒は年齢滿十八歳以上で、修業年限は二箇年である。寄宿舎は別に無いけれ

ども、公認寄宿といふものが設けてある。生徒の嫉に至つては、校長に對する禮の如きも、ハロー學校のやうに良く行はれて居らないが、女生徒の氣風が、何となく控へ目で温順な所、頗る日本に似て居る。教室に入つて見ると、生徒の發表は餘り多くない。寧ろ教師の話が多いやうである。女子の方は聲が甚だ低くて、中には良く聞き取り得ない者もあつた。是れも我國の女子の状態に近いと思はれた。授業の批評は中々良く行はれ、外國人が參觀に來たといふので、生徒の方は稍發表を遠慮した氣味があつたけれども、中には随分意見を述べた者もあつた。食事は、女生徒一同が濟ました後に、男生徒一同が机に向ふので、正面の高い所には、監督が居て、一所に食事をすゝるやうになつてゐる。概して男女が相別れることになつて居るのは、頗る我國に類してゐるのである。

フィットギフト中學校 校長は頗る聡りした人物で、己を以て衆生を率ゐると云ふ色が現はれて居た。規則書を請求して見ると、煩雜なことは印

刷してない。一體英國の人は、法を信ずるよりも人を信ずるの風がある。法が有つても、人が尊重されて居なければ、役に立たぬといふことであつた



(校學中トフギトツキフ)



(室驗實學化の徒生)

が、頗る味ふべきことと思つた。生徒の數は三百人、其他豫備校に千五百人程居つて、豫備校は二箇年、中學校は六箇年の修業年限である。中學校には八つの學級があつて、上級生の中から組長を選んで、世話をさせて居る。學科の中で物理、歴史及び體操などを見たが、物理の實驗は、矢張生徒が之を行ふ。歴史の時間は、教師の講義が多くて、日本の如く教科書を一方に置きながら講義の筆記をさせてゐた。

體操は下級に課せられ、瑞典體操をやつて居たが、中々立派に見えた。さて又教室の中には、教壇の傍に書棚があつて、受持教員の參考書が入れてある。

恰も教室は、教員の書齋の如くに取扱つて居る。卒業生と學校との關係に就ては何等見るべきものもない。通信簿は一學期に一回家庭に送るけれども、悪い生徒には、一箇月に一度通信することになつてゐる。家庭との連絡は、此の外、學校の展覽會などに、父兄を呼ぶ位に過ぎない。

次に初等教育に就て二三小學校の様子を述べて見よう。

倫敦ブルームスレー町男子小學校 此の學校では、五歳から兒童を收容して、十四歳まで、義務教育を施して居るが、尙十五歳迄に延長したいといつてゐた。佛國に於ては、小學校の校長室の如き、随分堂々たるものが多くあつたが、倫敦の小學校には、さるものは尠い。此學校の如きも極めて簡單なもので、運動場でも、佛國の如く、諸所に樹木を植えてあるものはない。水泳場の如きも、數校合同して之を有するに過ぎない。廊下階段なども餘り廣くない。若し我國ならば、頗る混雜を見るであらうと思ふけれども、流石は英國の兒童丈けあつて、左程混雜もしない。一組の生徒は、矢張四十人前後

で、教師の生徒に對する態度は、中々嚴重であるし、兒童の行儀も、佛國より正しく見えた。併し佛國の兒童の如く、人懐しくはない。精勤生に賞牌を與へて之を獎勵することも、我國と良く似て居る。教室のうちで、劣等兒と優等兒との區別はして居らぬ。如何はしい者は、直に席を轉せしめて、列の前に起たしむることは頻りにやつて居る。教授が問答體であることは言ふ迄もなく、従つて兒童の發表も頗る良いやうであつたが、随分六かしい事を教へて居る。我國に於て、近來硬教育の聲があるが、此の硬教育の實際を、こゝに見るが如き感を起した。上級生に我國の事を問うて見ると、良く知つて居て、中には教師から、英國を發して日本に至るまでの港の名を聞いたが大分良く知つて居つた。是れは我國の如く、全然教科書に依るといふのでなくして、種々の問を發して、知識の應用を圖るにもよると思はれる。教室には、教授に關係のない圖なども多く掲げて、却つて教授に要する地圖などは、比較的に足りぬかの感を起させた。兎に角我國の如く、教場が特更め

いて居ぬやうであるのは、教室を教師の自修室か、又は其の家庭の如く取扱ふ關係からでもあらうと思ふ。

フリート町小學校 此の學校に於ても、矢張教室が各教師の書齋の如き觀を爲すことが特に著しい。男女兒童は、同室に居るものと雖も、兩側に別れて、一方は男子、一方は女子と云ふ風になつて居る。各室皆電燈の設けがあるが、黒板は小に過ぐるやうに思はれた。兒童は約七百人。而して最上の二學年は二つに別れて、一は普通の學科を授け、一は商業科を授けるので、冬期は此處に夜學校をも開く。水泳の設けなく、他と合同すること亦前の如くて、運動場も狭く、樹木等もない。訓育の状態を見るに、朝禮の如きも、祈禱の如きもない。兒童が概して清潔であるのは、畢竟家庭に於て、一般に清潔の風が養はれて居る結果であらうと思はれた。父兄の會の如きものはないが、試験の成績は勿論父兄に通知する。教授は矢張問答を以て始まり、問答を以て終るが、女子の發表は甚だ弱く思はれた。教師の態度は頗る落

着いて、授業に馴れてゐた。十一歳になると、佛語を教へるのであるが、男生には又木工を課し、女子には洗濯を課して居る。

ウエスト・エンド小學校 學校内に幼稚園があつて、其の兒童が百五十人、本校の兒童が三百二十人居る。出席歩合は九四乃至九三である。低能兒又は身心の發育不完全の兒童は、特種の學校へ送るのである。訓育の一般を見ると、此の學校は、創立後僅に五年、現に今漸く校風を作りつゝある際で、立派な型にはまつて居ると云ふ譯には往かないが、躰方には頗る注意して居て、外來の參觀人にも、生徒に禮をなさしめると云ふ有様であつた。通信簿は主として學業の成績を家庭に知らせるのであるが、體格検査は時々行つて、之をも父兄に知らせる。教授の方面に就ては、特に申述べるほどのこともないが、圖書は悉く寫生をやらせてゐた。學校の屋根の上には屋外教授の級も設けられてあつた。

コレット・コート小學校 此の學校は、前に述べたセント・ポール學校の豫

備校とも云ふべき小學校で、七歳から児童を收容して、大抵十四歳に至る。児童數約三百六十人、寄宿舎の設けもある。一箇年の授業料は二十一磅で、安い方である。寄宿舎中の自修室は、一の大なる教室の如くなつてゐて、皆此處に集つて勉強する。食堂へは、各教師が出て行つて、生徒の間に並んで食事をしながら躑躅を教へる。又運動場でも、教師が児童と共に遊戯をして居る間に、訓練を施すのである。教授の有様を見るに、教室内で、児童に陣を作らせて業を授けて居るのもあつて、我國の如く一齊に極つてゐない。一學級の児童は大抵二十人内外で、上級生には佛蘭西語や羅典語などを教へて居る。其他に就ては、他の學校と大差はなかつた。

一六 繁遁宮

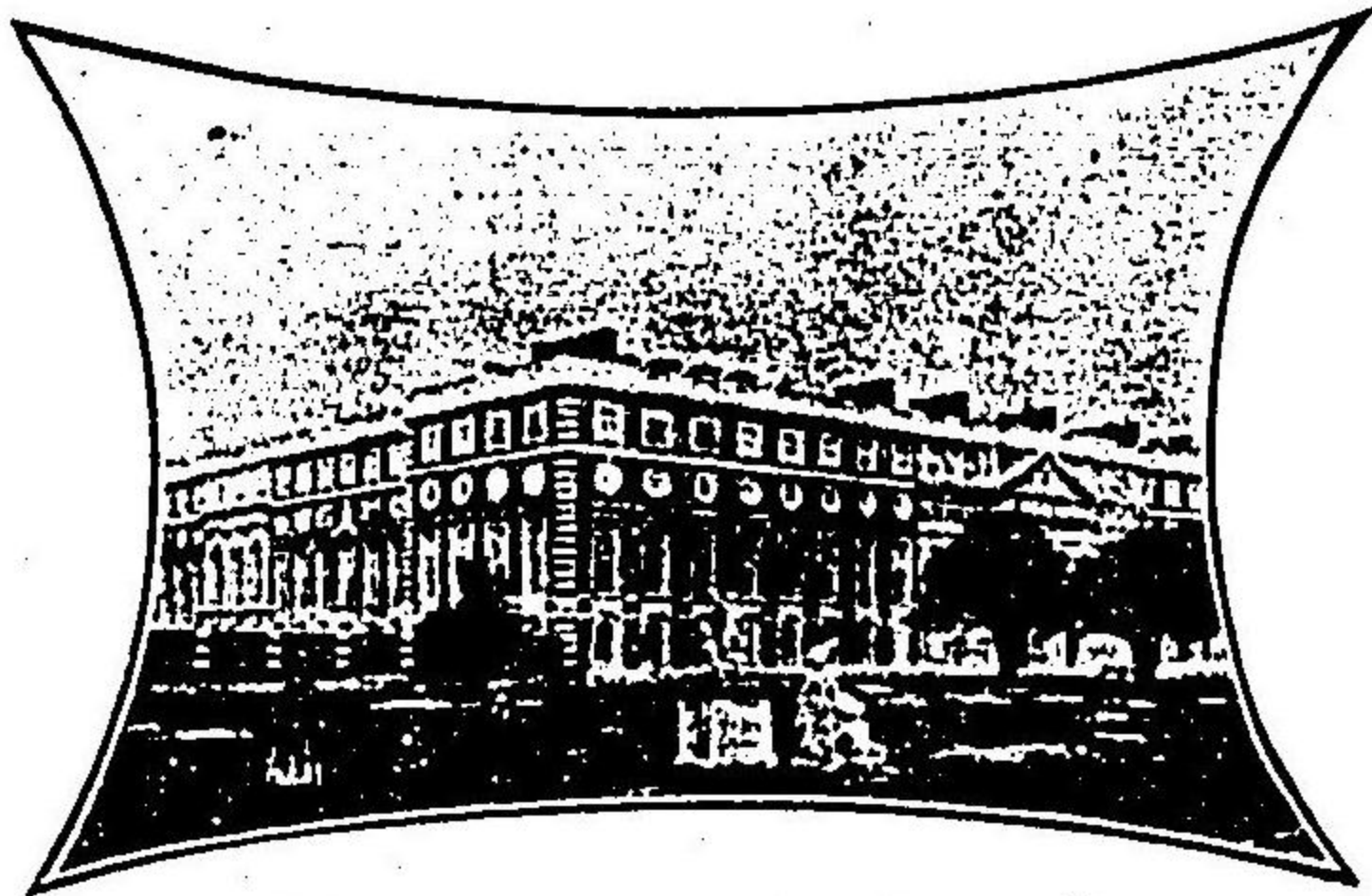
倫敦で色々の所を見たが、未だハンプトン宮に及ぶ絶景はない。繁遁宮は、テムス河の上流にあつて、其流に臨んで築かれたる宮殿である。水は

宮壁を繞つて彎曲して流れ、路は綠蔭を穿つて遠く坦かである。樹下を逍遙して河岸に出づれば、清風徐ろに襟懷を掠め、脚下の芳草、紅白燃ゆるばかりである。景致敢て雄壯といふにはあらねども、

眞に人をして樂土にあるの感あらしめる。

併し余は、唯景色のみにあこがれて、茲に之を紹介せんとするのではない。此の宮殿には、又それ相應の歴史を持つてゐるのである。もと此の宮殿は、一五一五年、カーヂナル、ウナルシの時に始めて建てられ、ウナルシは、其の全盛の間こゝに住んでゐて、ヘンリー八世の臨御もあり、又嘗て佛國大使及び其の一行の四百人を、兩三日に亘つて、

こゝで馳走したといふ話でも、其の大きさが想像せられるであらう。其の後ウナルシは、地を擧げて、之をヘンリー八世に献上し、王は更に之に手を



(宮トイコントブンハ)

入れられた。それからエドワード六世も、チャールズ一世も、チャールズ二世も、ウキリアム及びメリーも、茲に住んだことがあり、又クロムウェルの就職したのも此處なれば、詩人ポープの靈筆に上つた景も此處である。クイン・ヴェイクトリア以後、之を公衆に縦覧せしむることを許されて、今では英國史の一斑を語るべき、最も艶麗なる勝區となつてゐる。猶其の委細のことは、宮闕説明書に譲つて、こゝには大略のみをお話するのである。

以上極めて簡短に、繁通宮の歴史を語つたが、是が又一方に於て、誠によく英國觀光の標本を示すものといつてよいのである。何となれば、英人は、頗る其の古い國柄を誇りとする風が見える。そして、誰は此の家に住んでゐたのであるとか、某はこゝでどうしたとかいふことを語り傳へて、中々よく其處を保存してゐる。ちよつと倫敦の町を廻つて見ても、或はミルトンの墓、或はジョンソンの宿、或はチックケンスの舊居、或はネルソンやウェリントンの記念、或はセリダンやボスウェルの家など、なか／＼説明がつくのみならず、往々家の外部にそのことが書きあらはしてある。チャーター・ハウスにいつて見ても、是はノルフアルク侯の食堂であつたとか、あれはサツカレの何とかいふ謂れが、一々ついてゐて、此のチャーター・ハウスに關係のある名家の名まで、處々にほりつけてあるのである。過去の偉人を誇るのみでは、何の役にも立たないが、是等偉人の遺業に感奮して、蹶起した幾多の偉人がありとすれば、這般名區の保存は、爲政治家教育家の心を留むべきことである。

一七 海面より低い國

海面より低い國といへば、誰でも和蘭であることを知るであらう。海水は、無論堤防を以て之を防ぐのである。國內は總じて平地である。そこで治水の方法をよく講ぜなければ、雨が降ると、水がたまつて仕方がない。是に於て、溝渠を通ずるの術は、大に發達してゐる。實にカナルは、此の國を縦

後篇 西 洋

横に分割して、行きとどかざる所はない。舟にさへ乗れば、何れの處にも往還自由であると稱せられてゐる。爪哇のバタビヤやスーラバヤに巧みなるカナルの出来てゐるのも、全くこの本國の經驗を應用したものであることが知れた。さて其の川、其の溝渠は、時と共に段々淺くなつて、往々水底が平地より高くなつてゐるものもある。この縦横貫通の水流は、灌漑にも使用せられ、交通にも使用せられることはいふまでもなく、猶其の外に、地所と地所との境界線となるのである。そして低い所から高い所へ水をあげなければならぬ場合に於ては、風車の力を用ゐる。それ故風車の多いことは、格別なものである。和蘭の景色といへば、多く風車を描すのも偶然でない。

斯の如き土地であるから、概して膏腴であつて、芋、麥、豆の類は出来ざるなく、殊に家畜類、馬、羊、豚などの飼養に適してゐる。又かゝる低い國であるから、獨逸方面から流れて来る川の河口を占めてゐて、就中ライン河の下流を受くるロッテルダム、の如きは、近年築港やドックの出来てから、最も商業上

重要な所となつて來た。將來獨逸と利害關係の起る方面も、此の邊であらうと思はれる。

國の面積は、一萬二千六百平方マイルに過ぎず、人口も僅に六百萬であるけれども、さすがに海外に活動し來つた國だけあつて、殖民地を有すること夥しい。東にあつては、東印度例のスマトラ、爪哇、マヅラ、ホルネオの大部、西部ニユーギニヤ等は、此の内であるが、西にあつては、西印度、キエラソアが是であるが、南にあつては、南米、スリナムの殖民地の如きと、なか／＼手の廣がつたもので、其の總ての人口は、四千萬と稱せられてゐる。屬領の人口が、本國の約六倍半とはいふに、外からは成るべく他國人に手を着けられない様にして、内政は餘り無理をしない方針を執つてゐるかの如くに見える。かくて昔から、和蘭人の排外心は、多少史家の批評にも上つたことがないではない。

一八 和蘭に於ける極東物

和蘭は早くより極東と交通し、殊に十六七世紀には、日本との貿易を獨占してゐた位であるから、極東物が随分多く此の國に集まつてゐる。其の一例をいへば、ライデンの人種博物館の如き是である。

ライデンは、首府の海牙から、十マイル北にある所で、海牙よりも遙に古い町であつて、學問も相應に振つたることは、ライデンジャーが電氣使用上の最も普通のものとなつてゐるのでも知られる。そこでこゝには、博物學に關する陳列所もあれば、古物學に關する博物館もあるが、余輩には、人種博物館ほど趣味のあるものはない。何となれば、此の博物館には、アラビヤ、ベルン、安南、爪哇、特に日本及び支那のものを最も多く集めたる所があるからである。

假りに日本のもののみについていふも、浮世繪三千ほど集まつてゐると

いふが、甲冑、諸種の彫刻物、家屋風俗の模型、それから宗教に關する物や、日用の器具等に至るまで、新品古物、雜然として屋内に充滿してゐる。その内には、シーボルト氏が日本から持つて歸つた物も少くない。凡そ日本の物を、



(品掲老の館物博種人ンデイラ)

この様に多く集めた處は、世界に無からうと思はれる。日本文庫といふものさへあつて、日本の書籍が何くれとなく藏めてある。

余は大使館の紹介によつて、主任のヴィッシャー氏にあつたが、日本語にも精通して、懇切に案内してくれた。この文庫に、朝鮮の書籍も、四部朝鮮辭書一冊、朝鮮物語五冊、朝鮮圖一部、類合一冊ある。支那に關したる著書中に、支

那の宗教制度といふ六冊の大本があつたが、是はライデン大學の支那語教授グロート氏の著述で、全部十二冊にする筈であるといふ。六十餘歳の老人の意氣感すべきものがある。

此のライデン大學では、支那語の外、馬來語をも教へてゐるが、是等は全く、東印度の殖民地に赴く子弟の爲にするのであらう。

又此の大學の圖書館にも、支那室日本室といふが特置されてある。併し書籍は、餘り多くはない。朝鮮の書籍はないが、朝鮮に關する西洋人の著書は、本館の方に十部あまりもある。日本との交通文書は、和蘭ほど多い處はない筈であるが、是れは此の博物館や、圖書館には無い。多くは海牙の殖民地古文



(種人ンデイラ)

(物哇瓜の館物博)

書館に保存されてあるのである。

アムステルダムの國立博物館にも、日本支那の陶器が多少集まつてゐる

が、又海牙の町は、づれの雅趣深き林間を過ぐ處に、一の離宮があつて、廣くはないけれども、中々綺麗で、其の中に又

日本室もあり、支那室もあつて、日本支那の物が少々置いてある。

此の離宮は、一六四七年に建てられたもので、一八九九年の第一回平和會議は、其の中



(種人ンデイラ)



(日本物一)

のオレンジ室で開かれたのである。

一九 平和會議と海牙府

平和會議の話が起つたから、少し其の來歴を述べて見ようと思ふ。此の平和會議は、歐洲の最強國の一を擇んで、そこで開くことは困難な事情があるからして、態と海牙へ持つていつたのであらうが、元來海牙そのものも、平和會議に因縁があつたのである。

六世紀ばかり以前のこと、當時の和蘭の大名等が、海岸から半マイル程の處に勝區を擇んで、こゝに獵場を設けた。此の園圃を繞る所のヘッジから、其の附近の村の名が起つた。是がハーグといふ名の濫觴である。其れより次第にこゝに住居する君も出來て、漸々に重要な處となつて來たのであるが、レイボナルトが和蘭王たるに及び、之に與ふるに町の資格を以てし、それから純然たる町となつて、遂に今日では、人口二十七万の首府とまでなつたのである。さて和蘭は、昔から幾多の小地方に分れてゐて、随分争ひも絶えなかつたが、共和政治になつた時代に、海牙に諸州の代表者を會して、會議を開いてゐた。是れ、此の都會が昔から平和會議の因縁を持つてゐると

いふ所以である。

一八九九年の第一回平和會議の外に、一八九三年、一八九四年、及び一九〇〇年に、海牙で萬國公法會議や、其他の諸會議が開かれ、一九〇七年には、第二回の平和會議が開かれた。此の時の會議は、最早林園宮のオレンジ室でなぐして、市中にある一古建築物中に開かれたのである。此の家も、敢て廣いことはなく、又美はしい處といふでもないが、世界の平和を議した所と思へば、此の家の價値の大なるを感ぜしめる。今又かの林園宮の北に、萬國仲裁法庭が建てられんとしてゐる。之に對してカーネギー氏は、百五十万弗の寄附をしたので、基石には氏の名を刻することとなつて、一九〇八年の六月に、其の基石を置くの式が行はれた。

かくの如き平和的事業に用をなす首府も、昔は随分殘酷な風もあつたので、今日残つてゐる牢獄のあとを見ても、人をして戰慄せしむるものがある。此の國で用ひた昔の刑具は、支那や日本の昔のものと、似てゐるのが鮮くな

い。つい此の項まで朝鮮に用ひられてゐた刑具に類するものさへある。洋の東西を問はず、何れの國も昔は同じ様なことをしたものである。餓死せしむる室が料理場の二階に設けてあるなど、至つては、随分意地の悪いことといはねばならぬ。

二〇 伯林雜景

伊太利に上陸して、佛國に赴き、英國に渡り、和蘭に越え、そして獨逸に來つて見ると、美術は、*おいく*と見劣りのせられる感がある。但し海牙のマウリツ博物館及びアムステルダムアムステルダムの國立博物館は、豫想外に良い物が多かつた。マウリツ博物館は、規模狭小であるけれども、繪畫はなかくよく選擇せられてゐる。レンブランや、ルーベンスや、ヴァンダイクや、ホルバインや、ロイスデールや、國寶とも思はれるものが少くない。ライクス博物館は、工業史の參考品、支那日本の陶器の集まつてゐることは前にもいつた通りが

頗る豊富であつて、而もレンブラン物や其の他和蘭物のよい繪畫もある。

伯林は何分新しい町であるから、敢て古美術に富んでゐるといふことは出來ない。併し何れの博物館にいつても、陳列の方法が誠に行きとゞいてゐることは、獨逸人の研究的精神を現はしてゐる。又古美術の原物は最早得難いから、其の模型を蒐集するに務めてあるが、古美術の觀念を得るには、是で澤山である。我國でも外國美術の粹を購ひ來るやうな費澤は出來ないから、せめては獨逸流に、是等の模型を集めるだけでも出來ればよいと思はれる。

古い美術品は上にいふ如き有様であるが、學術的の物や、新らしき研究物等の陳列に至つては、頗る獨逸風を發揮してゐる。例へば伯林の人種博物館へいつて見ると、東洋物の標本や、發見物まで、多く集まつてゐて、部長のミユラー氏は、いかなる國語にも通ぜる語學者と稱せられ、朝鮮語も少々出來るといふが、伯林で朝鮮語のわかる人といへば、此の博士のみである。又其の

下に、土耳其語を専門とせるルコック氏がゐるが、此の人は、中央亞細亞に二箇年半を費やし、吐蕃地方から、色々の珍物を持ち歸つて、今や其の陳列中である。又殖民博物館へいつて見ると、亞弗利加並に支那の一部に於ける、獨逸殖民地の實況及び産物等を示して、人の頭に入り易い様にこしらへてある。又ホーレンツォレルン博物館や、ツァイゲハウスにいつて見ると、普魯西亞勃興の徑路及び國民の誇りが、場内に溢れんばかりに發表されてある。ホーレンツォレルン博物館は、ホーレンツォレルン家の皇威を宣揚せんが爲に建てたものらしく、歴代帝王の室が別置せられて、そこに其の帝王一代の記念物が陳列してある。其の中で、特に感興を惹いたのは、(一)フレデリック大王時代の勤儉興國の意味のあらはれたる遺物、(二)フレデリック・アム一世の煙草會議の記念、是は此の王の時、酒も飲まず、婦女をも近づけずして、煙草のみを吹かして、會を催した記念として、其の時に用ひた煙管が多く保存されてあるのみならず、其の會議の繪畫が掛けてあるが、いかにも質

朴尙武の士氣が顯はれて、普魯西亞興國の因由を洞察するに足るのである。(三)普佛戰爭が、已に普國の大捷と定まつて、普國王ザイルヘルムが佛國のヴェルサイユ宮に於て、獨逸皇帝の位に即くの圖。(四)佛帝が、普佛戰爭宣戰の署名をした時に用ひた机、是は戰中佛國から持つて來たのである。(五)北清時變に、支那より罪を獨帝に謝した國畫、特に其の國畫捧呈の圖は、支那の人が見たならば、どんな感慨を起すであらうかと心配せられる位である。等である。それから又ツァイゲハウスの方にいつて見ると、是は我が東京の九段の遊就館に類するもので、武器や分捕物を多く陳列せる外に、ひと際目立つのは、普魯西亞人の最も誇りとする大戦捷の繪畫で、そゞろに人を

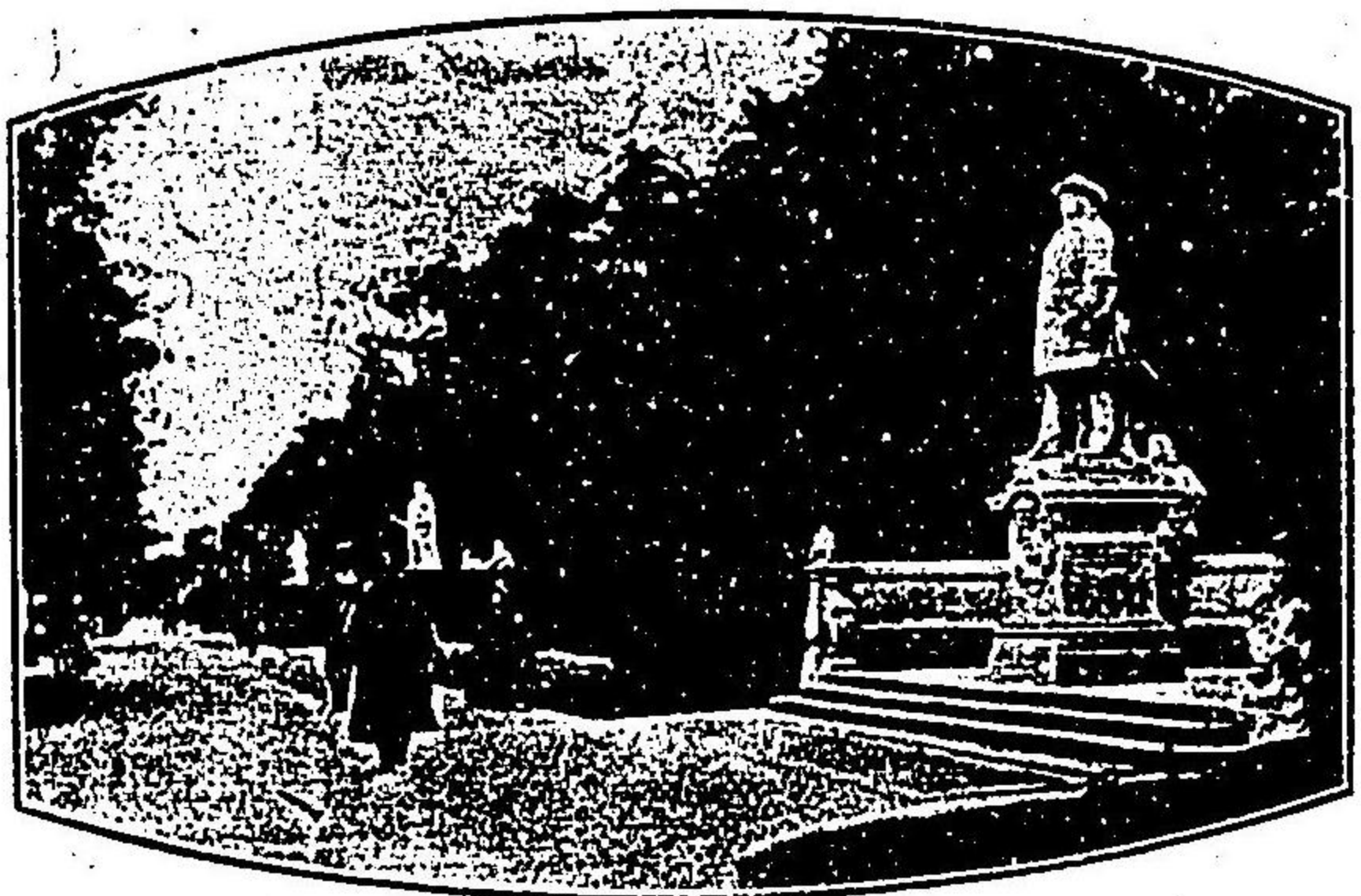


(議會草創の世—ムアライウキリアレフ)

(煙管の陳列)

して血湧くの想ひあらしめる。入場無料で多くの學校生徒を歓迎するが先生に率ゐられて、國自慢の説明を聞いてゐる小さい胸の中には、いかなる策勵が興へられるかと想像に堪へたる次第である。我國人も日清戦争、日露戦争の如き大戦争を経験しながら、未だ大戦争畫のないのは、甚だ耻かしいではないか。我國の畫家は厭ふべき裸體婦人や半可通の西洋風俗などを畫くに、あたら精力を費やさずして、偉大にして雄壯なる東洋の大戦争畫を畫くに、丹精を凝すならば、慥かに出藍の譽をなすべきのみならず、又次代の國民にも、大なる教訓を遺し得るであらう。

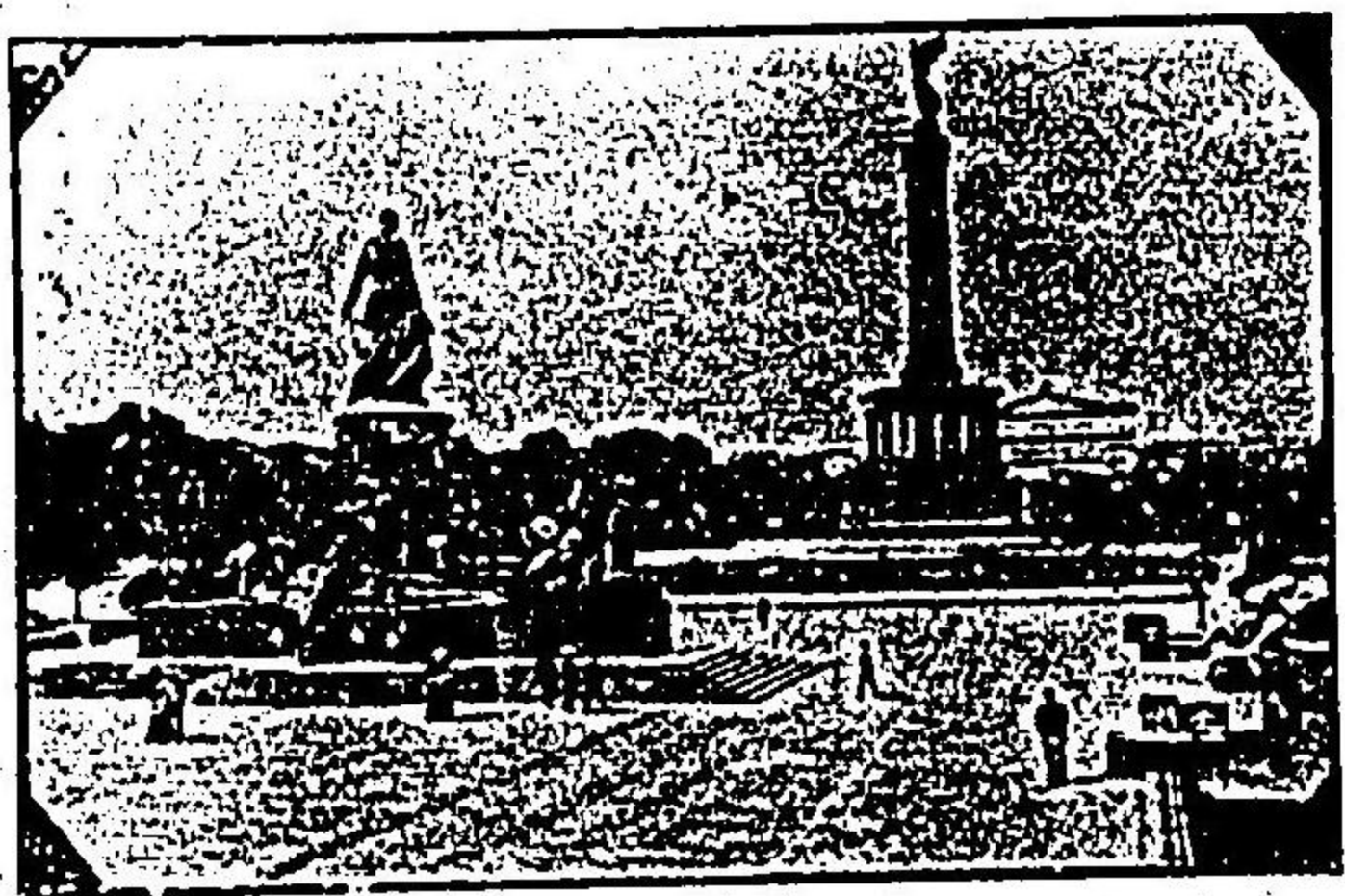
余は茲に普魯西亞の誇りといふことについて少し申述べたが、實に此の觀念は、伯林に充滿せるのみならず、其の最も明かに發現せられてある處が、即ち伯林雜景の中心をなしてゐる。試に杖を戰捷街道に曳かむ乎。車道馬道、並木及び人の散歩する道などが、綺麗に作られてある外に、其の兩側の綠林の前には、歴代帝王の像を並立させて、其の後ろには、各々其の當時に於



(戰捷街道)

ける一流の大家の像を置いてある。是等帝王の像は、ブランデンブルグの昔から、普魯西亞の時代に移り、更に獨逸帝國の近代に至るまでの、有名なる帝王を顯はし、それによつて、此の國の發展の誇るべき歴史を語るんとしてゐるのである。

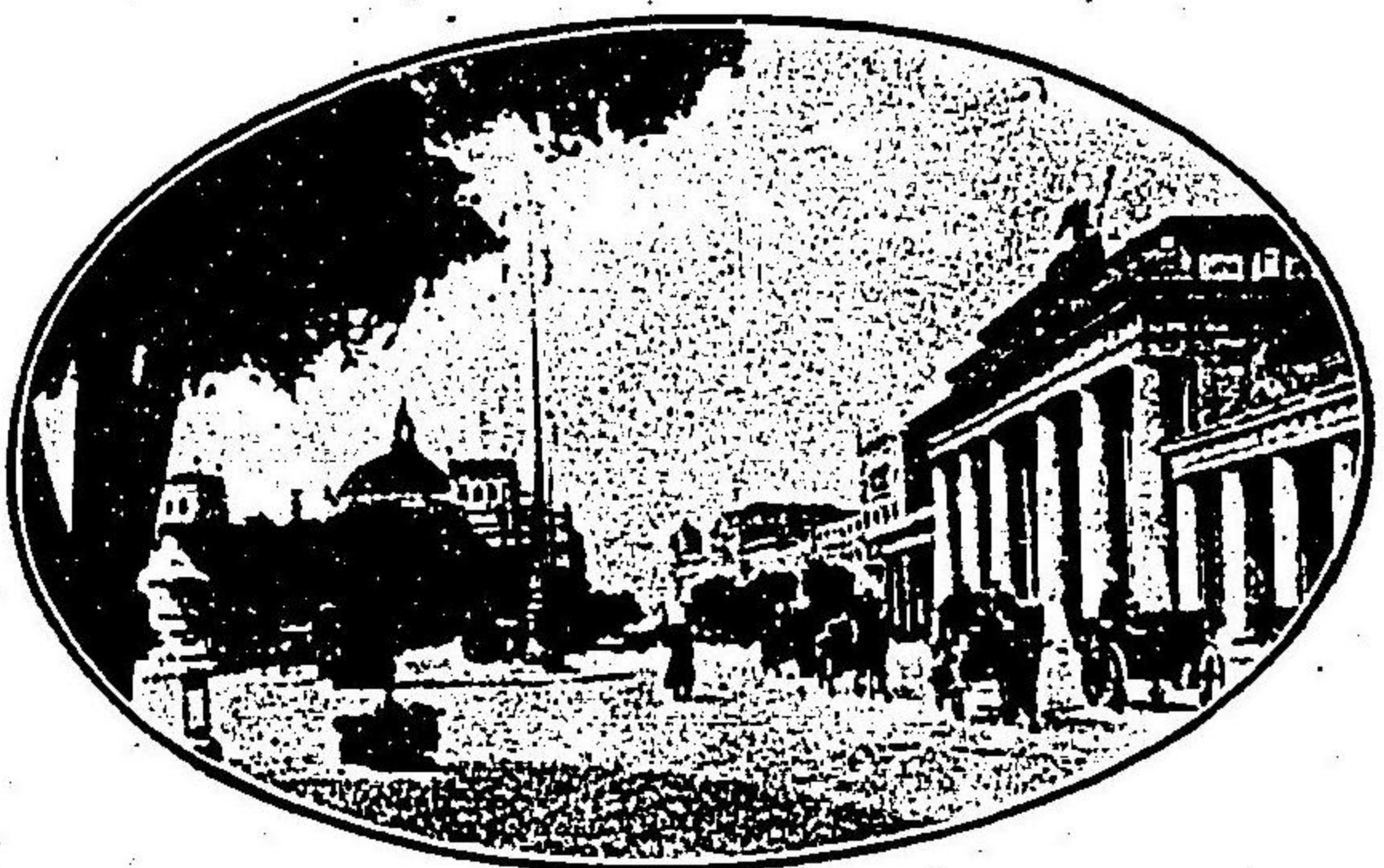
戰捷街道極まる處、圓塔高く半空に聳えて、其の頂上の女神は、長へに金色を雲表に輝かせてゐる。是れ即ち戰捷塔であつて、其の基石の四面には、シレス



(戰捷塔と比公の碑)

ウイヒ・ホルスタイン問題より始まつて、埃普戦争、普佛戦争から、巴里落城までの最も誇るべき戦争の彫刻がある。前面には大書して「國民の感謝」といふ。蓋し普魯西亞人の肉を躍らしむる處。其の彫刻のうち常に顯著に現はされてゐるのはビスマルク公で、其の次がモルトケ將軍である。番に彫刻中に其の姿を現はすばかりでなく、別に記念の像さへ立つてゐる。そして其のビ公の像の後方に、國會議事堂の巍然たるも、面白い對照である。

議事堂から少し進んで、伯林滿都の繁榮を集むる、ウンテル・デン・リンデンの町へゆく入口に、ブランデンブルグ門といふがある。此の門の上に、活躍するが如き、女



(む望を會園りよ門アルブテンラフ)



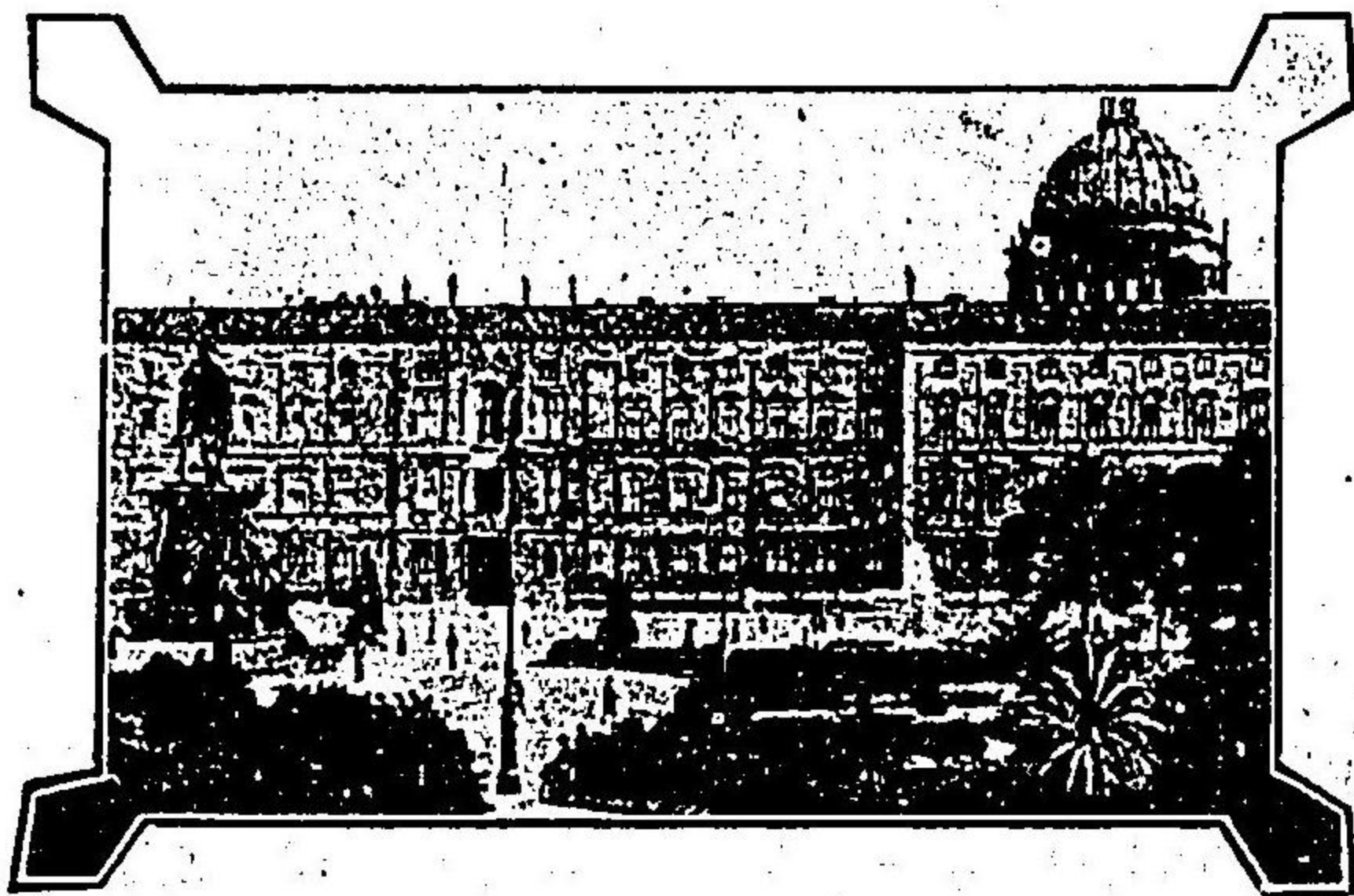
(像肯帝大廉維)

神車を驅るの像は、頗るの由來附きてある。此の像は、もと此の門の上に、外方に向つて立つてゐたのを、ナポレオンの蹄にかゝつて、巴里に持ち歸られ、暫くは巴里の凱旋門の頂上を飾つてゐたのである。然るに、魯佛戦争に再び之を獨逸に取りかへしても、そのブランデンブルグ門上にすゑられたが、今回は、内方に向はしむることゝなつて、今もそのまゝに都門を鎮護してゐるのである。此の門のすぐ内側の廣場を、バリザ・ブラッツといふが、さながら巴里の美觀にあてがれて、此の一角

にそれを擬したものと見える。

シャーロットテンブルグには、獨逸皇室の廟があつて、フリードリヒ、ヴィルヘルム二世及び王妃ルイゼの墓、維廉大帝及び皇后の墓がある。それから博物館にも、カイゼル・フリードリヒ博物館といふのがあり、國民記念碑にも矢張普魯西亞興國に關する彫刻や、ビスマルクの像などがある。かういふ風に、伯林はどこからどこまでも、普魯西亞の誇りといふことが中心になつてゐる觀がある。

余の伯林にゐた時、京都大學の坂口教授にあひ、氏の好意によつて、如上の觀光に一入の史味を賞し、古伯林や、ポッツダム、ブラッツヤ、ルツテル記念碑や、伯林最古の



(獨逸皇帝宮殿)

マリヤ寺や、伯林最高のクロイツブルグ公園などは、夢の間に過ぎてしまつた。

二一 獨逸人の感心な點

獨逸は新進氣鋭の國である。巴里や倫敦に住みなれて、伯林に来て見ると、いかにも淋しく、田舎に來たやうな想ひがして、國民も亦英佛の如くに磨きあげられてゐない感がある。併しながら、其の中に獨逸人の獨逸人たる所が發揮せられてゐる。勤儉尙武の風も、此の間に歴存してゐるのである。ウンテル・デン・リンデン街の中程に、之と十文字に交叉する、フリードリヒ街といふがある。此の交叉のあたりは、伯林の繁花中の繁花なる處と稱せられてゐる。東京でいはいは、銀座である。此の伯林の銀座通りを通る婦人が、絹布を纏ふ者のないことは、注目の價值がある。尤も暮夜の散策や、夜會にゆく時などは別であるが、余のこゝにいふのは、晝のことである。又獨逸人

の持つてゐる金時計や金の指輪なども、十四金以上のものは用ひないことにしたる勤儉興國の風が、今日に至るまで存してゐる。貧乏世帯の者が、徒らに十八金廿金のでかゝる物を見せびらかしてゐるのは譯が違ふ。それにて十四金以上のものになると、主として輸出物として製造するのである。品物の話になつたから、序に獨逸人の商工業のやり方について少しく述べようと思ふ。彼等は學術を應用して、出來る限り品物を安く、且つ堅固に作りあげて、世界市場の競争に、凱歌をあげようと工夫してゐる。伯林の物の安いことは、已に定評のある所で、其の物を仔細に點檢すれば、英國製のものなどよりは、遙に劣つてゐるのであるけれども、其の物がよく工夫されてゐる點に於て、又役に立つ點に於て、敢て他國の品に劣らないのである。學者は一心不亂に發明發見に腐心して、嘗て勞苦を厭はない。一旦發見があると、實業家特に工業家は、我一にと争つて之を實地に應用せんことを企てる。學問上の新發見を應用して、他國民の爲し能はざることを爲し遂げて、

平和の戦争にも勝利者たらむことを企てる。そして此の企てが、着々實現せられるに至つては、我々は唯羨むの外はないのである。



(孫 皇 の 逸 獨)

斯の如く廉價に物を拵へるが、外觀を美にする點に於て、敢て人後に落ちない。伯林の町を見てもさうである。新らしいからとはいひながら、いかにも綺麗である。特に理想の町として作つたといはる、ピスマルク街が、いかに立派であるかを見よ。車道、人道、馬道はいはずもがな。中央には四時一條の花壇がつゞいてゐる。家の高さも制限があつて、米國の如く驚くべき高いものもなく、又我國の如く低い家も少い。何から何まで獨逸流で、整然としてゐる。そして家の内に這入つて、一々物に當つて見ると、矢張安普請の